
ウィズアウト

イラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィズアウト

【Nコード】

N2051F

【作者名】

イラル

【あらすじ】

ここは魔物と人間が対立する。そんな世界。力が総てを決める。そんな世界でもあるのだ。その中で、父を亡くした少年ラジウは父の残した城。古城にやってくる。そこで出会ったのは……？

序章 小さな王の誕生

序章 小さな王の誕生

ここは魔物と人間は対立する。そんな世界。

その中でどれだけ戦乱が繰り返されただろうか。

ある時は魔物が世界を治め、ある時は人間が世界を治めた。

現在は魔物の統一する世界。

それは人がたやすく死んで行くということ。

魔物の圧倒的な力というものに押さえ付けられて。

力が総てを決める。そんな世界でもあるのだ。

「父上！父うええっ！」

ここにも一人、力で押さえられたものが居た。

彼の名はラジウ。金髪の髪は短く切り、気が強そうなきりつとした眉にまだあどけないくりつとした瞳と顔。先刻まで彼は、何不自由なく暮らしていた。胸を張って誇れる父と共に。

ラジウの父は一国の王で、民からの信頼は絶対なものを獲得していた。頭も切れ、何より子供には優しいことから、ラジウにとって自慢の父であったことは誰の目からも明らかだったのである。しかし、彼の父は国を守るために首から上が無くなって子供の元に帰ってきた。

魔物の力に屈してしまったのだ。国の平和と引き替えに。

「ラジウ様！落ち着いてください！」

布を被せられ、板の上に乗せられた父の体を、歪む視界でラジウは見つめていた。彼の目は大きく見開かれ、唇は青く密かに震えている。

ラジウが父へと手を伸ばそうとした時、彼の視界を塞ごうとするように、彼の前に立つ銀髪の青年が居た。腰まで伸ばした銀髪に弱々しそうな垂れ目。頭には上部と顔の部分だけがない、耳と後頭部を隠す薄黄色い布を巻き付けていた。布の下の切目の部分には白と黄色で模様が描かれている。

青年は必死でラジウの視界を塞ぎ、彼を抱きしめた。

「クレクっ……父上はっ！」

青年の名はクレク。ずっとラジウとラジウの父に従っている者だ。ラジウは視界を塞いだ彼の服を力一杯に握り締めた。それから、額の高さにある彼の腹に頭をぐっと押し付ける。

なんで？。と小さく呟き大粒の涙を流すラジウを、クレクはただ抱きとめてその場に立つしか術を知らなかった。

しかし、この場にいるのは彼らだけではない。彼ら以外の人が素早くラジウの父を何処かへ運んでいってしまう。

父の姿を見送ることなく立ち尽くすラジウ達に、陰が三つ四つ近づいてきた。

「ラジウ様。この度は大変残念な結果になってしまい。遺憾であります。」

決まりきったその台詞にラジウはピクリと体を反応させるが、クレクの腹に頭部をつけたまま動こうとしないうえに、黙り込んでいる。ただ、手だけはクレクの服をより強く掴んで小さく震えていた。

近寄ってきたのはラジウの父に遣えてた者達である。だから、ラジウにもクレクにも面識はあった。

「しかしながらラジウ様。いつまでも感傷に浸ってはいられません。この国には王が必要なのです。前王がお亡くなりになられた今、貴方しかおられないのですよ！」

先程とは別の人物が真剣にラジウに言った。だが、ラジウが反応を示す前にクレクがその者達を睨みつける。

「こんな幼いラジウ様にそんな重大なことをさせるおつもりですか！？しかも前王が亡くなられた感傷に浸ることさえするなおつしやるのですか！？」

声は静かだった。静かだが、低く怒気をはらみ、責めているような口調である。

明らかにクレクは彼らに対して怒りを露にしていた。ただ、ラジウ

を抱きとめる手にはいつもの優しさが残ってはいるが。

「クレク、私達がいつてるのは形上。上辺だけの話です。」

クレクと同じように静かな声。しかしその声は無機質で感情を読み取ることができないものだった。

クレクが反論しようと口を開きかけた時、ラジウが彼から離れた。それを驚いた目でクレクは追う。

「いいよ。やってあげる。何をすればいい？」

ラジウは顔を下に落としたまま体を回転させ、彼らに向かって言った。普段と変わらぬ声色にクレクは少しほっとしたものの、何をしだすのかとドキドキハラハラでラジウを見守っている。

「流石ラジウ様です。物分かりがよろしいようで。まず初めに明日の朝、民の前で演説をしていただきたいのです。文はこちらで用意いたしますので。」

「うん。わかったよ。後で部屋持ってきて。明日の朝まで自分の部屋にいるくらいいいかな？」

静かな声と、ラジウの会話。一方は相手を見下ろすように凝視し、一方は顔を落としたままの姿勢で問いかける。

「もちろんですよ。承ってください誠にありがとうございます。ラジウ様。」

ラジウの返答に安堵したのだろう、笑みを零してからラジウの前に四人は膝まずいた。ラジウはうん。と小さく返事をする。踵を返す。

彼の赤いマントがたなびく。

「クレク。行こう。」

「はい。ラジウ様。」

歩き出したラジウの後をクレクは追った。膝まづいている彼らを見ないようにして。部屋につくまで決して、ラジウもクレクも口を開こうとはしなかった。

部屋について、ラジウは何を思ったのか部屋の中をあさり始める。

「ラジウ様……？」

クレクが眉を潜めてラジウの行動を目で追った。彼は大きな鞆に服などの身近なものを次々に詰め込んでいく。

灯りもつけない薄暗い部屋。けれど、しっかりとした棚や質素だがしっかりとしてる絨毯。それらによって部屋の形は浮かび上がっていた。

ラジウは鞆にある程度物をつめ終わると、窓を開け放ち空を見た。

「ねえ、クレク。僕が何やってもついてきてくれる？」

風がラジウの光る髪をなぞて、窓の内側にある布を揺らした。ラジウの目には自分の目と同じ爽やかな青が写り出されている。

ラジウの後ろ姿は、昔も今も変わらないあどけなさと、悪戯じみた雰囲気をかもしだして、クレクにふと笑みが零れさせる。

「当たり前ですよ。私はラジウについていきます。貴方がどう変わるかと、どんなことをしようと、味方が誰一人いなくなるかと、私は貴方について行きますとも。」

「ほんとうに？父上がいなくなったのに？」

クレクの答えに、ラジウはまだ疑うかのように言葉をかけた。ラジウは空を見上げたままで、一切クレクを見ようとしなから、クレクからは彼の表情を見ることができなかった。

「ええ。私は前王ではなくラジウ様。貴方に忠誠を誓いましたから。」

クレクは一礼をして笑む。そんな彼にラジウは窓から一気に駆けてきて抱きついた。

ラジウがクレクを見上げ嬉しそうに微笑む光景は、いつまでも変わらない部屋と同化している気さえする。そのくらい、微笑ましい光景だった。

次の日。ラジウは城の一部で、街に面している場所に立っていた。そこからは、集まっている大勢の人々を見渡せる。もちろん天井がないそこは、空や街さえもよく見える。昨夜受け取った紙の束を片手に、ラジウは皆に見えるように塀を登った。あまりにぶ厚い紙の束。それにはぎっしりと言葉が詰まっていた。そのため、初めて見た時、ラジウは眉を潜めて溜め息をついたものだ。

「ラジウ様のお言葉です。」

静かな声がラジウを促すかのように民に告げた。ラジウの周りには椅子に腰をかけた大人が数人。どれもこ難しそうな顔をしている。ラジウは小さな頃、その顔達に何度も笑いを刻んでやろうと試みたことがある。ようは悪戯なわけだが。しかし皺の入った顔はよけいに難しい顔になるだけだった。そして、額に皺をよせている顔の中にクレクの姿は見当たらない。

「この度は前王が亡くなり大変遺憾である。しかしながら、我が国には王が必要であり、彼の血をひくこの私が王になると誓おう。」

ラジウは紙の束に書かれている文章を読み上げた。それに応えるかのように観衆が喜びの声をあげる。

ラジウはそれを見て、次の言葉をつむぐ前に笑んだ。笑顔は優しい、父と同じような笑みだった。しかし、笑顔とは裏腹に彼の手は、紙の束をビリビリと破り捨てていた。いきなりの出来事に民衆は静まりかえる。

そして、ラジウが口を開いた。

「なーんて、これにはそう書いてあったけど。僕、この国の王になる気がサラサラないんだ。」

ラジウの口調はウキウキと弾むような。また、自信に満ちているような。そんな感じだった。顔は笑みがこぼれている。

紙が散々になって舞った。紙吹雪がひらりひらりと舞っているのだ。それはまるでラジウを祝っているかのよう。

「この国は僕が築いたわけじゃない。父上が築きあげたんだ。僕、父上のお下がりなんてごめんだね。だから僕は一から始めるよ。今はもう使われてない古城、丘の跡城で。」

「ら、ラジウ様。お考え直しを。」

こ難しい顔の一人が立ち上がってラジウを見る。その顔には驚きと焦りの色がありありと浮かんでいた。

ラジウはそんな彼等に向き直った。目は鋭く、怒りを露わにし、しかしその反面静かに彼は言った。

「嫌だよ。僕知ってるんだ。父上を犠牲にすること、あんたらが決めたんだって。僕は父上ののに舞い踏むなんて嫌だから。」

そこでラジウは目を閉じ大きく息を吸った。それから背筋を伸ばし顔を上げ胸を張る。目をゆっくりと開け自分の城であったそれを見据えた。その動作を恐々と見守るこ難しい顔達。

「僕は……死んで守るじゃない。死んで英雄になるじゃない。生きて……生きて守り続けるっ。生きて英雄になるんだ！自分の力で！」

ラジウのその言葉は、そこにいる者達に向けたものではなかった。もう会えはしない……この国の王だった者に別れを告げたかったのだ。

「ラジウ様！」

ラジウを呼ぶ声が下から飛んでくる。彼はその声に応えるかのように素早く振り返り城の堀に足をかけ、蹴った。彼の体が上に飛ぶ。彼は顔をもう一度城を見て言った。

「王になりたいやつがなればいい。満足だろ？」

それは下にいる者達には決して聞こえない程度の声だった。が、しかし。こ難しい顔達にははっきりと聞こえた。

ラジウはだんだんと下に落下していく。それは彼の重みで速度を増していた。

ドサッと大きな音が響き渡る。すると、辺りはシーンと静まり返った。鳥のチュンチュンといった鳴き声や、遠くにある川のせせらぎが聞こえるくらいに。

「あたた。」

ラジウが身を起こす。彼の下には見慣れた銀髪のクレクが苦笑を浮かべていた。彼がクレクを受け止めたらしい。しかし、流石に高さがあったのだろう、落下の強さに押され、ラジウともども倒れたようだ。

「大丈夫ですか？ラジウ様。」

クレクも身を起こしながらラジウに問う。彼等の隣には馬が立っていた。毛並みが鮮やかで、白い毛が風でなびく。どうやらクレクは、受け止めるさいは馬にのっていたようだ。ラジウを受けとめるために馬から落ちたらしい。

「うん。全然平気。クレクこそ平気か？」

立ち上がって馬に乗ろうとしているクレクをラジウは心配そうに見上げる。作戦ではしっかり馬の上に着地するはずだったが、どうも着地点をミスったことが気になっているようだ。

「私はそんなにヤワではありませんよ。さ、乗ってください。」

クレクは優しい笑みを浮かべ馬の上から手を差しのべた。

ラジウは片方の口だけ上げて苦笑いをしながらその手を取り、引つ張られるようにしてクレクの前に腰を降す。

「行きますよ。」

今だに静まりかえって、ただ呆然とラジウ達を見ている回りの民たちの間を、クレクは上手な綱さばきで馬を走らせていく。人垣をやつと抜けると、ラジウがクレクの脇腹から顔を出し城と大勢の人を見て叫んだ。

「僕は父上をいつか抜かすよ！もし僕についてきてくれるなら丘の跡城に来て！！」

それはまだ幼い子供特有の高い声で。必死になっていることが伝わってくるくらいはつきりとしていた。けれど、自信がなさそうに弱々しくもあつた。

馬がだんだんと人混みから離れていく。静まりかえっていたはずのその場所から、今はザワザワとした人混み特有の音が出てきていた。クレクはいったん馬を止め、街をラジウと共に見た。日は暮れ始めていて辺りを赤く染めている。街はポツポツと灯りがともされ、輝いていた。

ラジウがクレクの袖を引っ張り、そして顔で丘にある跡城を指す。ようするに街を見てないで行こう。と言っているのだ。それは同時に彼にとってこの街は何の意味も持たないのだとクレクに教えてくれた。

クレクは小さく頷くと手綱を動かしその城に向かったのだった。

城につく頃には、既に辺りは暗く、どつぷりと日が沈んでいた。闇夜を星明りが照らす。

「懐かしいね。」

暗い中に、どつしりとそびえ立つ丘の跡城をラジウは見上げて呟いた。

近く来ると城はかなりの大きさがあつた。あの街にあつた城よりもでかい。けれど、ところどころ錆ているところや崩れているところがあり、見た目は何か出そうなくらいだ。何年も使われていないのだろうツタも巻き付いている。

「はい。昔を思い出しますね。」

クレクは馬から降りると、ラジウに手をかし彼も降ろした。それから、中に入りましょう。と促し、ラジウが頷いたのを確認すると城へ足を踏み入れた。

城の中はガランとしており広さだけが身にしみる。

「ここ。あんなに賑わってたのに……今は何もないんだね。」

ラジウは残念そうに肩を落とした。

この城は彼が生まれ、また今は亡き父と過ごした場所だった。昔、城に入ったすぐの広間にはいろんな店が出ており、人で賑わっていたものだ。が、今では何もないガランとした空間とかしている。

「ね、クレク。僕……あんなこと言っただけださ……。」

ラジウは顔を落として弱々しい小さな声を発した。しかし、このガランとした空間にはその小さな声でさえよく響く。

彼はそれを肌で感じながら唾を飲み、喉をゴクリと鳴らしてから言葉をつむいだ。

「本当は……自信がないんだ。」

ラジウの言葉にクレクは彼の肩をポンと叩いた。いつもの優しい笑みのままで。

ラジウはクレクを見上げた。その顔は不安と驚きが入り混じってなるとも奇妙な表情になっている。

「自信がないなら辞めてもいいですよ。誰だって何か新しいことをする時は不安です。その不安に打ち勝っても、その後良いことがあるとは限りませんから。逃げるのも一つの手です。でも……今の貴方の望みは、逃げ出してしまうと絶対に叶えることはできませんが。」

相変わらず優しい笑みのままさらりと言ってみせるクレクに、ラジウは苦笑った。

「そんな風に言われたら僕、逃げられないじゃん。」

「別に逃げても良いですよ？貴方が後悔しないなら。自分の生き方は自分で決めてください。貴方の人生ですから。」

クレクの笑みはそのまま。けれど、クレクはラジウの性格をよく知

っていた。決して彼が逃げ出さないこと。それは彼の父ゆずりだと言うことも。それでも、辛いなら逃げ出して欲しいとクレクは思っていた。その気持ちが言葉になって出て行く。

「クレク。お前判りすぎなんだよ。僕が絶対に逃げないってさ。ただ背中を押して欲しいだけだった。ってさ。」

ラジウは頭を掻いてクレクを横目で見る。彼の言葉で自分の気持ちに気付いたことが恥ずかしかったようだ。しかし、その顔は先程よりも明るく笑みが溢れていた。それにクレクは少しほっとした。逃げ出すなら、きつと彼が後悔し続けることがように想像できたから、逃げないで居てくれて良かったと。

「そんなこと私は知りませんし、しませんよ。甘やかしてもラジウ様のためにはなりませんから。で、決心はおつきで？」

「もっちゃん！絶対に逃げないよ！逃げたらきつと後悔しちゃう。」

クレクが確認がてらに問うと、ラジウは顔を正面に向け、にっこりと笑んだ。そこには子どもの無邪気さが滲出していた。そんな彼の笑顔にクレクはさっきよりも柔らかい笑みを返す。

「それでこそラジウ様です。貴方らしい。付いてきた私達も安心しますよ。」

「は？私達？」

クレクの言葉に照れていたのもつかの間、妙な単語にラジウは固まった。片頬がぴくぴくと痙攣を起こしている。

「はい。後にいらっしやる方々ですよ。」

ラジウはギギギといった音が出そうなくらいぎこちなく振り返った。そこにはドアから顔を出している数人の少年と少女が居た。彼等の視線は明らかにラジウに注がれている。

ラジウの顔がだんだんと赤く染まって行く。

「あ、あんたら何時からそこに？」

上擦った声で問う。彼等の年頃はラジウより小さくもあり大きくもあった。ようはバラバラの年代が集まっているのだ。しかし、彼等は決して大人ではない。

「最初から。」

一番小さな女の子がラジウを凝視したまま呟いた。ラジウはその言葉に耳まで真っ赤にする。最初からということは弱気になった自分を見られたということ。それをラジウは実感しているようだ。

「っ……もう絶対に弱音なんか吐かないからなっ！！」

耳まで真っ赤にし、恥ずかしさのあまり大きな声で叫び、あまつさえ膨れているラジウは、そこにいる少年少女となんら変わりはない。それをクレクは微笑ましそうに見ていた。

「うん。ね、ラジウ様。父ちゃんと母ちゃんの仇とつてくれよ。」

「それで早く平和な世界にしてっ。こんな恐い世界嫌よ！」

彼等は未だにラジウに視線を送っている。何故自分に彼等がついてきたのか、ラジウはよくわかった。彼等と自分は同じなのだと。ラジウは手を握り締めた。仄かに暖かくなった胸がドクンドクンと波打って身体中に勇気を与えてくれる。そんな気がしたからこそ彼の顔には笑みが溢れたのだ。そして彼はこう言った。

「もちろん！」

と。元気よく。

今はまだ、小さな子どもたちが集う城だが、いつの日か彼が王になり平和な場所になるのかもしれない。

ただ、少年と少女達がクレクへと、ラジウのことを”小さな王だね。”と言ったことは確かである。

序章 小さな王の誕生
完

第一章 三通りの道しるべ(1)

第一章 三通りの道しるべ

暗闇が辺りを支配する。そんな静まりかえった夜に、活動を開始するものがある。夜行性の動物同様、暗闇のなかで目を光らせ、獲物を耐えず狙っている。人は彼等を山賊と呼ぶ。

今日も丘の跡城で、盗った獲物を競い酒盛をしようとしてきた。しかし、丘の跡城にある一室、昔ラジウが使っていた部屋では、ラジウ、クレク、着いてきた少年少女達が床に布団をしき寝っ転がっていた。

荷物を運び、綺麗に飾り付けした部屋はここしかなかったのだ。だから皆でここで寝ることにしたのである。

がたっ

静まりかえった城に物音が響く。クレクがその物音にうつすらと目を開けた。耳をそばだてるとガヤガヤとした何人もの声がする。それはだんだん大きくなり、騒音として部屋にこだました。

子ども達も目を擦り体をゆっくりと起こす。

ラジウが、自分の隣で状態を起こしたクレクに視線を投げる。

「クレク。何だろう?」

「私にもわかりません。……見に行つて来るのでここで静かに待っていてください。」

話す相手にだけ聞こえるように、二人はこそこそと会話をつむいだ。クレクは確認をするべく、音を立てないよう立ち上がる。そしてドアノブに手をかけた。

「やだ。」

「はい？」

緊張の糸をあつさりとしち破ったのはラジウ。頬を膨らませてみせる。彼の否定の意だ。クレクを止めるかのようにラジウは否定の声をあげたのだ。それに思わずクレクは聞き返してしまう。

「やだ。絶対いやだっ。」

もう一度はつきりと告げるラジウに、クレクは固まった。その彼の横に、彼の行動を気にすることなく、ラジウは起き上がって素早く移動する。

ラジウは、真剣にクレクの紫色の瞳を覗き込んだ。

「クレクがいなくなったら、彼等を誰が守るの？」

ラジウの視線が、部屋の中の少年少女達へと向けられる。結局は力がない子供ばかりがここにいるのだ。大人であるクレクが唯一頼れる存在なのは事実である。

クレクは観念したように苦笑い頷いた。

「わかりました。皆で行きましょう。」

「やった！」

小さくガッツポーズをとるラジウ。彼の目は好奇心に輝いていた。その瞳を見て、クレクは溜め息をつく。彼の座右の名が激悪戯っ子だったことを思い出したのだ。今回も何か企んでいるに違いない。そう思うと多少不安になってくる。

「さ、早く見に行こう。」

しかし、うきうきと肩を弾ませ外に飛び出してしまうラジウ。陽気な彼に続いて子ども達も楽しそうに飛び出した。これではもう、どうにも止めることは不可能のようだ。クレクは仕方なく彼等に人差し指を立て、静かにと警告をした。彼等はそんなクレクの真似をしてシーっと言う。どうやらその点に関してはしっかりと理解しているようだ。

騒ぎのする方へ音を立てずに移動すると、広間に出た。ラジウ達は壁際からそつと中を覗き込む。広間には大勢の人がいた。身なりは品の良いもの、ボロボロなものとそれぞれだ。しかし、顔は皆

「うわぁ……三流悪役っ。」

である。

ラジウの言葉に小さく乾いた笑いをしたもの、クレクは真面目な顔に戻り観察している。

そんな緊張が伝わったのだろう、ラジウも口をきゅっと結ぶと、クレク同様じつと広間にあつまる三流悪役を見た。その時

ごんっ！

「い！？」

いきなり彼等の後ろでぶつかる音がした。ラジウは思わず身をすくめ小さく声を出してしまう。なんとなく嫌な予感がし、振り返るのをためらうが、仕方なく少しの間を置き、そろりと後ろを振り替えた。

「ふえ……。」

そこには、座り込んで今にも泣き出しそうな若い少女がいた。この一番年下の少女が転んで、さっきの音をたてたようだ。額がうつすらと赤い。彼女はラジウ達が見守る中、目に溢れんばかりの涙を溜めて、大声を出そうと息を吸った。彼女以外の全員が慌てた。

こんなところで泣き叫べたら、広間にいる人相の悪い奴らに見つかるだろう。そしたら、どうなってしまうのだろうか？そんな疑問がラジウの頭のなかに浮かんた。

少女が大きな口を開ける。ラジウは手をばたつかせるだけ。混乱して何をしていたのかわからないのだ。

ぽふっ

少女の泣き声が出るっ！そう思った瞬間、鈍い音が彼等の耳に届いた。

ラジウはびくついた時に閉じてしまった瞳をゆっくりとこじ開ける。開けた視界の先にはラジウよりも年のいった少年が彼女の口を片手で塞いでいた。

もごもごと幼い少女は声を出そうとしているが押さえられているた

め、くぐもった声しかでない。

「妹がすいません。」

少年は苦笑って小さく呟いた。ラジウも頬を引きつらせながら釣られて笑う。どうやら、少女が声をあげるのは防げたようだ。ほっと安堵した空気が辺りに流れた。

「んっ！」

しかし、それも束の間。少女が苦しそうにもがきながら状態を前に倒した。

まだ成長途中の少年少女の体は、その衝撃を押さえられる程大きくはない。あつと息を飲むうちに少年と少女は倒れて転がり出した。その方向は壁がない、つまりは広間から丸見えのところである。ドテツと音がするような止まり方。スピードが落ちた二人は壁もない場所で、うつ伏せで止まったのだ。

「うつ、うつ……あーんっ！痛いよーっ！」

少女が起き上がろうともせず泣き出した。その泣き声にざわめきがピタリと止まる。そして、視線が彼等に集中した。もちろんラジウ達だけではない、広間にいる者達も啞然として彼等を凝視しているのだ。

少年がその視線に気付き慌てて起き上がる。その顔は耳まで赤く、視線がこちらに泳いでいた。また、あはは。と小さく渴いた笑いもする。

「わああーっん！わあむぐっ……。」

少女の泣き声がこだまする。それにはつと我に返る少年。彼は急いで少女の口を手で塞いだ。それから死にも狂いで少女を引きずり、元の場所に駆け戻ったのだった。

まだ辺りは静まりかえっている。少年が息を切らしている音だけが妙に煩く聞こえた。いや、ラジウ達にとってはそれよりも、自分の心臓の鼓動が煩いに違いない。あつという間の出来事にポカンと口を開け冷や汗を流しているのだから。

第一章 三通りの道しるべ(2)

「わっ!？」

ラジウをいきなり浮遊感が襲った。足がぶらぶらと床より数センチ上を行き来する。ラジウには何が起こったのかわからない。

「ラジウ様を離してください。」

常備している弓をいつの間にかクレクは構えていた。矢の先端はラジウの後ろの人物、ゴロツキの喉仏に触れるか触れない程度で向けられている。

ラジウはゴロツキの一人に服を掴まれていたのだ。

「なんだ？お前達は……？」

三流悪役は少し冷や汗を流すものの、動じることなく疑問をクレクにぶつけた。余程こういうことに慣れているのだろう。

クレクは弓を構えたまま鋭い視線で、そのラジウを捕まえている敵の後ろを垣間見た。たくさんのゴロツキがこちらに目を向けている。自分でどうこうできる人数ではないと、クレクは感じた。

「……私たちは、一般市民ですよ。住む場所を追われてここに来ただけです。貴方達こそなんなんですか？」

クレクは、相手を逆撫ではいけないと踏み、嘘を折りまぜた返答を返す。

いつ襲い掛かってくるとわからない相手に武器を降ろすことはできない。だが、こちらが敵意を見せれば、相手もこちらを攻撃してく

るだろう。仕方なくクレクは弓を降ろした。

相手を知ることと勝機が見えるはずだ。そう判断し、なるべく丁寧な口調で問いかけを付け加える。

「山賊だ。ここは人気がないから使っているだけだ。別に何の意味もないぜ。」

口の端をあげ、いやらしい笑みを浮かべる山賊にクレクは眉を潜めた。余裕綽々、そう感じ取れる笑み。

「おい！そんなことに僕の城を使うなよ！！」

今まで必死に服を掴んでいる手から逃れようとしていたラジウが、きつと山賊を睨みつけて大声を出した。それに対して大人達は全員目を見開き固まっってしまった。それから、さもおかしそうに目に涙を溜めてクレク以外の大人は笑い出した。

僕の城だってよ。そんな台詞が笑い声の合間から木霊する。

「ここは僕の城だ！出てけよ！」

なおも喚くラジウ。クレクは溜め息をついた。まったくもって自分が行っていた行動がラジウによって崩されたのだ。こんなにも山賊を煽ってしまう彼を、クレクは助けなければならない。だから強く弓を引きなおした。

「はっはっは。そりゃいいぜ。城の主を殺せばこの城はオレ達のもんになるってわけだ。」

いやらしく笑みながら賊は言った。その彼の目は実に愉しそうだ。ラジウの背中に冷たいものが走る。だから思わず動きを止めたのだ。

ろう。ラジウは暴れるのを止め、男の目に釘付けになっていた。その目は躊躇なく人を殺せるであろう残忍さをもしだしている。クレクが弓をゆっくりと上げ構えた。

ゴッ

クレクの弓は当たらなかった。ただ、強く叩いた音が城内に響く。ラジウが地面に落ち、男も地面に倒れ込む。

弓よりも早く舞ったのは、ラジウよりも少し薄汚れた金髪だった。肩よりも下に伸ばした髪は長さがバラバラで、更に言うなら右側だけ申しわけ程度に結んである。彼は地面に着地すると漆黒の瞳でラジウ達を見た。肩越しのため睨んでいるようにも見える。

クレクは、彼が男の顔に飛び蹴りを食らわせたのだと理解した。ラジウを助けてくれた彼に刃を向けることは礼儀に反する。従って弓を降ろし彼と対峙した。

「シルキア！？てめえ、何しやがる！？」

賊の一人が彼目がけて怒鳴り散らす。その目は驚きを隠せてはいない。

名前を知っているということは仲間なのだろうか？そんな疑問がクレクの頭の中に浮かび、弓を強く握らせるのだった。

「お前達を狩りに。」

少し低い声は、はっきりと告げた。顔は仄かに口元が緩んだだけで変化はない。

はっきり言ってあまり興味がない。そう言っているようだ。

「な、何故だ！？同じ山賊だろ！」

慌てて一歩後ずさる山賊達。シルキアと呼ばれた男は少し顔を歪めた後、馬鹿にするように鼻で笑った。

「一緒にしないで欲しいねえ。オレ達は正義の山賊よ？」

シルキアの言葉より先に、軽い感じの声がシルキアと反対方向から飛んでくる。声の先に居たのは、濃く黒めの赤髪を左分けにしている男だった。目はシルキアよりも丸みを帯びて悪戯っぽい緑眼だ。ただ、右目を海賊がするような三角の黒い眼帯で隠している。そして彼は子供達に刃先を向けていた男をねじ伏せていたりする。口にはクレクとは違う軽い笑みが張り付いていた。

「正義？……山賊に正義もくそもないだろう。馬鹿。」

シルキアが溜め息混じりにそう言った。

赤い髪の男はひとしきり笑ってから立ち上がり、シルキアの隣に移動する。それから口を開いた。

「というわけでさあ。オレ達と戦う？それとも逃げる？今回なら見逃してあげっけど？」

余裕の表情に見下すような口調。しかし、軽いふざけているような雰囲気。彼を傲慢過ぎる嫌なやつとは決して見せなかった。

男達が自分の獲物を握り締める動作を確認すると、彼の目は冷たく細められた。戦うなら容赦はしない。彼の目はそう言っていた。山賊たちはちゅっ舌打ちをすると獲物をしまい込んだ。

「くそつ。アレンまでっ！逃げるぞ！！」

その掛け声をきっかけに悔しそうな顔達は散っていく。それに軽い雰囲気の子は満足そうに笑った。

城に残ったのはラジウ達、それに無愛想と軽快な男二人。ラジウ達をしり目に彼等は話し始めた。

「……逃げたな。」

「あつはつは。物分かり良くていいじゃん。正義には勝てないってな。」

逃げた奴を見送った視線のまま、無愛想な男シルキアは呟いた。それに、軽快な男アレンは笑いながらまたふざけた言葉をつむぐ。それに呆れた目を向け、シルキアはため息を吐いた。

「……まだ言うか。馬鹿。」

「はは。団の名前は正義だから。」

「何時の間に……。」

ケタケタ子供ように笑いながらも明るく言うアレンに対して、驚く様子も見せずただただ突っ込みを溜め息混じりに入れるシルキア。いつものことなのか、もうすでに呆れた視線を彼に向けることはない。

しかも、何やらアレンの言葉に納得しているらしく、考え込むようにシルキアは手に顎を乗せた。

なんでこんなにも違う二人が一緒にいるのかと、ラジウは疑問に思ったらしく、眉を額に寄せている。

「ついさっき。」

そんなシルキアに、追いつちのごとくきっぱりとつげるアレन。それに、ついにシルキアはそうか。と呟いた。ラジウは、それでいいのか！？と思わず突っ込みたくなったが、そこはそれ。我慢をするのだった。

あまりに不自然な視線だったのだろう、シルキアがラジウ達の視線に気付き、アレンを肘でこづいた。それから顎でラジウ達を指す。

「あ、悪いね。急に割り込んだりしてさ。」

くったくのない笑顔。まるで詫びれた様子ない。

「いえいえ。大変助かりました。ありがとうございます。」

クレクもいつもの笑顔のまま対応した。そして軽く頭を下げる。それにアレンは笑って一言。

「はは。ならお礼にお茶でも付き合ってよ。お嬢さん。」

「私は男です。」

その言葉に、一瞬にしてクレクの笑顔から殺気が放たれた。アレンの笑みがそれに対して少し引きつる。

「あはははー。ごめん、ごめん。女みたいな顔……。」

言葉はヒュンという音に遮られた。アレンの右頬から一筋の赤い血が伝う。クレクが彼に向かって躊躇なく弓を放ったのだ。

そして、クレクは満面の笑みで言った。

「はっ倒しますよ?」

場が静まりかえった。むしろ固まったと言った方が的確であろう。クレクは女っぽい顔立ちをかなり気にしているようだ。彼にとつて女顔、女みたいは禁句になる。トラジウは心に留めるのであった。

第一章 三通りの道しるべ(3)

「うんと、俺。この城の主でラジウって言うんだ。こっちは保護者のクレク。後ろにいるのは俺の仲間。」

シンとした場の雰囲気はどうにかしようとラジウは懸命に自己紹介をする。

「あつは。こんなちっこいのが主？ちゃんちゃらおつかしい。」

アレンは、頬の血を拭ってから気にした風でもなく、相変わらずふざけたようにラジウをからかう。
そんな彼にラジウは頬を膨らませてみせた。

「ちっこくつても、主だよ！あんたらは何なのさ？」

「ああ、悪い悪い。オレはアレン。山賊の頭だよ。こっちはシルキア。オレの子分。」

怒ってじと目を向けるラジウに、アレンは笑いながら説明した。説明直後にガツという音がして、さっきとは逆の頬から血が滴り落ちた。一瞬身を硬直させるアレン。シルキアと彼の延長上には、柱に刺さった小さなナイフがあった。

「……何すんだよっ!？」

アレンは慌てて振り向きシルキアに食ってかかった。

「ムカついたから真似しただけだ。」

「真顔で言っなーっ！」

無表情のまま言うシルキア。しかし、ナイフを投げられたアレンにしてみれば心臓ばっくばく。怒らずにはいられない。身体をわなわなと震わし、怒鳴りつける。

「いつものことだろ。」

ただ怒ってみても、シルキアは相変わらず無表情でしれつと答えるだけだった。アレンはため息をついて、もういい。と小さく呟いた。そして、ラジウ達に向き直る。それから、気を取り直してまた話始めたのだった。

「ちなみに山賊っついても、一般人からは盗らないからな？ だいたいの同じ山賊か、悪い金持ちがターゲットだ。いわゆる義賊ってやつさ。」

胸を張って自信満々に台詞を紡ぐアレン。

「義賊と言っても、誰かから物を取りあげることに変わりはない。」

「まあな。」

しかし、シルキアのチャチャによりアレンは苦い顔をした。無表情で真面目に言うシルキアに、冗談交じりのアレンの台詞は先ほどから空回りしてばかりである。

苦笑って頬を掻いているアレンを尻目に、シルキアはラジウの前に進みでた。ラジウに視線を合わせようと片膝を付きしゃがむ。その顔は、額に皺がより不愉快そうだ。しかし、目だけはラジウの青い

目とかち合い、しつかりと真剣さを伝えている。

「な、なんだよ？」

目の前に来たシルキアはまったくしゃべる気配がない。だから、内心ラジウは焦り、どもりながらも話しかけた。じゃっかん腰が退けているように見えるが気のせいだろう。シルキアの目をしっかりと見据えているのだから。

「……何故、お前達はここにいる？」

シルキアはラジウの目を見たまま言った。静かな低い声。それにラジウはドキっとしたらしく、少し体を固まらせた。

「えと……この城から僕……新しく頑張ろうと思って。」

ラジウはたどたどしく答えながら目を泳がしていた。どうやら考えがうまくまとまらないようだ。しかし、そんな彼を、シルキアはずっと見つめている。それが余計にプレッシャーとなってラジウを押しつぶしているのだろう。

「親はどうした？大人は、この頼りない保護者だけか？」

シルキアの言葉に、クレクがラジウに走り寄ろうとする。しかし、アレンがそれを腕で遮った。そして、首を横に振る。そんなアレンの目は、さっきまでの悪戯じみた目ではなく、真剣そのもので。さらに言うなら、彼の片手にはキラリと光る短剣が握られていた。それらは全て、クレクに動くな。と告げている。

「母上は知らない。父上は……父上は、この間死んで……残ったこ

の城で、僕は……。」

ラジウは答えるも、だんだんと声が小さくなり、視線も少しづつ下がっていく。最後には、完全に下を向き、言葉を詰まらせた。それを読み取ったのか、シルキアが間髪入れずに言う。

「貴様はまだ、親が恋しいようだな。」

「ちがつ！」

シルキアの言葉に勢いよく頭を上げ、目を見開くラジウ。そして、必死に否定の声を上げた。

「なら、その顔は何だ？不安でいっぱいと言った感じだが？」

シルキアの視線の先、ラジウの顔には、流れる透明な滴が姿を現していた。表情も眉は八の字に曲げられ弱々しそうである。

「……。」

ラジウは両腕で涙を懸命に拭き、シルキアをキッと見た。しかし涙は、ラジウが必死に止めようとしても、次から次へと溢れでてきてしまう。ラジウは唇を強く噛んだ。

「まだ、父の死を受け入れられていないんだ。貴様は。」

シルキアの淡々とした無感情な口調。さらに、突き刺さるような言葉は、ラジウをドキンとさせた。彼の言葉はラジウの心を見透かしているようで、ラジウは言葉を詰まらせ、再び下を向いてしまった。そんなラジウをじっと見つめているシルキアは、涙を気に止める様

子はなくさらに言葉を続ける。

「ここは、ある意味戦場だ。府抜けたガキは帰れ。邪魔なだけだ。」

端的な言葉を言い放ち、シルキアは立ち上がった。

「行くぞ。」

アレンにそう言うと、ラジウ達に背を向け、さつさと歩き出してしまふ。自分の言いたいことを言い放ち、相手への弁解の余地を与えない。それは、ラジウにとって手堅い痛手を生み出した。

「あー、もう。自分勝手だなあ。」

アレンは苦笑いをしながら短剣をしまい、シルキアの後をついていく。

「あ、そうそう。オレもシルキアと同意見なんだ。」

しかし、途中でピタッと止まり、振り返った。そして、言葉をつむぐ。

「戦いの場に、弱い奴は邪魔なだけ。ホゴシャさんはさ、ここに山賊が出るって、知ってただろ？こんな大人数の子供を、一人でなんて守れないのに、こんなところに来るホゴシャさんの気がしれないね。まあ、ついてくるガキもガキだけど。そんじゃな。」

軽い口調なのに、軽蔑しているような冷たい視線が言葉に冷酷さを持たせていた。言葉の冷たい痛さがラジウ達に突き刺さる。アレンは踵を返し、既に見えなくなったシルキアを追った。

「うわあああああゝあゝ！！」

残されたラジウは膝をつき、大声で泣き出した。先ほどとは違ってかわって大粒の涙が床へと後を残す。

アレン達は姿を消し、城にいるのはラジウとクレクと少年少女のみ。ラジウの泣き声は悔しくて悔しくて、言い返せない自分が情けなくて、死んでしまった父が恨めしくて、残されたことが寂しくて。そんな感情がひしひしと伝わってくるくらい悲しい泣き声で。そんな泣き声は、次から次へと他の子供に飛び火した。

小さな子供からラジウに続いて泣き出して、最後には全員が泣いて泣いて……悲惨な泣き声だけが城に木霊する。

そんな中、クレクは眉を潜め黙っていた。それは、この状況で自分はどうしていいのかわからず、ただ見守ることしかできなかったから。だからクレクは、自分の力のなさを改めて実感していた。しばらくして、泣き疲れて眠った子供達を、クレクは寝室へと運んだのだった。

もう、時計の針は次の日の朝を指しており、辺りも段々白く明るくなってきた。

第一章　三通りの道しるべ（４）

１日寝て、２日目の昼になっても、ラジウにはいつもの元気がなかった。起きてはいるものの、布団を被り、ベットの端に足を抱え座り込んでいる。食事は少し口をつけるものの、ほとんど残し、クレクはそれが心配だった。けれど、彼はラジウに無理矢理食べるなどは決して言わなかった。ただ、見守っているだけ。

今日も他の子供達は庭で遊んでおり、クレクはラジウのそばで本を読んでいた。

「おーい！」

広間の方から、小さくだが声が聞こえてきた。クレクは疑問に思い、本を机に置き耳を澄ます。

「誰かいらないのかい!？」

少し怒ったような高い声が、さっきより大きく聞こえた。声からして、女性が若い男。クレクはラジウに、ここで待つよう注意を促し、広間へと出ていった。

「はーい、今行きます！」

クレクは、広間に向かいながら大声で返事を返す。なぜなら、その声はここにいるであろう人に、ずっと呼び掛けていたからだ。

「ああ、いたいた。」

広間に出ると、白衣に身を包んだ女性が立っていた。

彼女は、青とも緑とも言えるような長い髪を、お団子状に結んでいる。顔は美人とはいいがたいが、引き締まった気の強そうな瞳が独特で。それが、彼女の魅力なのだと、クレクは思った。けれど、彼女をクレクは知らない。見たことがない顔だ。

「えつと……。」

「ああ、私はキヴィ。医者です。一応。」

キヴィと名乗る女性は、にっこりと笑んだ。

最後の言葉が多少気になりはしたが、クレクもキヴィ同様に笑みを浮かべ、言葉を返す。

「私はクレクです。キヴィさんは、この城に何か用ですか？」

「ええ。と、いうわけで、ジャマさせてもらうよ。」

キヴィは、なかば強引にクレクが来た方向に歩き出す。そんな彼女の行動に、クレクはポカンと口を開けてつつ立っていた。

「何をモタモタしてるんだい？とつと子供のとこまで案内しな。」

ポケットとつつ立っているクレクに、さつきよりも低い独特の声で、キヴィは言った。

彼女は見た目からして、明らかにクレクより年下だ。しかも、面識などまったくないはずなのに、彼女はきつぱりと次の行動を彼に指示している。

どうやらこのキヴィという女性は、気持が高ぶると、いつもの口調に戻るらしい。と、クレクは勝手に解釈をした。そして、足早にキヴィを追い、一緒に歩き始めた。

「キヴィさんは、ラジウ様をご存じなのですか？」

「いいえ。まったく知りません。」

さらりと答える高い声に、クレクはその場に立ち止まった。キヴィは気にも止めずに、廊下を突き進む。

「私は、シルキアからここに来るように言われただけです。」

不思議そうな顔をしているクレクに、キヴィは振り向きもせずと言った。

「シルキア？」

「寝癖ばっかついてる金髪で、無愛想な奴さ。アレンっていう、赤髪の軽い男と一緒に、あんた達に会ったって言ってたけどねえ。」

「ああ……あの山賊の。あの方が？」

「あいつらが山賊なんて、ちゃんちゃらおかしいね。なんだかんだであいつ、子供好きなのよ。」

いぶかしげに首を傾げるクレクと、豪快に笑いながら歩くキヴィは、まるで正反対。

クレクは苦笑って、キヴィの後を追いつ、彼女の肩を掴んだ。

「キヴィさん、ここですよ。」

そして、左の扉を親指で指す。キヴィがさっさと歩き過ぎて、ラジ

ウがいる場所を通り過ぎそうになったのだ。

「おや、ここかい。」

キヴィは止まり、扉の正面に立つ。それから躊躇うこともなく、扉を押して開けた。ずいぶんと開けた場所で、キヴィは端から端に目を移動させる。ベットや絨毯は、暗めの赤をベースにしており、棚などでいくばかのスペースが埋まっていた。

「……誰？」

ベットの端にあった赤黒いタオルケットに包まれている何かが動いた。すると、真っ青な目がキヴィの青緑の瞳とかち合う。

「私はキヴィ。医者さ。あんたがラジウだね？」

おくすることなくキヴィは、ベットに近付いていった。そして、ベットの脇にしゃがみ込み、真っ青な瞳に自分の視線を合わせる。

「そうだけど……何？」

赤黒いタオルケットをギュッと握り直し、ラジウは後ずさるように体を動かした。しかし、壁に阻まれてそれ以上後ろへは行けない。キヴィは確認の言葉を聞くと、自分が持っていた長四角の白い固い鞆を床に置いた。それをパチンと音を立てて金具を外し、大きく見開く。そして、その中から聴診器を取り出すと身に付けた。

「診察してあげる。タダで。」

「うわっ!？」

キヴィはそう言って、にやりと笑った。かと思うと、ラジウがはおつていたタオルケットを、あつと言う間に取りあげた。金髪のサラサラした髪と、黄褐色の肌が姿を現す。真つ青な瞳が小さくなって、キヴィを見つめかえした。

「さつさと上脱ぎな。診察できないだろう？」

まだ目を大きく見開いているラジウに、キヴィは鞆から医療の道具を取り出しながら促しの言葉をかける。

その声はハキハキとしており、逆らえないような感じた。だから、ラジウはわけがわからないまま、いそいそと上着を脱ぎ始める。

ラジウが上着を脱ぎ終ると、キヴィはテキパキと診察を始めた。聴診器を胸、腹、背中と順々に当てた後、口を大きく開かせて覗いてみたり。一通り終わりラジウが服を着ると、キヴィは立ち上がって言った。

「異常なし。だね。全くの健康体だよ。」

そして、ラジウに片手を差し出す。

「元気なんだ。こんなところでウジウジしてないで表に出るよ。ほら、さつさと立ちな！」

ラジウがその手を取ると引き起こし、彼女は彼の背後に回った。また、彼の背中をグツと押して、部屋の外へ押し出してしまう。

それからパタリと扉をしめてしまった。扉の向こう側から小さく叩く音と、何かを叫んでいる声がするが、キヴィは扉を開ける様子をまったく示さない。

第一章 三通りの道しるべ(5)

「……どれだけあの子は泣いたんだい？」

キヴィは、後ろに立っているであろうクレクに呟くように言った。その口調は、さっきまでのどの声よりも低くて、真剣そのものだ。

「……。」

クレクは、その問いに答えられずに顔を下に向ける。また、返答がなくても、キヴィは言葉を続けた。

「目が酷く腫れ上がったし、喉も若干赤く腫れてたよ。それと、あの子の目は……何かに怯えている。」

「……。」

いつまでも黙っているクレクに、キヴィは振り向いてグツと彼の胸ぐらを掴んだ。そして、口を大きく開けた。

「あんたがしつかりしなきゃいけないんだろ！？ここに連れてきた、あんたが責任持たなきゃいけないんだろ！！？」

「……すいません。」

クレクを見据えて怒鳴り散らすキヴィ。そんな彼女に、苦笑い、眉を潜め、顔を歪めて、クレクは謝りの言葉を述べた。その目は、さっきのラジウの瞳よりも弱々しく輝きがない。そんな彼の表情を見て、キヴィめ眉を寄せ、やるせないといった顔

をした。

「っ…なんて顔するんだい。そんなんじゃあ、あんたの方があの子よりよっぽど辛そうで何かあるみたい……。」

「余計なお世話ですよ。キヴィさん。」

キヴィの言葉をさっきと同じ優しい声色のまま、クレクは遮った。そして、彼女の手をそっと取り外す。

しかし、声やその仕草に相反してその紫色の瞳は細められ、酷く冷たくキヴィを見透かしており、口許に笑みさえもなかった。

「さ、ラジウ様を見ていないと。また何かしでかしかねますから。」

クレクはにつこりと笑んで、先ほどキヴィがラジウにしたように、彼女を部屋の外へと押し出した。また、自分も外に出てから扉を閉める。

廊下には、ラジウが膨れっ面をして立っており、その目はさっきよりも遥かに赤みを帯ていた。そのことからして、また彼は泣いていたのであることが、二人には手に取るようにわかったのである。キヴィはチラリとクレクを見た。そこには、会った時とまったく変わらない笑顔が、自分とラジウを見ていた。キヴィは口の先端を上げ、苦笑った。まったくもって彼の内心が掴みとれなかったから。そして、溜め息をつきながらラジウに向き直る。その行動に、ラジウは眉を潜めて彼女をいぶかしげに見上げた。

「ま、いいわ。ちっこいの、おいで。」

そう言うと、キヴィはラジウの小さくて細い腕を掴み歩き出す。と言っても、廊下を横断した、手摺の部分までだが。

「よつと。」

彼女は手摺の所まで歩いてくると、ラジウを手摺の向こう側に放り投げた。

「うわっ!？」

「ラジウ様!!」

慌ててラジウは受け身を取り、草地を転がった。クレクはその様子を目を丸くして凝視する。

キヴィは周りを気にすることなく、自分もフェンスに片手をつき、向こう側に飛び出た。

「ラジウつつたっけ? あんた、シルキアに泣かされたんだろ? 金髪 of 山賊さ。」

キヴィはラジウと向かい合うように立ち、強気な態度のままに言った。

ラジウは、彼女の言葉に手をついて座ったままうつむいてしまう。

「……悔しくないのかい?」

「悔しい……悔しいけど……怖かったんだ。」

バツと顔を上げたかと思うと、声声の調子と共にゆっくりと降下していく。

「父上のこと言われて、ドキっとして。僕はここにいちゃいけない

んだ。って。僕は間違ってるんだって。そう言われた気がしたんだ……。」

目から次々に大粒の涙を流しながら、つつかえつつかえにラジウは話を続けた。

キヴィは、そんな彼の腫れた眼が更に赤くなるのを見て、眉をひそめる。しかし、クレクがラジウに走りよろうと動く前に、彼女は躊躇わず口を開いた。

「悔しかったら、見返してやりな。」

「でも……怖いよ。」

「怖かったら元を断つんだよ。奴を負かして、あんたの自信取り戻しな！」

きっぱり言い放つキヴィに、ラジウは首を横に振って小さな、今にも消え入りそうな声で呟く。それに対して、キヴィはさっきよりも大きな声で反論した。

「……勝てると思うの？」

ラジウはうらめしそうにキヴィを見上げた。

その目は勝てるわけがないじゃん。とキヴィに訴えている。

「勝つ自信がないやつに勝利なんてないね。自身を信じれない奴は、強くなてなれないよ。」

「だけどっ……！」

ラジウは大声でキヴィの言葉の最後をかき消した。拳を握り締め、肩をわなわなと震わせている。

彼も、そんなことは言われなくてもわかっているのだ。けれど、一度覚えてしまった恐怖と、敗北を認めてしまった弱さは、なかなか勝てるということに繋がらないのだ。

第一章↳三通りの道しるべ(6)↳

「だけどっ……僕は間違ってるんじゃないか。って、不安で……不安で、怖くて、勝てる気がしない。自分自身を信じられないんだっ！」

「あまったれんじゃないよ！」

大声で叫びに近いラジウの声に反論するかのように、キヴィも出来るだけの大声で怒鳴った。

びくつとラジウが身を強ばらせ、キヴィを凝視する。

「あんたは善悪が解らないほど幼いのかい！？自分で何が正しくて何が間違ってるのか判断もできないのかい！？ええ！どうなんだい！？他人の言葉に惑わされるんじゃないよっ！」

キヴィは、一気に怒鳴り散らしたせいか息遣いが荒い。

一回息を吸って呼吸を整えるとラジウを見た。反論されると思ったからだ。

「……あんたは、僕を信じてくれる？」

返って来たのは自分をじっと見つめる涙に濡れた青い瞳と、思いもよらない問いかけだった。

今度はキヴィが眼を見開いてきょとんとラジウを見る。

「僕が、正しいと思う？」

返事を返さないキヴィに、もう一度問いかけるラジウ。

青い瞳に見られてキヴィは溜め息をついた。それは、キヴィがやつとラジウが訴えかけることを理解したということ、それとその内容に呆れていることを示していた。

彼女に対して、ラジウは頬を膨らませる。

「自分で判断くらいできるよ。できるっ……けどね、人の言葉に左右されるな。なんて、無理だよ。やっぱり気になるもん。……だから、さ。」

じつとキヴィを見ていたかと思うと、恥ずかしそうに苦笑した。

キヴィは、そのはにかみ笑いに彼の気持ちが出ていることに気付く。そして、同じく苦笑って、彼の次の言葉を待った。自分が何も言わなくても、彼なら自分で言えるだろうと感じたから。

「あんたの言葉で僕を左右してよ。」

期待通りの言葉に、キヴィは思わず吹き出した。口を押さえながら笑いを堪えて肩を震わせる。

そんな彼女の反応にラジウは顔中。いや、耳まで真っ赤にして眼を反らした。しかし、表情は頬を膨らませてすねているようだ。

「っ……あんた、もう心はすでに決まってるんだね。まったく、後一押しが欲しいだなんて自分から言うなんて……ぷっ。」

キヴィはなんとか笑いを堪えて言葉を綴った。すねているラジウを、さもおかしそうに見ながらである。

「うるっさいなっ！だって、そう思っただもん！」

「あはははは。ごめんごめん。まったくあんたは……気に入ったよ。」

「
ラジウは大口を開けてキヴィに食ってかかる。顔はまだ真っ赤。対してキヴィは、涙目になるまで大爆笑。そして、その涙を拭ってポンと膝を叩いたかと思うと、立ち上がった。
ラジウは大口を開けたままポカンと彼女を見上げる。」

「ラジウ、あたしは正義なんてくそくらえと思ってる。だから、正しいなんて言えやしないけど、あんたは勝てるって信じてるよ。」

キヴィが、柔らかい笑みを浮かべ、ラジウにそう言った。すると、パアッとラジウの顔が明るくなる。それを確認して、クレクはほつと胸を撫でおろした。二人のやりとりにおろおろとしながら入るに入れなかった彼にとって、このことはとても良かったに違いない。

「さて、シルキアを見返したいかい？」

「うん！」

「勝ちたいかい？」

「もちろん！」

ラジウは涙に濡れた目を拭い、キヴィの言葉に大きく首を縦に振る。そして元気よく立ち上がった。顔は、悪戯っぽくキヴィに微笑んでいる。

キヴィはそんなラジウよりも子供っぽく、悪戯じみた緑眼を光らせた。

「よし！それじゃあ、わたしと勝負しようか！」

「へっ？」

ラジウは彼女をきょとんと見上げた。

そんなことお構いなしに、キヴィは白衣のポケットからゴム玉を取り出す。ゴム玉はテニスボールくらい。それをラジウにつき出すように見せた。

「か弱いわたしに勝てないで、あいつらには勝てないだろう？このキヴィ様から、このボールを奪ってみるんだね。時間は無制限。道具の使用は一切不可。以上がルールだよ。ほら、来な。」

ゴムボールを持っていない方の手で、キヴィは人指し指を動かしてラジウを挑発した。

「くっそー！なめないでほしいなっ！」

馬鹿にされたと思ったラジウは、一度頬を膨らませ、地面を勢いよく蹴った。一気にキヴィとの間をつめる。

「行くよ！おばさん！！」

そして、大声で宣言し、ゴムボールに手を伸ばした。

ゴンっ！！

大きな鈍い音が辺りに響く。

「だーれが、おばさんだつて！？あたしや、こつ見えても二十歳になつたばかりだよ！！？」

大きな音の原因は、横にずれてラジウを避けたキヴィが彼の頭に思いつきり肘鉄を食らわせたせいだった。やけにばかでかい声で巻くし立てながらである。また、数メートル先で止まり、振り返ると同時に、ラジウに向かって中指をおったてて見せた。ようは戦線布告である。

「そんな風に言うガキに、手加減なんてしてやらないからね！覚悟おし！」

「望むところだよ！」

痛みに頭を抱えてうずくまっていたラジウだが、キツとキヴィを睨みつけた。それからスクツと立ち上がり、またキヴィ目がけて走り出した。

そんな様子を、クレクは溜め息をついて見ている。しかし、溜め息をついているわりに、顔は微笑ましそうだ。子供相手に真剣に遊ぶキヴィの楽しそうな顔と、避けられては転がり悔しがるラジウのランランと輝くいつもの瞳に。

クレクは微笑みながらも、きつと彼女がしたことは、自分では決してできなかっただろう。と感じていた。

「さて、二人が疲れたら、きつとお腹も空くことでしょう。」

そう呟いて、クレクは屋敷の奥へと消えていった。まだまだ元気に遊ぶラジウとキヴィを残して。

第一章 三通りの道しるべ(7)

「だーっ！くそっ！！なんでキヴィはそんなに体力あるのさ！？」

したたる汗を手のこうで拭いながら、ラジウは叫んだ。汗をだらだらと流し動きも鈍くなっているラジウに対して、白衣を脱ぎ捨て薄いシャツになりつつもまだまだ軽い動きでラジウの攻撃を避けているキヴィ。

「人を体力馬鹿みたいに言わないでくれるかい！？」

キヴィは、なおもボール目掛けて飛び掛ってくるラジウを避けたついでにペシッと彼の額をこ突いた。すると、こ突かれた瞬間、ラジウはバランスを崩して倒れ込む。

「っ……まだまだーっ！」

声と共にすぐさま起き上がり、構えなおした。そこへ、クレクが戻ってくる。

「二人とも、休憩にしませんか？」

ラジウがキヴィに再び飛びかかる前に、穏やかな声でクレクが二人に呼び掛けた。

「おっ、いいねえ。」

「えー！？後ちょっとなのにー！」

口々の反応に、クレクは微笑んでタオルを二人に放り投げた。そして、庭に出るとお菓子を入れたカゴや、カップやポットを乗っけている皿を白い備え付けのテーブルに置いた。

それから二人を笑んだまま手招きしたのである。

それにラジウとキヴィは顔を見合わせ、肩を同時にすくめた。どうやら一時休戦のようだ。二人とも、クレクに誘われるまま、テーブルの近くの椅子に腰を下ろした。

ラジウはさっそく、目の前に用意されたお菓子と飲み物に手を伸ばす。

「なーんで、キヴィは僕より疲れてないのさ？」

お菓子を食べながらラジウはキヴィに食ってかかった。

「あんたが弱いからだよ。」

キツパリと放たれた返答に、思わずラジウは立ち上がる。

「まあまあ、落ち着いてください、ラジウ様。キヴィさんは、ある一定の場所では動いていなかったんですよ。」

クレクはラジウをなだめて座らせると、紅茶を飲んでいるキヴィに視線を向けた。

「なるべく最小限の動きで避けてたからね。ムダがとっても多い動きをしていたラジウより、疲れてないのは当たり前なのさ。それに、あんたは動きが大き過ぎて読み易すぎるよ。」

キヴィは自分に話題が振られたことを理解し、ラジウに向かって言い放つ。言い方は、涼しげであり興味がない、そんな感じだった。

ようするに、当たり前すぎて言われる前に気付くべきだと言っているのだ。

「しかも、今攻撃しますよ。って体全体で言ってるみたたくボールを見てますしねえ。後、勢い良すぎてキヴィさんから離れ過ぎてますし。」

さらにトドメをさすかのようなクレクの言葉に、ラジウはうなだれ机に突っ伏した。また、溜め息もつく。

ラジウには戦うという経験がない。それが何より自分の弱点に気付けない理由である。だからこそ、キヴィもクレクも彼に言葉によって伝えようとしているのだ。伝えたからといってすぐ実践でできるとは思っていないが、知っているのと知っていないのでは明らかに動きが異なってくるものなのだ。

「……僕って、本当に弱いんだね。」

そのことが伝わっていないのだろう。ラジウはただ落胆して弱気に呟いている。

「何言ってるんですか。弱いからこそ、強くなれるんですよ。」

クレクは、そんなラジウの背中を軽く叩いた。そして、背中を叩くと同時に、言葉でも彼の背中を押す。

「できないからこそ、できるようになる可能性があるんです。できる人には、できるようになる可能性はありませんから。できないなら、できるまで、とことんやってみましょう?」

「駄目だったところは直せばいいだけだからね。」

クレクとキヴィの励ましに、ラジウの顔はぱあっと明るくなった。そして、

「うん！絶対とってやる！」

大きな声でそういった。その彼の顔は満面の笑み。それから勢いよく立ち上がり、キヴィの腕を引っ張った。

クレクはお皿を片しながらそれを見ている。まだ太陽は高く彼らを照らしていた。

空が赤くなり夕暮れになるころ、クレクは洗濯物から掃除まで、一日にやる家事を一通り終らせていた。だから、様子見がてらに二人の元へとやってくる。

「ちょ！パスだよ！」

「へっ？」

まだ、ラジウとキヴィの姿を確認しないうちに、声とゴムボールが飛んで来た。クレクはきょとんと目を丸くし、そのゴムボールを受けとる。

「ずつるーいつー！」

甲高い大きな不満声が頭に直撃し、クレクは思わず耳を塞いだ。声の方にチラリと視線を向けると、砂や汗まみれで汚れに汚れたラジウとキヴィが倒れている。

キヴィは仰向けに荒くなつた息を吐きながらクレクを見、ラジウにいたっては腹這いになりながらもクレクが持っているボールに手を伸ばして悔しそうに顔を歪めていた。明らかに彼はボールしか目に

入っていない。

「はあ、やっと来たかい。あたしゃ、疲れたよ。保護者も来たことだし、もう勘弁しとくれよ。」

キヴィはゆつくりと立ち上がって服を叩いた。確かに顔には、疲労の色がありありと見てとれる。ラジウはそんな彼女に首を大きく横に振って抗議した。

しかし、キヴィは歩き出す。

「やだやだ！後ちよつとなんだ！！」

ラジウは慌てて立ち上がり、立ち去ろうとする彼女の腕を引っ付かんだ。

キヴィも負けじとフェンスまでラジウを引きずる。

「明日にしておくれ！」

「いーやーだーっ！！」

クレクは、キャンキャンと喧嘩をする二人の近くに歩み寄った。

「ラジウ様、キヴィさんは疲れてますし、もう日も沈みかけていますから、明日にしましょう？」

「やだやだ！！ね！あと一回！一回でいいからっ！！」

クレクのあやすような優しい言葉にも、やっと動きだした体を冷ましたくないのか、ラジウはしきりに首を横に振った。まだキヴィの腕をしっかりと掴んでいる。

「しょうがないねえ。じゃあ、あと一回だけだよ？ただし、制限時間は五分だからね。」

キヴィは溜め息混じりの言葉と笑みをラジウに向けた。OK！と言つてラジウは彼女に笑い返す。

キヴィそれを確認してからクレクに、首から下げていた金色の懐中時計を投げてよこした。

「あんた、計つといてくれ。」

クレクは懐中時計を受けとると、逆にボールをキヴィに投げた。顔はにっこりと笑み、彼女に対して頷いた。

「よーし！絶対取るよ！」

「ふん、あんたなんかに取りらせないよ！」

いちにつくと、元気よくラジウが声をあげる。さらに、キヴィもそれに答えるように声をあげた。

第一章 三通りの道しるべ(8)

「それでは、よい……スタート！」

クレクの掛け声とともに、ラジウが地面を蹴った。キヴィもゆつくりとだが右へ移動する。ラジウがキヴィの一步手前でブレーキをかけた。

「おっ……。」

キヴィもその変化に気付き、後ろへと一步退く。それを追うかのように、ラジウは状態を低くし、足をぐんと曲げる。また、彼の目はキヴィの右手に持たれているボールに注がれてはいなかった。視線はキヴィの腹。ようは目の前を凝視しているのだ。ラジウの足が伸びる。

「ちっ！」

このまま突っ込まれては避けきれないと理解したキヴィは、仕方なく左手を内に曲げた。そして、その手を払うようにラジウに向けて繰り出した。

ラジウは地を蹴ったと同時に前のめり、地面に両の手をつく。それによって、彼のスピードは失速した。次に、足を手の近くに着地させる。はたから見ると、かえるのような格好だ。

いきなり低くなったラジウのせいで、キヴィの左腕は宙を切った。彼女の腕が自分の頭上を通りすぎると、ラジウは勢いよく手足のバネを伸ばして、キヴィの右手目がけて飛びかかった。

「しまった！」

避ける前に、キヴィにはラジウの体重がのしかかる。だから右手を軸に、キヴィは後ろに倒れこんだ。

ラジウは彼女と違って、軽々と地面に着地し、両手を高々とあげバンザイをしている。

その手にはゴムボールがしっかりと握られていた。

「やったー!!」

「あーあ、やられちゃったねえ。……よくやったよ。」

苦笑いをしながら立ち上がったキヴィが、ラジウの頭を軽く叩いて褒める。

「へへ。だって、キヴィが攻撃する時は読みやすいし、した後は隙があるって言うてたからね。やってみようと思ってさ。」

照れて頭を掻くラジウ。顔は嬉しそうで、ほんのり赤い。

「ね、クレク！時間は？」

ラジウはクレクに駆け寄って、フェンス越しに聞いた。クレクを見上げるその目は、とても強く輝いている。

「約一分ですよ。素晴らしい戦いぶりでしたね。ラジウ様。」

クレクはラジウの頭を優しく撫でて微笑んだ。

そこにキヴィも駆け寄ってきたかと思うと、ラジウよりも先にフェンスを飛びこえた。それからクレクと向かい合って苦笑う。

「悪いんだけど、今日はここに泊まってもいいかい？今から帰ると、家につく頃には真夜中になっちまうよ。」

「ええ、どこでも空いているので好きに使って下さい。お風呂は右の方に、夕飯は食堂が左の方にありますので、お気軽に使ってください。」

「わかったよ。ありがとう。」

クレクは微笑みをキヴィに向けた。そこにフェンスを登りながら、ラジウが割り込んだ。

「キヴィ！いつそのこと、ずっとここに住んでよ！」

「考えとくよ。」

背中を二人に向け、キヴィは片手をあげた。そして去っていく。ラジウに満面の笑みが溢れているのを見て、クレクはまたラジウの頭をそつと撫でた。また、キヴィが去っていった方向に、深く頭を下げたのだった。

太陽が高く登り、もっとも暑くなる時間帯に、ラジウは目を覚ました。久しぶりにぐっすりと寝れたことに、大きな欠伸をしてから嬉しそうに笑む。

ベットから降りて着替えると、勢いよく扉を押し開け、廊下に飛び出した。

「クレク！キヴィ！」

二人の名を呼び、キヨロキヨロと辺りを見回す姿は、とても元気で子供っぽい。

「こつちですよ。」

ラジウの声に返答が返ってくる。声のする方を見やると、フェンスの外。ようは庭で、クレクとキヴィが白いテーブルを囲んでいた。テーブルの上にはカップとクッキーの入ったお皿がのっている。どうやら二人でお茶をしていたようだ。

ラジウは二人に駆け寄った。

「おはよう！クレク、キヴィ。」

『おはようございます。ラジウ様。』

ラジウの挨拶に、二人はハモって挨拶を返した。

ラジウは驚いて、きょとんとしながらキヴィをみる。

「どうしました？ラジウ様。」

につこりと笑んで首を傾げるキヴィは、いつものクレクそのもので。ラジウは口元を引きつらせながら一歩後ずさった。

「……キヴィ……だよね？」

「当たり前じゃないですか。何言ってるんです？」

なおも昨日とはまったく違った笑顔と口調のキヴィに、ラジウは目

を大きく見開いたかと思うと、

「……こんなのキヴィじゃない!!」

わつと駆け出し、近くの開いている扉に隠れてしまった。そして、扉からそつと二人の様子をうかがっている。はつきり言えばアホ丸出しである。

しかし、それを見てクレクはなぜか楽しそうに微笑んだ。

「なめてんじやないっつーの。このくそガキ。」

ガラツと口調と声色を変えて、キヴィは毒付いた。さっきまでの和やかな雰囲気はどこへやら、大雑把なきっぱりとした雰囲気をかもしだしている彼女。

しかし、その雰囲気にラジウは嬉しそうに反応した。

「あ、キヴィだ。」

彼女の雰囲気に安心し、ラジウは扉からそそくさと出てきた。そして、キヴィ達の元に駆け寄った。

キヴィはそんなラジウを見て溜め息をつき、背もたれにどっかりと寄りかかる。

「あんたねえ、人がせつかく大人とする関わり方でやったげたのに……まったく、子供だねえ。」

キヴィの顔は緩く笑っていた。

彼女の言葉に、へへつとラジウは笑い、子供だよ。と認める。それから彼は、クレクの隣に座り、出されたパンを頬張った。

キヴィは少し真剣な瞳に戻ったかと思うと机に肘をつき、前のめり

になってラジウの瞳を見つめた。

「ラジウ、戦う勇気はあるかい？」

「はる！」

彼女の問いにラジウは大きな声で即答した。しかし、口の中にはパンがつめこまれていたため、『ある』と言ったはずが、濁った音になってしまったようだ。

「そうかい。それじゃあ、さっそく作戦立てて、今日のうちに挑みに行くかねえ。」

爽やかな昼時、ラジウはパンを片手にキヴィの話を聞き、クレクはそれに助言する。その内容は、どのようにして敵を陥れて勝つか。である。

見た目だけは和やかな昼時の食卓であった。

第一章 三通りの道しるべ(9)

「シルキア、見てみるよ！ほら、サーカステント！」

「バカか。」

やけに元気よくはしゃぐ赤髪の男に、薄汚れた金髪の男シルキアは、細い目を彼に向けることなくすぐさま言った。

場所は、城の裏手の近くにある開けた草原。草原と言っても、大きな岩がいくつも出ており、木も大きな木から小さな木までところどころに聳え立っている。

そこよりもっと離れた、平たい何もない場所に、大きなテントが張ってあるのが見える。それを差しながら、アレンは楽しそうに目を輝かしている。

「ひつでえ。また昔みたくサーカスやろつか。って思ったのによ。」

「貴様だけでやってろ。」

しかし、さらなる連れない突っ込みに、赤髪の男はショックを隠すことができず口を開ける。

「相変わらずだねえ。」

女にしては少し低めの声が、シルキアのしている方から聞こえた。シルキアは声の主を見て、眉を潜める。

「……かえ」

「キヴィーっ!!」

赤髪の男が、目の前に現れた女の名を呼んだ。もちろんシルキアの言葉を遮って。

そこに立っていたのは、青緑の髪を持ち、キリッとした強気な瞳を持つキヴィ。彼女は白衣を着たまの姿でそこに立っていた。

「アレン、久しぶりだねえ。元気だったかい？」

近寄ってきた赤髪の男アレンに、キヴィはカラカラと笑いながら聞いた。

アレンは懐かしむような柔らかい笑みから、ニカッと子供のような笑みになる。

「元気、元気！なあ、キヴィ。シルキアったらひどいんだぜ？」

アレンはシルキアをビシッと指差し、キヴィに訴える。それがとてもおかしいらしく、キヴィは笑いながら、いつものことじゃないかと呟いた。シルキアは黙ってその様子を見ると、深いため息をつく。

「あら？アレン。その髪飾り可愛いね。」

キヴィはアレンの赤い髪に榮える、金色のピンどめに目を奪われたというよりは社交辞令である。

「だろ、だろ！シルキアってば、気持悪いっつーんだぜ？」

「気持悪いに決まっているだろう。女ものをつけるな、アホ。」

「そうかねえ。かわいけりや良いと思うけど。シルキアもつけたらどうだい？」

既に三人の会話は、世間並になっている。また、シルキアの言葉にシヨックを受けたアレンは、キヴィに抱きついき抗議する。

その様子をポカンと口を開けて、ラジウとクレクは見ていた。ラジウにいたっては内心、大人ってこんなもんなんだ。という衝撃を受けていたりもするが。

「あつ。」

ラジウはアレンと目が合った。ラジウはキヴィの後ろにいたため、彼女に抱きついて後ろを見たアレンとちょうど視線がぶつかったのである。しばし固まってしまふラジウ。

「……いたんだ。ちっさくてわかんなかったわ。」

アレンは口だけで笑んだ。それにラジウがムカつとしたのは言うまでもない。アレンの言葉に思いつきり眉を潜めている。そして、大口を開けた。

「いたよ！つか、キヴィ。こんな人とも知り合いだったの！？」

こんな人とは、明らかにアレンを指している。ラジウはキツとアレンを睨み上げた。怒っている彼をふんつと鼻で笑い、アレンはキヴィから離れる。鼻で笑われたことに、ラジウはさらに額に皺を寄せた。

「ああ、アレンとも知り合いだよ。だって、私たち三人は、おさ」

「心の友だ。」

キヴィが振り向いてラジウに答えた。が、しかし、アレンがキヴィの語尾を掻き消してしまう。また、彼の発言に全員が口を開け、目を真ん丸にし、「はっ？」と声を出してしまった。

「いや、だから。心の友。」

「恥ずかしいことを二度も言うなーっ！っ！」

「そんな嘘くさいものでまとめるな。」

アレンが再びその言葉を発した時、二つの論点がずれまくっている突っ込みと同時に、ドスッやら、バシッなどの激しい音がした。

それは、もちろんキヴィとシルキアが、突っ込みと共にアレンをどついたからである。キヴィはハリセンで後頭部を、シルキアは背中を足蹴にしていた。

「いったーっ！？冗談なんだから本気で突っ込むなよ！」

アレンは後頭部を押さえながら二人に対してわめく。

「冗談でも言うんじゃないよ！鳥肌がたっちゃまうだろ。まったく……。」

キヴィはわざと体を身震いさせてから頭を掻いた。それに対してアレンは詫びれた様子もなくおかしそうに笑んでいる。

「こいつらとは、たんなるクサレ縁さ。小さい頃、よく一緒に遊んでね。用は幼馴染みさ。」

三人の漫才に、またもやポカンと口を開けているラジウとクレクに、キヴィは苦笑いを浮かべながら説明した。

説明を聞いて、ラジウは思った。この三人でどんな風に遊んでいたのか。と。

「どうでもいいが、何しに来た？」

シルキアが、ナチュラルにアレンを無視してラジウ達に問いかけた。その顔はこの間同様、額に眉を寄せており、ラジウはつい一歩退いてしまう。しかし、クレクが退いたラジウの背中を軽く押すと、彼は顔を引き締めてシルキアを見上げたのだった。シルキアもラジウを無言で見返す。

しばらく黙ってしまったラジウだが、意を決して口を開いた。

「た、戦いに来た！」

「帰れ。」

上擦った声でやっと絞りだした言葉は、即答で却下された。案の定ピシッと石のように固まるラジウ。そんな彼を気にもとめず、シルキアはさっさと背中を向けた。

「負けるのが恐いのかい？」

歩き去ろうとする背中に、キヴィは腕を組んで挑発的な言葉を投げつけた。

「……ふん。負けるわけないだろ。」

振り向く気配さえも見せずに鼻で笑われた。キヴィがむっとしないわけがない。そんな二人をクレクが冷や汗を流しながら見守っていた。

「そんなん、やってみなけりやわからないだろ！？だいたい敵に背中みせる奴があるかい！逃げるんじゃないよ！！」

キャンキャンと吠えるキヴィに、シルキアはため息をつく。アレンはその様子を見、苦笑いをして肩をすくめた。彼の雰囲気はまさにやれやれと呆れている感じだ。

「……条件は？」

シルキアは振り返ってただ一言聞いた。しかし、それだけでキヴィは満足そうに微笑んでいる。彼女は彼がもう引き下がらないことを知っているのだ。

キヴィは踵を返してクレクとラジウのもとに戻る。

「3対3の勝ち抜き戦。それ以外のルールはその都度、変更する。変えてもいいのは負けた方。ようするに新たに戦う奴が決めるってことさ。もちろん、最後に勝ち残った方が勝ちだよ。さらに負けた方が勝った方に従うってーのはどうだい？私達が勝ったら、あんた達全員ラジウに仕える。ってことさ。」

「……こっちが勝ったら貴様ら全員、元居た場所に戻れ。」

不敵な笑みを浮かべるキヴィと、それを鬱陶しそうにみつめるシルキア。何故か、その二人の間で火花が散っている。本当のところ、大將はラジウなのだが。

第一章↳三通りの道しるべ（10）

「OK。それじゃ始めようか。こっちの1番手はクレクだよ。そっちは？」

「てきとう。」

なんですとーっ！？という内心突っ込みを、シルキア以外の全員がしてしまった。その証拠に、全員の顔に陰が入っている。

「ちょ、シルキア！？」

アレンが、慌ててシルキアを凝視する。シルキアは、額から一筋の汗を流しながら眉を潜めるアレンに視線を返すだけだった。

「……もしかして、シルキアって誰とも話してない？」

さらに汗を流しながらアレンは問う。

「……ああ、話す前に貴様が全部話すだろ？」

真顔で返答され、アレンは開いた口が塞がらなかった。そして、同時に理解した。彼が仲間の中で誰が強いのか知らないのだと。また、目が少し閉じかけているのを見て、選ぶのが面倒くさいのだということも悟った。

「わかった……オレがなんとかするよ。」

アレンが溜め息混じりに両手を挙げてそう言うと、シルキアは彼が

ら視線を外した。それから近くの岩へと腰を降ろす。

アレンはしばらく顎に手を当て考え込むしぐさをする。しかし、すぐさま顔を上げてにと笑う。何かを思いついたようだ。

「ハネッタ！」

そして、何かを呼んだ。すると、近くでドンガラガツシャン！という物が壊れる音がした。続いてドタドタという慌てた足音がこちらに向かってくる。

ラジウ達は慎重に目を凝らしてこちらに走ってくる人影を見た。

「な、なんっすか？」

走ってきたのは、大きな瞳に抜けている顔立ちをした少年とも青年ともつかない男だった。手にはオタマとナベを持ち、黄色のシンブルなエプロンを着用している。顔や服はミートや他の食べ物で汚れていた。

へらつとした表情をアレンに向ける彼。少し恥ずかしそうに頭を掻いているのは、さっき作っていた料理を引っくり返してしまったからだろう。

「あのなあ……まあ、いいや。ハネッタ、お前にチャンスやるよ。」

「本当っすか!？」

アレンは溜め息をついて頭を落としたが、すぐに気を取り直して顔を上げた。そして、ハネッタと呼んだ男に視線を投げる。

アレンの言葉にハネッタは彼を見返し目を輝かした。また、口からは驚きと喜び、警戒が混じった返答が飛び出す。

「ああ。今から戦う相手に勝てたら解放してやるよ。ってことで、こっちの一番手はこいつ。ハネッタだ。」

嬉しそうに頷くハネッタを、アレンはクレクの方に押し出した。双方が睨みあう。

ラジウはこの対決を密かに主婦（夫）決定戦。と名付けた。心の中で。

「ルールは、どちらかが参った。もしくは死ぬか。のデスマッチでよろしいですか？では、武器の使用も有りでもいいでしょうか？」

クレクは微笑むと、ハネッタに優しい口調で問うた。ハネッタは、うんうん。と頷きながらもクレクをじっと凝視している。どうやら様子を伺っているらしい。

「それでは、キヴィさん。かけ声をよろしくお願いします。」

クレクの言葉に反応するかのように、ハネッタは目を閉じた。ナベとオタマはまだしっかりと握っている。

「OK。それじゃあ、よい……スタート!!」

キヴィが始まりを告げた。同時に空が曇る。クレクは眉を潜める。目の前の光景がみるうちに変わっていくのだ。彼は自分の武器に手をかけず、それをじっと見つめていた。

ハネッタの腕が、茶色い羽根に覆われていく。足は既に鷹のような鋭い爪が姿を現し、腕同様茶色い羽根に埋め尽されていた。

「……魔鳥ですか。」

クレクは目を細めて確認する。その間にもハネツタの体は変化していた。肩まであった赤茶の髪が炎のように舞い上がり、目は模様が浮きだち大きな目が鋭くつり目になっていく。

クレクは背中の中の弓を手にとり、矢を弓に収めた。しかし、まだその武器は降ろしたまま。

ハネツタは地面を蹴って空に舞い上がった。高い空上からクレクを見下ろす。

「キーツキツキ！追いつけないだろ！？」

さつきとはうって変わった甲高い声は頭にキーンとこだまする。クレクの頭上を円を描いて飛び回るハネツタ。その飛ぶ速度はドン増すばかり。

クレクは無言のまま弓を空に向けて構えた。そして、ゆっくりと弓を引く。

そして、ためらうことなく放った。

「そんなん当たんないよ！それ！！」

「！！？」

ハネツタが掛け声をかけると、彼に向かってきた矢は光とともに灰となった。天井から光と熱が放たれたのだ。そう、雷である。

それに、クレクは眉を顰めたが、もう一度弓を構えなおす。冷静にハネツタの行動を見て、機会をうかがっているのだ。

「じゃ、今度はこっちから！」

ハネツタは思いっきり羽で空を仰いだ。すると、羽から何枚もの羽

根がクレクに風を切りながら襲い掛かってくる。しかし、クレクは微動だにせずにハネツタを凝視していた。

羽根がクレクの頬を、腕を、足をすり切る。さらに羽根は、クレクの顔を自分の攻撃範囲内に捕らえた。それを確信したハネツタの顔が緩む。

「っ！！？」

次の瞬間、ハネツタは目を白黒させながら落下していた。ハネツタの翼の根、肩に矢が刺さっていたのだ。これでは羽を動かして飛ぶことはできない。

クレクは彼の注意が散った瞬間に弓を放ち、弓の棒の部分で自分に襲いかかって来た羽根を叩き落していた。

「弓は本来。遠くのを仕留めるために作られたもの。鳥などの空を飛ぶものも例外ではありません。貴方では、この武器に勝つことはできませんよ。負けを認めてくださいますか？」

地面に落ち、矢が刺さった部分を庇うようにして蹲っているハネツタに近寄って、クレクは笑みもこぼさずに丁寧な口調で聞いた。それは、ひどく冷たさを感じさせた。

ハネツタは目を見開きクレクを凝視する。その体は徐々に初めの姿へと戻っていった。そして、足を地面で押し、彼はクレクから離れるように後ずさった。

「……ま、まいった。」

元に戻ると、ハネツタはやっとそれだけ口にした。声も体も震えている。クレクはそんなハネツタからまだ視線を外そうとしない。そして言葉を紡いだのである。

「……貴方は、魔族ですよネ？」

突き刺すような冷たい瞳がハネツタに注がれる。クレクは嫌悪感を明らかに露わにしていた。口調が、視線が、空気が、いつもに比べて明らかに異質で、相手、いや他の者にも恐怖心を煽っていた。ハネツタはそんな彼に怯えながらしきりに頷く。

「魔族の貴方が、何故そんなにも早く戦いを諦めるのですか？人間に負けを認めるのですか？何故、人の元につくのですか？」

クレクはハネツタに問いをぶつける。落ち着いていたクレクの口調はだんだんと荒げてきて、ハネツタに圧力をかけていた。また、緊張した雰囲気が進んでくる。それもそのはず、この世界では今。魔族や魔物が世界を支配している。そんな彼らが人間に負けを認めるなど、ましてや人間に従うなどあるはずがないのだ。

「ハネツタ！戻れ！！」

アレンが蛇に睨まれた蛙のごとく固まっているハネツタに呼びかけた。しかし、二人とも動こうとしない。

「……ちつ。そいつは、オレに負けたんだよ！だからオレに従っただけだってば！もう、終わりだろ！？次は、オレが相手だ！！」

「従ってる！？負けただけですか！！？」

アレンが大声でクレクにくっつかかったが、クレクはもっと大きな声で叫んだ。信じられないと言った感じで。

クレクの目はまだなおハネツタに注がれている。また、いきり立つ

たまま言葉を続けるのであった。

「魔族というのはプライドが高いんです。負けたなら、寝首を掻いてでもその相手を殺します。そういう奴らなんですっ！」

「……あんだ、いったい誰のこと言ってるんだ？ハネツタはそんな奴じゃない。」

クレクの言葉に、アレンは眉を顰めて首を横に振った。

アレンは尋常でないクレクの反応が気にかかった。彼の台詞はハネツタに向けられたものではないと感じたから。だからだろう、アレンがクレクを見る目には多少の哀れみが覗いていた。

「こいつは元から気が弱いんだ。戦うより、家事が好きって奴だよ。その証拠に、あんだに怯えてんじゃねえか。」

アレンはハネツタに近づき、腕を掴むと立ち上がらせた。ゆっくりと、相手に聞き取りやすいように言葉をつむいでいく。そうすること、自分も相手も落ち着けさせようとしているのだ。

「人間にだって、魔族にだって色んな奴がいるさ。あんだがどんな奴らを見てきたか予想は付くけどな。魔族だって、人間に怯えるんだぜ？」

アレンの言葉に、クレクは目を見開いてから段々と血の気が引いていき下を向く。頭に上った血が下がって冷静になり今の状況が掴めたクレクは、後味が悪そうに何かを噛み殺すような苦い表情をしていた。

それを見たラジウは顔をしかめて駆け寄っていき、心配そうにクレクのすそを掴んだ。

「……そう……ですね。すいませんでした。」

苦笑いをラジウに向け、クレクは彼の頭を撫でた。また、アレンとハネツタに向かって謝罪の言葉を述べる。

クレクの口調はだんだんといつもの柔らかい口調へと戻っていった。

「魔族を久しぶりに見たもので……警戒心が強くなったというか、頭に血が上ってしまったみたいで。すいませんでした。」

「そ、まあ、わからんでもないし。良いよ、もう。」

アレンは軽い口調でそう言い、ハネツタを石の上に座らせた。そして、まるで気にしていなかのようににっこり笑い、クレクに視線を投げる。

「じゃ、もう頭は冷えたみたい？」

「ええ、今はもう冷めてます。冷静ですよ。……次の戦いをお願いしてもよろしいですか？」

やっとクレクは微笑を浮かべた。アレンはOKとウィンクしてみせると、クレクの正面に移動した。

二人が次の戦闘相手だと、互いに認め合ったのだ。双方の視線が絡み合い、闘士が立ち上っている。

第一章 三通りの道しるべ（11）

「ルールはさつきと同じでいいや。めんどくさいし。」

「わかりました。それではお願いします。」

アレンとクレクは同時に頭を下げ、身構えた。キヴィの手をパン！
とならした音が合図となる。

アレンが地を蹴り、一瞬にしてクレクとの間合いを詰める。クレクが弓を構える暇を与えることもないくらいに速く。ガキンという音がした。

「その服、動きづらくありませんか？」

矢の鉄の部分でクレクはアレンの拳を止めていた。いや、アレンもクレクが矢を出したことに気づいたらしく、正確にはアレンが腕につけていた金属とクレクの矢がぶつかって音を出していた。

アレンの服は少し変わっていた。上は肩だし腹だしの短く紅いチョッキを、同じような薄い白いシャツの上に着、下は腰辺りに巻いた千切れ白布が風で中を舞っている。その布の下に黒いスパッツを穿いていた。ここまでは普通だが、アレンは腕と足に金属を巻きつけているのだ。下に白い布を敷き、金属は腕輪のように丸いので丁度布を止めているような感じだ。足の下の方では白い布を包帯のように巻き、足の裏の形にくり抜いた板を押さえている。

「ん？ああ、この金属？べつつに。」

アレンはにやりと笑ってクレクから飛びのいた。それと同時にクレクは弓を構えなおし、アレンに向かって矢を放つ。

「遠くのもの狙う道具っつーことは、接近戦に持ち込めばいいってことだろ!？」

アレンは地面を蹴って放たれた矢に自ら突き進んでいく。ぶつかるすれすれで彼を身をかがめた。矢はアレンの頭上を掠めていく。クレクはもう一度矢を放とうと、背中の子に手を伸ばす。しかし、それはアレンにとって遅い行動だった。アレンはさらに速さを増し、既にクレクの目の前に赤い目がちらついていた。ガッツという何かが刺さる音が辺りに響き渡る。

「ぐっ……。」

クレクはくぐもった声をあげ、苦々しげにアレンを睨みつけていた。アレンは、愉しそうにほくそ笑む。

状況はどちらから血が流れているわけでも、アレンの右手がクレクの首を捕まえているわけでもない。アレンの手は肘から地面に向けられ、クレクの首に平行であった。ただし、アレンの腕についていた金属が変化しクレクの首を閉じ込めていた。腕に巻きついていた金属はいつの間にか二つに割れ、反対側に反り返り木の幹に突き刺さっているのだ。

「おっと、動くとその首。切り落とされるぜ?」

金属がキラリと光る。よくよく見ると、二つに割れてたうちの片方が刃のように鋭くなっていた。

「……それが武器でしたか。」

まったく警戒をしていなかった自分をクレクは悔やんだ。甘く見た

その一瞬で戦いとは勝負がつくのだ。そう思っても苦い思いは込み上げてくる。クレクは眉を潜めて息を静かに吐いたのだった。

「そつ。早くギブアップしてくんない？ じゃないと、首切り落とすよ？」

「……。」

余裕綽々に笑むアレンを、クレクは黙ったまま睨んだ。それが気に入らなかつたのか。

「……オレ。男には容赦しないから？」

アレンの目が細くなり、冷たくクレクを見下した。ゆっくりとだが彼の腕が動き出し、刃の冷たさがクレクの首に伝わる。額から一筋の汗が流れ落ちる。それでも、クレクは黙ったままアレンを睨み続けている。アレンが動かす手を止める様子はない。

「クレク！」

緊張が走ったその時、ラジウが叫んだ。クレクやアレン、その場にいた全員がラジウに目を向ける。ラジウはクレクをじっと見つめている。クレクは落ち着かない様子でその視線を受けていた。ラジウはクレクが自分を確認したと判ると、口を開いた。

「クレク。まいった。って……言って！」

「……。」

必死に訴えるラジウの言葉にも、クレクは答えようとしない。二人

の視線が交錯する。ラジウは、息を大きく吸い込んで吐いた。

「これは……」命令”だ。クレク！」

命令という言葉にクレクはびくつと身を固まらせた。彼はラジウの顔をマジマジと見る。今にも泣き出しそうに目は潤み、口をへの字に曲げているラジウ。この言葉を使いたくなかったであろうことが、造作もなく読み取れる。

「……わかりました。ラジウ様。」

クレクはラジウに返事を返した。ラジウは、ほつと胸を撫で下ろしたが、いささか気分は優れない。それは、クレクが自分の”命令”という言葉に逆らえないのを、知っていて使ってしまったからだろう。

「まいりました。アレンさん。」

クレクは、アレンに視線を戻すと、静かに負けを宣言したのである。アレンはきょとんと目を見開き、クレクを見た。しばらくして状況を把握したらしく、金属を木から引き抜きクレクを解放したのだった。

「クレク、ケガは？」

ラジウがクレクに駆け寄ってくる。クレクは、微笑んで首を横に振った。首から少しの赤い血が滴り落ちているが、傷は浅いようだ。アレンは、二人のやり取りを眺めながら肩をすくめる。よくわからない。と言ったように。

「クレク。お疲れ様。さ、次はあたしの番だよ！」

クレクに労いの言葉をかけ、キヴィはアレンに近づいていった。胸を張り、目を輝かせ、実に楽しみだとそういつているような彼女。彼女にかわり、ラジウはクレクを連れてその場からさっさと離れた。

「キヴィ？キヴィもやんの？」

アレンは目を点にしている。キヴィが戦いに参加することが予想外だったのだろう。

「あつたり前だろ！？あたしが持ちかけたんだ、最後まで責任持つよ！」

ふんぞり返ってきつぱりと言い放つのがなんともキヴィらしくて、アレンは笑みを溢した。ただ、どうしようという気持ちもあるのか、頬がいささか引きつっている。なんと言ってもキヴィが女であり、もともと仲が良かった人物なのだから、戸惑うのは仕方がない。しかし、仲がよく知っている人物だからこそ、キヴィが絶対に引かない性格だということも知っていた。きつと何を言っても彼女は無理矢理自分と戦うだろう。そうアレンは思っ、て、しぶしぶキヴィとの戦いを受け入れることにした。

「そつ、じゃあルール決めてよ。キヴィ。」

「OK。」

アレンの返答に満足そうに笑むキヴィ。そんな彼女にアレンは苦笑い、後ろのシルキアは眉を顰めていたりする。

「ルールは。まず、武器の使用不可。アレン。あんたのその腕と足についてるやつ、外してもらうよ?」

「いやん。オレの素肌がそんなみたいの?」

「んなわけ、あるかーっ!」

冗談交じりに笑いながら言うアレン。もちろん、すぐさまキヴィのハリセンが彼の頭を打つ。

「元から露出は高いがな。」

「別に、肌を見たいわけじゃないっつーの! いいから、さっさとお脱ぎ!」

シルキアのボケに、つい怒鳴りつけるキヴィ。そして、アレンを急かすように手をパタパタと振る。

「はいはい。」

アレンは舌を出して、笑いながら素早く金属を外した。キヴィはそれを確認すると真剣な顔つきに戻り、白衣の胸ポケットから小さな青いビー玉を取り出す。

「あたしが持つ、この小さなビー玉を使う。これを、アレン。一時間以内にあたしから奪ってみせな! そしたらあんたの勝ち。一時間守り続けたらあたしの勝ち。どうだい?」

キヴィは、ビー玉を指で挟んでアレンに見せ付けた。それは、ラジウに使ったボールとは比べ物にならないくらい小さく、細いキヴィ

の指と同じくらいだった。

アレンはそのビー玉を目を細めて確認するかのようにしばらく見入っている。

「ふーん……攻撃有り？」

「ああ、もちろんだよ。」

問いかけるアレンに、キヴィはにっと笑って頷く。自信満々な彼女の態度がアレンの目に映る。アレンは彼女とビー玉を見比べながら、少し考えて口を開く。

「……じゃあ、30分でいいよ。」

キヴィはアレンの言葉に頬を引きつらせた。自信満々の自分に、時間の短縮を求めているのだから、バカにされていると感じてたのだ。

「へえ……ずいぶん自信満々だね？」

「もち！その時間で十分だからさ。」

「いい度胸だね！絶対後悔させてやるよ！！」

ニツコリ笑むアレンに、キヴィは肩を怒らせながら怒鳴りつけた。そして、キツと睨みつける。かなり怒っている。キヴィはこのゲームで負けたことが今まで一度もなかった。だから、甘く見られたことにプライドを傷つけられたのだ。

予想以上に憤怒するキヴィに、アレンは焦ったように一歩身を引く。

第一章 三通りの道しるべ（12）

「さ、それじゃあ。行くよ！」

キヴィの掛け声にクレクが時計を見て時間を計り始めた。

アレンはじつとキヴィを見る。キヴィも彼を見返した。しばらくその場の時が止まった。アレンがため息をついてからにやりと笑む。

「キヴィ、オレを甘く見るなよ！？」

アレンが動いた。声を出すと共に地面を蹴ったのだ。

「なっ！！？」

キヴィが驚嘆の声をあげる。クレクと戦った時よりも、アレンのスピードが速かったのだ。すぐさまアレンはキヴィの目の前に現れる。キヴィは目を見開いたままアレンを凝視して身動きがとれないでいる。

「もう、終わりっかな？」

アレンはそつとビー玉に手を伸ばす。キヴィは、はっと我に返ると慌てて身を引いた。額には冷や汗がにじみ出ている。アレンは、そんな彼女を薄笑いを浮かべながら見れていた。

「っ……どうして！？」

ビー玉をぎゅっと握り締め、胸にその手を押し付けたたキヴィは、アレンから目を離せないでいる。その顔は驚きの色を隠せていない。

「アレがただの武器だと思った？」

「くそっ……重りの役目も担ってっただってーのかい!？」

予想以上の速さに、いささかキヴィは頭の中が混乱していた。しかし、少し考えればわかることだった。武器を捨てることで素早さが増したならば、それは武器が早さを抑えるための重りであったという。完璧にキヴィの計画はこの予想外のことに打ち砕かれたのだ。

一時間と言ったのは、クレクとアレンの戦いを見た上での計算ではない。それが狂わされたことで、初めてキヴィは30分も危ういのではないかと危険を感じていた。

「そっ、軽いのもあるけどさ。普段は重いつけてんの。」

アレンはケラケラと子供のようになり、それから目を細めてキヴィを見た。

「諦める？」

「ばっ……ふん。バカ言うんじゃないよ！たかだかほんのすこし速くなったからって、調子にのって！そのくらいじゃ、このキヴィ様には勝てやしないよ！」

アレンに罵倒し、キヴィは意を決したように口をぎゅっと結んだ。そして、力強くアレンを睨みつける。どうやら、やっと驚きと動揺を抑えられたようだ。

「そこなくっちゃ！」

アレンは楽しそうに笑むと、再びキヴィに突進していった。

軽い攻防がしばらく続いた。

アレンは軽い動きで幾度となくキヴィに襲い掛かる。しかし、流石このゲームのベテランであるキヴィに攻めあぐねていた。残り10分。

キヴィは薄手の服になっていたが、汗が地面に滴り落ちる。顔には疲労の色がありありと浮かび、動きもだいたいぶトロくなっていた。対して、アレンはさつきよりも動きの速さが増していた。顔には余裕の笑みが溢れでている。キヴィはまたアレンの攻撃をすれすれで避けた。しかし、キヴィはよろめいてしまう。

「キヴィ！」

ラジウが焦ったようにキヴィを呼ぶ。その声に、彼女は立ち上がりアレンを見据えた。アレンは動くのを止め、キヴィを見つめ返した。その目は決して先程のクレクに対する獲物を狙う目ではなく、どこか優しさが残っていた。

「……キヴィ、そろそろ諦めたら？」

「い……イヤだね。」

吐く息が荒く、キヴィは言葉を詰まらせながら苦しそうにアレンに返答した。アレンは一旦眉を潜めたがすぐに眉を上へ軽く上げ、口の端も上げた。

「ふーん。じゃ、もらうまでだけどねっ！」

アレンは今までよりも、もっと速い速度でキヴィに襲い掛かった。

「ぐっ……！」

キヴィは、体が動かないのか避けない。そのせいで地面に倒された。アレンがキヴィの首を掴み、彼女を地面に押し付けている。だから、キヴィは起きることができなかった。必死にアレンの手にビー玉を持ってない手の爪を食い込ませるキヴィ。しかし、アレンはそれにピクリとも反応を示さない。キヴィは力の差を感じ、更に額から汗が吹き出る。

「時間もないしね。ジ・エンド。だぜ？」

アレンが、もう片方の手をキヴィの片手に握られたビー玉に手を伸ばす。キヴィは、爪を食い込ますのを止め息を吸った。諦めたのかとアレンはほっとする。

「わあああああ……！」

キヴィがいきなり大声を上げた。アレンはそれに驚き行動を止めてしまう。それを見たキヴィは、すかさず彼の腹を思いつき蹴った。男にしては軽いアレンの体は大きく飛んだ。いきなりのことに、アレンは目を白黒させながらもキヴィから離れたところに着地する。

「ぐっ……。」

腹を押さえながら、キヴィを凝視する。彼女は既に立ち上がっていた。

「アレン。なんであたしがこんな小さなビー玉を選んだかわかるか

い？」

キヴィは疲労が見え隠れする顔で、少しだけ笑んだ。アレンは眉を顰めて訝しげにキヴィに視線を送る。キヴィはゆっくりとビー玉を口元に近づけた。

「ちよっ!？」

アレンが腕を伸ばすが、キヴィはそのままビー玉を口に含み、ごくんと喉を鳴らしてそれを飲み込んだ。それを見ていたアレンは口を金魚みたくパクパクとしている。

「ふう。ビー玉は呑みやすくていいねえ。」

にやりと笑むキヴィ。アレンは目を細めてキヴィを睨んだ。冷たい視線にキヴィは鳥肌が立ち、一歩後ずさった。

「初めに言ったよな？攻撃有りって。ようは、吐かせればいいわけだ。」

アレンはキヴィの腹に狙いを定めると、地面を蹴った。キヴィには、それを避ける体力すらもう既に余ってない。立ち尽くして、ぎゅつと目をつぶり唇を強く噛んだ。決して吐き出してなるものか。と。

第一章 三通りの道しるべ（13）

「アレン！」

自分の名前を呼ばれたことで、アレンの拳はキヴィの腹寸前で止まった。体に衝撃がないことを不思議に思い、キヴィはそっと目を開ける。アレンは目の前に居た。しかし、彼の動きは止まっている。キヴィはアレンの後ろに目をやった。後ろでは、いつの間にか立ち上がったシルキアがこちらを見ている。アレンを呼んだのはシルキアだろう。

「……次にオレが決着をつけてやる。少くらは俺にゆずれ、アレン。」

シルキアは、アレンに相変わらず無表情のまま言った。アレンは一旦肩を竦めるが、顔をキヴィに向け笑いかけた。

「はは、オレ達。女には甘いよ？良かったね。キヴィ。」

そういつて彼女からすつと離れた。シルキアが帰ってこようとするアレンを睨む。達は余計だったらしい。アレンは笑って誤魔化した。キヴィはというとほっと息を吐き、その場にヘナヘナと座り込んでしまう。ラジウとクレクが彼女に駆け寄った。そこで、シルキアは三人に目をやるとふんつと鼻を鳴らした。

「立てなくなるまで踏ん張るとは、相変わらずだな。」

「仕方ないだろ！性格なんだからっ！」

「ふん……まあ、いい。さっさと退け。」

「言われなくとも!」

キヴィはラジウとクレクの肩を借りて起き上がった。シルキアの言葉にここまで食いつくならまだ大丈夫のようだ。

キヴィとアレンの戦いは、見た目的には引き分けたが、実際はアレックが引き下がったことにより一応キヴィの勝ちである。しかし、キヴィ対シルキアの戦いは、キヴィが体力的に次の戦いができないため場を降りた。となると、今度はラジウ対シルキアで、負けたキヴィ側。つまりはラジウがルールを決める番だ。やっと大将戦と言ったところだろう。

「……ところで、ルールはどうする?」

シルキアがラジウに視線をよこす。ラジウは既に戦い方が決まっているのだろう、すぐさまシルキアを見上げ口を開いた。

「シルキアって、この近くにある洞窟知ってる?」

「ああ。」

「そこでさ、次勝負しない?」

「……別に構わない。」

シルキアのそっけない返答を受け、ラジウは大きく頷いた。シルキアのあっさりとした答えにも、ラジウの心臓が大きくなるのには十分で、ラジウは落ち着こうと深呼吸をする。

そして、キヴィの歩くのを補佐するように自分の肩を貸し、彼女を連れて歩き出そうとした。

「……明日でもいいが。」

「え？」

シルキアの突然の発言にラジウは足を止めて思わず振り返った。

「どうせ、その奴も来るのだから？」

シルキアは顎でキヴィを指した。ラジウは頷いて答えたが、顔が不思議そうにシルキアを見ていた。何を言い出すのだろうかという顔だ。

「足手まといはゴメンだってさ。それに、キヴィが心配なんだよ。」

アレンがシルキアの意味を汲み取ったのだろう、あははーと笑いながら弁護する。が、アレンの頭にシルキアの手とうが入った。

「ふん。貴様が心配で気が散るだろう？そんな奴を相手にしてもつまらん。」

シルキアは痛がるアレンを無視し、ラジウの目をしっかりと見ていた。

あながちアレンの言っていることが当たっているのかもしれない。そうラジウは思ったが、口には出さず彼の黒い瞳を見返していた。シルキアはすつと背を向けて歩き出した。

「しっかり養生しなよ、キヴィ！ちっこいのも、せいぜい一晩で強

くなつてみるよお！」

アレンも笑顔で手を振り、ハネツタを退き擦りながらシルキアを追いかける。

「一言よけいだよ！明日の昼、洞窟前な！！」

ラジウはアレンにあつかんべーをして、シルキアに大声で伝えた。シルキアは片手を挙げて返事する。

彼等を見送ってから、ラジウ達も帰路へと着いた。やはり、空はいつものように赤く染まっている。

太陽が高く上り、暑さも増す時間。近くの洞窟へと向かっていく人影が三つ。

「おつ、きたきた。」

そう言ったのは、洞窟前で待つ二つの影のうちの一つだった。ラジウ達が到着するころには、既にシルキア達はその場で待ち構えていたのだ。

アレンがラジウ達に気付いて笑顔で手を振っている。それに対してキヴィも彼等に手を振り返した。

「さ、それじゃあ。さっさと始めようか。」

着いてそうそう、キヴィは取り仕切る。それに頷くラジウと彼女に視線を投げたシルキア。二人ともわかっている。とでも言いたげだ。

「じゃ、ラジウ。お願いね。」

二人の仕草を確認し、キヴィはラジウにウィンクを飛ばす。ラジウはさっきよりも大きく首を縦に振り、頷いた。

「ルールは、この洞窟内にある。えっと……宝玉をとってくること。あ、何してもOKね。」

ラジウがたどたどしくルールを説明する。ちらりちらりとキヴィを見ることから、不安さが伺えた。それを見て、どうせキヴィに覚えさせられたのだろうと、アレンは勘繰った。また、シルキアはふんと鼻を鳴らし、了承の合図をする。それから彼は、もう一度キヴィに視線を投げて口を開けた。

「……キヴィ。どうせ貴様が何か仕掛けたんだろ。」

「ふふ、たくさん仕掛けたよ。勝てるかねえ？」

「負けはせん。」

キヴィはシルキアを挑発するように口の端をあげ、にやりと笑う。それにシルキアは興味なさそうに一言答えた。こいつは本当に勝負する気があるのか。とラジウを不安にさせるくらい、顔から闘気を感じることができない。

「上等！ 私たちも後から行くよ。それじゃあ、位置について！」

ラジウとシルキアが、洞窟の前に立った。キヴィの掛け声を待つ二人。その場に一瞬の緊張が走る。

「よーい……スタート！」

声と同時に二人とも地面を蹴った。シルキアはすぐに洞窟の暗闇に姿を消す。それを必死にラジウも追った。

「大丈夫でしょうか……ラジウ様。」

二人の背中を見送りながら、クレクは不安そうに表情を曇らせ、ぼつりと呟いた。

「心配症だな、あんた。そんなに心配なら、こんなことさせなきゃいいのに。」

クレクのあまりに心配そうな顔に、アレンは肩をすくめて言った。その言葉に、クレクはアレンを一瞥したが、何も言うことはなかった。

「さ、私達も行くよ！」

手を叩いて二人の視線を自分に集めると、キヴィは大きな声で述べた。それから二人の返答も聞かずに、洞窟へと歩き出す。二人は慌ててキヴィを追うのだった。

第一章↳三通りの道しるべ（14）

さて、先に入って行ったシルキアとラジウだが、相変わらず変化のない暗闇の中をひたすら走っていた。

「……。」

両者とも、スタート時点からまったく言葉を発していない。

ラジウはちらりちらりとシルキアをかい間見た。まったく表情を変えることもなく、ただひたすらに彼は走っている。ラジウの隣をキープしながら。

スタート時に、置いてかれる！と思ったラジウは、それが不思議でしよがないのだ。だから、何度も彼を盗み見ては変わらぬ表情に、内心更に首を捻っていた。

「……なんだ？」

「え？」

シルキアが、突然声を発した。ラジウは驚いて彼を凝視する。彼は前を向いたままで走っている。

「さっきから何度も視線を寄越すが、何だ？」

「な、なんでもない！」

シルキアの言葉に、ラジウの心臓がドキッと鳴った。そのせいか、ラジウは走る速度をあげる。が、額からは汗が滴り落ちている。

「前。」

シルキアはラジウに一言いった。それに反応して、ラジウが顔を上げる。焦ってアレコレ考えていたせいで、前から来ているものにラジウは気付いていなかった。

「えっ!!?」

気付いた時には、既に彼の目の前に大きな影が迫っていた。大きな岩が前から転がってきたのだ。思わぬ出来事に、ラジウはしばし固まったまま岩を凝視する。

頭の中が真っ白で、ラジウは動けない。

岩が彼を襲う。

「バカ。」

罵る言葉と同時に、岩は止まった。よくよくみると、シルキアが片手で岩を止めている。

「……………えっと。ありがとう?」

しばらく固まっていたラジウは、やっと頭が動いたのか、シルキアに礼を述べた。

シルキアが岩を止めたことに、ラジウは驚いた様子をみせない。それは、畏のことは一応全てキヴィに聞かされているからだ。

この大きなものは一見岩にこそ見えるが、実はもつと軽くて殺傷能力の低いもので作られている。それゆえに、当たればかなり痛い、止めてしまえば大丈夫なのだと聞いていた。

「……………ふん。」

シルキアは鼻を鳴らし、岩を押した。すると、岩がゆっくりと転がり道が開けた。シルキアは振り返りラジウを見る。

「見とけ。」

そう一言発すると、彼は地面を蹴って走り出した。ラジウは慌てて彼を目で追う。

シルキアは更にスピードをあげ、ラジウを引き離れた。かと思うと、シルキアは急に立ち止まった。そして、再び振り返りラジウを見た。

「今の道、ついてこれるか？」

「え？」

「……今俺がここまで来た道で、ここまでこれるかどうかを聞いている。」

淡々というシルキア。何故そんなことを聞くのかわからずに、ラジウは首を傾げながらも頷いた。しかし、ラジウはシルキアの動きなどまったく覚えていない。ただ、置いてかれる！と思った、その感覚しか思い出せなかったのだ。だが、引くことはしなかった。仕方なしにシルキアがいる方向に一歩進みでた。

ポチ

何かを踏んだ感触と押された音。ラジウの血の気が退いていく。

「だあああ！！」

ラジウは慌てて地面から足を離す。次の瞬間、タライがラジウの居た場所に景気よく降ってきた。しかし、ラジウはほっと一息。つくことができなかった。なぜなら、着地後の自分の手が、何かを押しただけを感じてきていたからである。

案の定、木の棒がラジウの目の前から、猛スピードで彼目がけて飛んで来た。慌てて身を屈めるラジウ。木の棒は虚しく空を切った。しかし、またもやラジウの耳にカチッという無造作な音が入る。今度は、横からたくさんの槍がラジウを襲う。

ラジウは既に何かなんだかわからなくなっていた。頭の中が真っ白だ。けれど頭よりも体が反応を示した。ゴロリと転がって槍をやり過ぎたのだ。

ラジウは、荒く息をする。目の前にシルキアの足を確認すると、ほっと胸を撫で降ろした。

ポン

「ひゃっ！！？」

頭に軽い衝撃を感じ、ラジウは情けない声をあげた。しかし、頭は痛みを訴えてはいない。ラジウは不思議そうに手で額に触れた。何かが額に引っ付いている。矢みだが、先には丸い吸盤がついているようだ。ラジウは確信した。頭についているのは、子どもの玩具のような矢なのだ。みるみる顔を赤くするラジウ。慌てたように矢に手をかけた。スポン！という軽快な音が洞窟内に響き渡る。そして響く音が収まり、辺りが沈黙に包まれた。

「……………バカ。」

呆れたように何度目かの同じ言葉。それだけでラジウはかっと頭に血が上った。だから、茹で蛸のように耳まで真っ赤にして、うつむいてしまう。

「……………ふん。俺は先に行くぞ。」

いつまでも黙りこくっているラジウに、シルキアは言葉を投げた。それに小さく顔を動かし反応すると、ラジウはゆっくりと起き上がる。シルキアはじつと彼をみる。そんな中、ラジウは歩き出した。次の瞬間、ボコっという音がシルキアの耳に届く。それと同時に、いきなりラジウがシルキアの視界から消えた。シルキアが視界をゆっくりと下に移す。金色に輝く髪だけが、彼の足元にあつた。ラジウは落とし穴にはまってしまったのだ。必死に手を床にくっつけ、落ちまいと踏ん張っている。

「……………」

シルキアは黙って凝視している。たかがキヴィの罠だ、彼が死ぬことはないとかをくくっているのだ。

ラジウの手が、どんどん引きずられていく。プルプルと小刻に震え出したかと思うと、ラジウの手は床から一瞬にして離れた。

「わーっ!!」

「大馬鹿野郎っ……………」

流石にシルキアも慌てたように、ラジウの腕を掴んだ。ラジウの下の穴は暗く、底が見えない。シルキアは力を込めて、ラジウを落と

し穴から引きずり出した。ラジウが重かったのか、シルキアは少し息を荒げている。ラジウはというと、目に涙をいっぱいしながら、大きく息をしていた。

「はぁ……はぁ……もう……ヤダよ。」

弱々しく吐かれる言葉。シルキアが小さな目を見開いてラジウを見た。ボタボタと床に落ちる涙。辛そうに寄せられた額の皺。ぐしゃぐしゃになった顔。シルキアは頭を掻いてから、ラジウに片手を差し出した。

「……どうするんだ？」

「……僕、もう諦めるよ……。もう、嫌だもん……。」

ラジウはシルキアの片手を握って立ち上がるが、顔落としながら涙を拭う。拭っても次から次へと溢れてくるのだが。

「ふん……元からやらなければ良いものを……行くぞ。」

小さな声で呟くと、シルキアはラジウの手を握ったまま歩き出した。

「え？」

「帰り道などわからんだろ。」

シルキアは歩く速度を落とさずに、ラジウを引っ張りながら一言こぼした。ラジウは、自分よりも大きな少し冷たい手をギュッと握り返す。そして、遅れないようにと小走りで彼についていった。もう、ラジウの瞳に涙はない。

第一章↳三通りの道しるべ（15）

さて、二人を追っている三人組はと言うと。洞窟内のいくつかの罠を潜り抜けて追ってきていたが、今は立ち止まって話し込んでいた。クレクとアレンは同じように眉を顰めながら慌てたように汗をこぼしており、その目の前にはいつもと変わらぬ平然とした表情のキヴィが立っていた。

「ちょ、キヴィ……それマジな話し？」

「うん、ごめん。迷った。」

アレンが上擦った声でキヴィに問いかける。カラッと笑いをこぼし、キヴィはキツパリと良い放った。彼女が言う通り、三人は道に迷っているらしい。

キヴィの言葉に青ざめていく二人。

「キヴィ……どうすんの！？このままじゃあ、シルキア達に追いつくどころか、ここから出られないじゃん！！」

「ラジウ様、大丈夫でしょうか……。」

「人の心配より、自分の心配しろよ！！」

やかましく騒ぐアレンと、反対に弱々しく人の心配をするクレク。どちらにしろ、二人とも冷静さを欠き、取り乱しているのに変わりはない。キヴィに連れられるまま道を突き進んできたのだが、そんな彼女が迷ったというのだ。アレンとクレクが戸惑い慌てるのも頷けるだが。

「落ち着きなつて。進めばそのうち知ってる道にでるよ。なんとつて洞窟の隅々まで知ってるキヴィ様がついてるんだから大丈夫だよ。」

「その道案内が迷ったんでしょに！……はあ。キヴィってさあ、慌てるとか困るとかしないわけ？」

やけに落ち着き、この状況に置いてても自分を自負しているキヴィに、アレンは溜め息をついた。

しかし、キヴィはアレンの言葉に視線を上にし、困ったように頬を掻いた。

「うーん。いや、悪いんだけどねえ。1番困ってるのは、このキヴィさんだったりするんだけどねえ。」

「はっ？」

キヴィのさり気ない台詞に、アレンが疑いの眼差しと声をあげる。クレクは、ラジウのことを心配しているのか、二人を見ながら口を閉じたまま何かを考えている。

「……はあ。あたしやもう、こっから動けないんだよ。」

明らかな態度のアレンに、キヴィは嫌そうに顔を歪めて言葉をつむいだ。なんで？とアレンはまだ胡散臭そうにキヴィに聞く。キヴィはそれにさらに大きく溜め息をついた。

「はあ……。」

「だから、なんでさ!？」

それが釈に触ったらしく、アレンは不機嫌に少し声を荒げてもう一度キヴィの答えを促した。

「さっきのトラップで足をやっちまったのさ。」

渋々答えるキヴィの台詞で、アレンの視線が下の方に移動していく。しかし、遠目から見てるせいか、まったくもって正常のように見えた。

さっきのトラップとは、横の壁から矢が数本出てきた罠のことだろう。あの時も、キヴィはいつも通りサラッと避けていたような気がする。と、アレンは記憶を思い起こし、首を捻った。

その時、クレクが動いた。ゆっくりとキヴィに近付き、彼女の目の前までくると止まる。

「キヴィさん、足を見せて頂いてもよろしいですか？怪我の手当てなら少なからずできますので。」

笑顔でキヴィに向け、いつもの優しい口調で問いかける。そして、蹲ると彼女の足に手を伸ばそうとした。

「い、いや。いいよ。あたし自身医者だから、それくらい自分でやるよ。」

キヴィは慌てたようにクレクの顔の前で両手を振る。まるでクレクを拒絶するかのように。

そんな彼女の行動にアレンは眉を潜めた。何かオカシイ。そう彼は感じたのだ。しかし、アレンは口を塞いだままクレクを見やる。

「そうですね……。キヴィさん、お伺いしたいことがあるんですが、よろしいですか？」

「ああ、いいよ。どんと来なっ。」

アレンは、クレクに何か考えがあるに違いないと踏んでいた。だから暫く様子を伺おうと決めたのだ。

そうこうしているうちに、クレクとキヴィの問答が始まった。クレクは先程からの笑顔のままであり、キヴィは未だ平然とした表情である。

「キヴィさんは洞窟の中を隅々までご存じなんですよね？」

「ああ、そうだよ。」

「それはどうしてですか？」

「えーっと、小さい頃にここで遊んでね。調べ尽したんだよ。」

キヴィは、しばらく記憶を辿ってから答える。クレクは問いかけを続けた。

しかし、彼の多少の変化をアレンは見逃さなかった。ほんの一瞬彼の目が細められたのだ。

「それは罾ですか？」

「いや……。元々この洞窟には罾なんてなかったんだよ。私達が遊びで沢山の罾を仕掛けたんだ。」

キヴィの思索しながら答えた言葉に、アレンは目を見開いてから、

ああ、そう言えば。と小さく呟いたのであった。というのも、幼い頃確かに、悪戯で洞窟内に沢山の罠を仕掛けたことを思い出したのだ。念のため言っておくが、シルキアとアレン、キヴィは腐れ縁もとい幼馴染みである。

「ほう、凄いですねえ。さっきの矢が出てくる罠も凄かったですね。避けきるのが大変でした。アレを作った人はさぞかし頭が良いんでしょうね。」

「あははは。照れるねえ。でもアレはしゃがむと全部当たらない……。」

絶賛するクレクに、思わず照れながら頭を掻くキヴィ。しかし、会話の途中で固まり、動かなくなった。ギギギと言う音がしそうなくらいぎこちない動きで、キヴィはクレクを見る。話の内容からして、先程の罠はキヴィが昔仕掛けたもので、きっちり彼女はそれを覚えていたのである。まだそこには優しい笑みがあつた。

「キヴィさん、足の方はいかがですか？」

「ぐ……グッジョブ！」

クレクは穏やかな笑みを絶やさずに、もう一度問い掛けた。キヴィはそれに大丈夫の意の言葉で返事を返した。ようするに、キヴィは無傷なのである。

「……キヴィさん。時間稼ぎをいつまでするつもりですか？」

クレクのこめかみがピクリと動くのを見て、アレンは細く笑い、キヴィは頬を一回引きつらせた。しかし、すぐにキヴィはため息を吐

く。

「あーらら、バレバレだったかい？」

さつきまでの焦りや神妙さはどこへやら、キヴィはカラリとした口調で聞き返した。その顔は先程と打って変わって綻び、楽しそうだ。

「ええ。キヴィさんはこの洞窟を隅々まで知っていて、迷うことなどないと聞いてましたから。私も手当てなどはよくする方なので、足の怪我。見た目的には何も問題ありませんでしたし。ちよつと力マをかけてみました。」

「ぶつ……なるほねえ。よくできました。ってところかね。」

クレクの返答に、キヴィはウィンクを一つ。どうやらもう開き直っているようだ。ずいぶん陽気なキヴィに、クレクは苦笑した。

しかし、どうして彼女がこんなことをしたのか皆目検討もつかない状況であつたため、クレクは真剣な表情に戻ると疑問を口にした。

「それで、キヴィさん。どうしてそんなことを？」

「ラジウに頼まれたから。」

「え……？」

キヴィが問いかけにきっぱりと答えを言い放つ。しかし、彼女の単刀直入な答えにクレクは戸惑いを隠せなかった。また、アレンもキヴィを訝しげに見つめる。

驚く二人を交互に見ると、キヴィは少し躊躇ってから口を開いた。

「ラジウがね、戦いを見られたくないって言ったんだよ。」

「どう……して?」

「私が教えた戦い方はね、正々堂々なんかじゃないんだ。」

驚きを隠せないクレクに、キヴィは視線を床に落としながらだがつきりとした口調で答えた。もう隠す必要もないとも言っかのうに。

しかし、彼女の台詞にクレクよりも早くアレンが反応を示した。

「ちょ、それってまさか。あのガキに仕掛けたってこと!?!」

「ご名答。相変わらず頭の回転が早いね。アレン。」

アレンの大声に、キヴィは彼に視線を戻してにやりと笑った。アレンは信じられないというように目を見開き一歩下がった。

「それってどういうことですか?」

クレクは、まだよくわかっていないらしく、首を傾げてキヴィに問う。キヴィは一瞬言っているのか躊躇し、アレンに視線を送った。一応アレンは彼女の敵である。彼が居る前で話しているものか考えあぐねているのだ。

アレンは彼女の思考を読み取ったのか、クレクの問いに自分なりの答えを突きつけた。

「卑怯。ってこと。」

「卑怯?」

「キヴィがどんなことを教えたかは知らないけどね。不意打ちとか。そういうこと。」

クレクの目がアレンの説明で見開かれ、次に細められた。その細められた眼からは、怒りがひしひしと伝わってくる。クレクが口を開けた。

「私は、ラジウに勝つ可能性を与えただけだよ。」

クレクの罵倒が飛ぶ前に、キヴィははつきりとした口調でそれを制した。クレクの視線が自分に向いたことを確認すると、キヴィはそのまま言葉を続けた。

「正々堂々戦ったんじゃない、ラジウに絶対勝ち目なんかない。それくらい、あんたならわかるだろう？」

キヴィはいつもより強い口調と、きつく射る様な強い視線を向けてクレクに言い放った。

キヴィだって、好きでその方法を選んだわけではないのだ。勝つためなのだ。仕方が無い。そう彼女の瞳は訴えている。

「それに、受け入れたのはラジウだよ。そして私に言ったんだ。決着が付くまで、クレク。あんたを連れてこないでくれ。って。」

「っ……なんですか！！？」

狼狽しながらもクレクは声を張り上げる。しかし、キヴィは更に目を細めて彼を見た。まるでクレクを品定めするかのごとく視線を這わす。そして、口を開いて静かに台詞を紡いだ。

「クレク、あんたはラジウがひどい怪我を負っていても、彼にそのまま戦いを続けさせるかい？」

むきになっていたクレクだが、最後のキヴィの問いかけに押し黙ってしまふ。とても強い衝撃を受けたらしく、固まったまま言葉が出てきはしない。確かにラジウがそんな状態になってしまっていたら、クレクは有無を言わず連れて帰るだろう。

「……。」

クレクは黙ったまま、キヴィに背を向けた。そのまま何も言わずに歩き出す。

「ちょ、今の話聞いてたのかい!？」

キヴィが慌てて後を追う。しかし、慌てたせいでキヴィはいつもの注意力が落ちていた。

「キヴィ!」

アレンが彼女の名を呼ぶ。キヴィの膝がガクンと沈んだ。それに一番驚いたのは目を見開いたキヴィ自身だった。いきなりのことに彼女は体勢を立て直すことができず、そのままふらついて倒れこんでしまふ。

アレンが地面を蹴る。素早くキヴィに近づくと、彼女を片手で突き飛ばし、自分も飛んだ。

次の瞬間、ズドン!という鈍い音が響き渡る。

第一章↳三通りの道しるべ（16）

「ったー……。」

煙が晴れ、キヴィ達が居た場所には大きな胴の鐘が佇んでいるのを確認できた。アレンが彼女を突き飛ばさなければ、彼女はその鐘の下敷きになっていただろう。

「キヴィ。大丈夫？」

突き飛ばされ壁に背を預けながら座り込んでいるキヴィに、アレンは駆け寄った。クレクも音に驚いたのか、走って戻ってきた。

「嘘から出た誠。ってか？……ゴメン。足くじいちゃったみたい。あは。」

心配そうに覗き込む二人に、冷や汗を流しながら乾いた笑を向けるキヴィ。その彼女の台詞に、二人は固まった。

キヴィの右足が、ほんのりと腫れあがってるのが、二人の視線にちらりと入ってくる。くじいたというか、明らかにねじっている。クレクは、しゃがみ込んで彼女の足を診た。どうやら捻挫のようだ。とアレンに報告する。

「……あーあ。これじゃあ、私は動けないね。次の分かれ道を右に曲がってまっすぐ行けば、ゴールだよ。とつとといっちなまいな。」

体の力を抜き、本格的に座り込むと、キヴィはクレクに手をパタパタと振った。言葉同様に、さっさと行きな。と言っているようだ。アレンは、キヴィから視線を動かしてクレクを凝視した。彼は眉を

顰めてキヴィを見ている。

「何故、道を教えるのですか？」

「ラジウが心配なんだろう？あたしや、もう動けないからね。あんたを止めることなんかできやしないよ。ここであんたに迷子になられたって困っちゃうし。」

笑いながらキヴィは言った。しかし、額にはうつすらと汗がにじみ出ている。足が相当痛んできているのだ。それに気づくと、クレクは更に顔を顰めた。

アレンは静かに二人のやり取りを見守っている。クレクがどうなのか楽しみなのか、顔が少し歪んだりもするが。

クレクが行動に出た。屈み込んで、キヴィと同じ目線になる。

「うつわ!!?」

いきなりキヴィの身体を浮遊力が襲った。思わず驚いて声を上げるキヴィ。

「ヒュ〜。」

アレンが口笛を吹いた。キヴィは、眼を点にしたまま、耳まで真っ赤にしている。なんと、クレクが軽々とキヴィを持ち上げたのだ。

「いいなあ。お姫様抱っこ。」

アレンがにやにやと笑を浮かべながら言う。そう、いわゆるお姫様抱っこで抱えられているのだ。キヴィは金魚のように口をパクパクと動かすが、声が出ない。

「オレもして欲しい。」

「お前はする側だろうに。」

「しませんよ?」

アレンが口を出すと、キヴィとクレクから同時に厳しい言葉が返ってきた。えー?と口をへの字に曲げ、不満そうな声をあげたものの、アレンの目は笑っている。

その突込みを気に、キヴィは我を取り戻したらしくクレクに赤い顔をキツと向けた。

「ちょっと! 降ろしとくれ!!」

「どうしてですか? 歩けないでしょう?」

叫ぶキヴィとは対照的に、穏やかで朗らかな口調でクレクは返答する。まるで子供をあやすかのような雰囲気である。それが更にキヴィを煽る結果となる。

「い、いいだろ別に! ほつといてくれりゃあ、そのうち一人で帰れるよ!」

逆上したキヴィが、しまいには両手足を思いっきりバタつかせ暴れて始めた。何度かクレクの顔にもキヴィの手が当たる。流石にこれにはクレクも多少痛さを覚えたのか、息を吸った。

「静かにしないと、落としますよ?」

爽やかで極上の笑みがそこにあった。にこやかに笑んだまま、さつきと変わらぬ穏やかな口調でクレクは静かにそう言ったのだ。思わず体をこわばらせ、動きを止めるキヴィ。眼がクレクから離せず固まっている。

「……………は、はい。ごめんなさい……………」

いつまでも崩れないクレクの笑顔に、キヴィは顔を引きつらせ小さく謝ったのだった。

「よろしい。」

優しいような笑みに戻ったクレクは、ゴールと反対方向に歩き出した。クレクがラジウの方向に向かうとばかり思っていた二人は、驚いたように彼を見る。

「お、おい。逆じゃないのか？」

アレンがクレクを追いかけながら、おそろおそろ彼に話しかけた。すると、クレクは彼に背を向けたまま立ち止まる。顔は正面を向いたままでアレンを見ることはないが。

「ケガ人の手当ての方が優先ですよ。……………それと、私はラジウ様を信じていますから。」

少し躊躇ってから言葉をつけたし、最後の言葉でクレクは笑顔のアレンに向けた。吹っ切れたような爽やかな笑顔に、アレンはつい一歩退いて手で顔を庇う動作をする。それを気にすることなく、クレクはアレンに言った。

「私のことは気にせずに、アレンさんはどうぞそちらに向かってください。」

それからまたさっさと歩き出す。アレンはその言葉に肩を竦めたかと思うと、にっと笑い、小走りでクレクに追いついてきた。

「オレ一人で行っても寂しいだけじゃん？それに、キヴィも心配だしね。」

キヴィに視線をやり、ウィンクするアレン。それにクレクは微笑み、キヴィは眉を顰めるのだった。キヴィは直感で感じていた。アレンが二か企んでいるであろうことを。それが、十中八九自分をからかう事なのもわかったていた。

「そんな大した怪我じゃないっつーに……。」

だからため息をついて、ぶつぶつと恥ずかしそうに文句をたれるのであった。

アレンはキヴィを見ながら笑みをこぼす。その笑みはクレクとは違い、明らかに何か悪戯をしたがっている子供のような表情。ふと、彼は口を開いた。

「ねえ、キヴィ。その抱えられ方ってさ、子供抱えるときと同じだよね？」

アレンの言葉に、キヴィは赤ん坊の抱き方を思い出す。すると、すぐにカッと耳まで赤くなつた。そして、アレンにきつと睨みつけるように顔を向け、思いつきり叫ぶのである。

「あたしゃガキじゃないよ!!」

「顔赤くして可愛い。」

しかし、アレンは受け流してさらにからかいの言葉を投げかけてくる。そのことにキヴィの頭に血が登らないわけがない。キヴィは更に激怒し大声を張り上げた。

「可愛くない！」

「うるさいって言ってるでしょう？」

キャンキャンと吠える二人に、先ほどの笑顔を向けるクレク。しかし、こめかみがピクピクと痙攣していることから、本気で怒っているのが伺える。まあ、耳元でこうギャーギャー喚かれたら、誰でも怒る気もするが。

「ごめんなさい。」

「わりい。」

キヴィとアレンは顔を引きつらせ、同時に小さな声で彼に謝った。どうやら、三人の中での勝者は、クレクのようなのだ。

第一章 三通りの道しるべ（17）

一方、まだ勝者の決まっていないラジウとシルキアはというと。わきあいあいの三人組とは正反対に、沈黙のままゴールに向かって歩いていた。

ラジウはこの沈黙に耐え切れず、早くゴールが見えないかと眼を凝らしていたのだった。だから、彩られた扉が見えたとき、ラジウはパアッと顔を綻ばせた。

「ね、アレだよ！」

「ああ。」

ラジウはその扉に元気良く走りより、シルキアを呼んだ。しかし、シルキアは彼の後ろから平然と歩いてくる。まるでよく知っているとてもいった感じだ。

「なんだよ。もうちょっと驚くとかさ。」

「知ってるからな。ここが最奥だ。」

「へえ。」

シルキアはさも当然というように話ながら、さっさと扉をあける。その様子に、ラジウは慌てて両腕を振った。

「ちょ、トラップとか大丈夫なの！？」

ラジウは問いに、シルキアは鼻を鳴らした。馬鹿にしているような

印象を受けるその行動に、ラジウは頬を膨らませて対抗する。しかし、シルキアは気にした風もなく言葉を綴っていくのだった。

「ふん。どうやら奴のは言葉だけのハッタリだったようだからな。今までの道すがら、昔も今もトラップに変わりはない。この中のトラップも俺は知っている。」

立ち止まろうともせず、ずかずかと中に入っていくシルキアの様子からは、自信が伺える。

中は人が一人住めるくらいの大きさで、小さなテーブルが真ん中に一つ佇んでいるだけだった。そのテーブルの上に大人の掌ぐらいある大きな水晶が飾られている。他に高価そうなものは見当たらず、まさしくこの水晶がキヴィの言っていた宝物であることを容易に想像することができる。

躊躇うことなくシルキアはそれに近付いた。ラジウは何もしないのか扉の所に佇んで彼の行動を見送っている。

このまま勝負は決まってしまうのか。そうだとしたら、あまりにも出来すぎている。シルキアはそう思案すると水晶の前まできて立ち止まった。

ガシャン！

鉄が落ちたような音が部屋に響いた。いきなりの出来事に思わず目を見開いて固まっているシルキア。彼は鉄の檻に閉じ込められていた。檻が上から降ってきたのだ。

「貴様……。」

シルキアは扉の方に視線を向けた。そこには、扉の取っ手についている隠しボタンを押し、こちらを見ているラジウがいた。笑みがこぼれており、してやったり！という雰囲気漂わせている。

「へへ……油断してたでしょ？この罠ってこれだけだもんね。」

ラジウの言葉にシルキアは舌打ちをする。確かに彼は油断していた。この部屋にあるトラップはただ一つ、手動のこの罠だけである。手動であるからして、人が仕掛けを押さない限り発動しないのだ。シルキアはまったくラジウのこの可能性を否定していたのである。このトラップは今までに一度も使われたことがなかった。なぜなら、卑怯、裏切り。といったような意味を持つ罠だからである。

「……ふつ、なるほどな。罠は貴様だったというわけか。」

自嘲気味に笑うシルキア。ラジウは扉から離れるとシルキアを通り越し、水晶が乗っているテーブルまでやってきた。

「そうだよ。だって、他に罠仕掛けてもあんたじゃ全部ぐりぬけちやいそうだしさ。」

シルキアの言葉に頷き、ラジウは水晶を手にとった。そしてシルキアに向き直る。彼の表情は嬉しそうではなかった。なんとも曖昧で困ったような、でも少しほっとしているような内心が読み取れない顔をしているのだ。

「キヴィに言われたんだ。いくら罠を仕掛けたって、あんたとシルキアの実力の差なんて埋まらない。だから、弱っちいあんたが真に向勝負をしたって確実に勝てないよ。って。」

シルキアは黙ってラジウの話に耳を傾けている。割って入ってくる気配がないので、ラジウはそのまま言葉を紡いだ。

「だから、キヴィに言ったんだ。勝てる方法を教えてくれ。って。恥を掻いたって、どんなに惨めになってもいいからって。そしたら、キヴィは言った。卑怯になれと。弱い者が勝つには、それしかないんだ。って。罫を何も仕掛けなかったのは、あんたに気を張らせないため。」

「……昔の罫にかかったのもわざとか？」

「そうだよ。初めから罫にかかるつもりで、キヴィには罫の場所を教えてもらわなかったんだ。ただ、ちょっと量が多すぎて焦ったりしたけど……。」

シルキアがぼつぼつ話すラジウに問いを向けた。それに答えるものの、恥ずかしそうに段々と声が小さくなっていく。予想以上に多く激しかった罫を思い出したようだ。

「なぜ？」

「あんたを足止めするためさ。キヴィが言ったんだ。”あいつは罫にかかるような弱いやつを置いていかないさ。子供なら尚更ね。”って。先に行かれたら追いつけないからさ。」

「ふっ。」

ラジウの説明に、シルキアは鼻で笑った。まだまだ自分は甘いな。と小さくラジウに聞こえない程度に呟き、檻に背を預けた。それに、ラジウは首を傾げた。彼から戦う意気がまったく見られないから。

「……………」

「……さっさと行け。」

無言で水晶持ったままラジウはシルキアをじっと見ていた。それを不思議に思ったのかわからないのか、無表情のままシルキアはラジウを促した。それにラジウは堪らず口を滑らしてしまう。

「負けを認めるの？」

「ああ。」

「そんなにあっさりと？」

「ああ。」

「なんで!？」

ラジウの問いに、ただ頷いて肯定するシルキアにラジウは食ってかかった。どうやらシルキアの答えが気に入らなかったらしく、少し怒ってもいるようだ。目を見開いているから驚きのほうが強いのかもしれないが。

「俺は油断して貴様に丸め込まれた。だから負けだ。」

きつぱりとシルキアは言い放つ。しかし、ラジウはさらに額に皺を刻み頬を膨らませた。明らかに不満たらたらである。

「むっ……卑怯とか思わないわけ？」

尚も食い下がるラジウ。

「……ふん。これが本当の戦いだったら、裏をかかれた時点で死んでいる。貴様自身が言っただろう？ 勝つための手段だと。そういうのは卑怯ではなく”策”というのだ。」

めんどくさそうに、しかしシルキアにしては珍しく長い台詞を返したのである。ラジウの額の皺が引かなかったたからかもしれないが、そんな返答にも、ラジウの頬の膨らみを改善することはできなかった。

第一章 三通りの道しるべ（18）

「……いいよ。わかった。あんたはそういう奴なんだね。」

まだ不満そうな顔をしながら、ラジウは水晶を両手で高々と持ち上げた。かと思うと、次の瞬間水晶から手を離してしまう。シルキアが声を発するより早くバリン！という音が辺りに響き渡った。水晶は床に叩きつけられ、もう見る影もなく粉々になっていた。さすがに、これにはシルキアも啞然となった。そしてしばらくの間床の残骸を見ていたが、ふとラジウに視線を戻す。ラジウは落着こうとしているのか、大きく深呼吸をしている。手が震えていて血の気がひいているのがわかる。一大決心だったのだろう。ラジウとシルキアの目が合った。

「僕は、いつかあんたに実力で勝つてやる！！」

人差し指でシルキアを指し、きつぱりと大きな声で叫ぶラジウ。まるで自分にも言い聞かせているようなほど大きな声だ。これは彼によるシルキアへの宣戦布告だ。シルキアは間抜けなことに口をポカッと開け、ただラジウを見るしかなかった。

「じ、実力では僕が負けてたんだ。策だつてキヴィが考えたんだし。僕一人で勝ったわけじゃないし。だ、だからっ！この勝負は引き分けだよ！！宝も無くなっちゃったし。」

ぶいっとそっぽを向き、腕組をしながらラジウは言葉を続けた。言い訳のようにどもりながらの口調だが、彼はいたって真剣だ。

「く……くくく。」

噛み殺した笑い声をラジウの耳がキャッチする。不審に思って振り向くと、ラジウは思わず口を顎が外れるんじゃないかってくらい大きく開いてしまった。あの無表情のシルキアが密かにだが笑っている。顔と腹を手で押さえ座り込みながら、肩を小刻みに震わせているのだ。彼にとって、ラジウの行動はよほど面白かったにちがいない。アレンやキヴィでさえも、今の彼を見たら驚くだろう。それほど珍しいことだった。

「く……貴様、バカ。だな。」

ほのかな笑い顔をラジウに向けながらシルキアは言う。その何度目かの言葉、いったいどのくらいきいたのだろうか。それでも今回、ラジウはその言葉で頭にくることはなかった。けなし言葉だが、全くけなししているように聞こえないのだ。

「うつ……そうバカバカ言うなよ。」

ラジウも少しだけ笑みをこぼしながらシルキアに言った。じゃれつくような口調である。

「すまない、バカ。」

「おーい、言ってるって!」

笑い合うわきあいあいとした雰囲気、ラジウはほっとしたように柔らかい笑みを浮かべた。

シルキアは、なんとか笑いを抑えてから立ち上がる。

「行くか。」

そう言ったシルキアは一瞬にしてラジウの視界から見え失せた。ラジウは目を点にして一歩後ずさる。いくら凝視しても、檻の中にいたはずのシルキアは影も形もない。魔法なんて魔族の極一部が使える特殊なものだし、だいいちシルキアは人間だ。それともシルキアはマジシャンか何かなんだろうか？あれこれと頭に浮かんで消える可能性。けれど、どれもしっくりとこないので、ラジウはしきりに首を捻った。

「おい。」

「うつわ!？」

横からの呼びかけに思わず驚きの声をあげるラジウ。そして慌てて身構えて振り向く。振り向いた先、自分の隣にはさっきと変わらぬシルキアが立っていた。目を見開いたまま口をあぐり開けるラジウ。

「ちょ……どうやって出たの!？」

「ああ、テレポートとか言われるようなものだ。瞬間移動とも言いか。場所から場所に飛ぶんだ。」

説明にわからないと、両手を挙げ首を傾げるラジウに、シルキアは言葉を変えながら伝えようとする。しかし、ラジウはまだ不思議そうな顔をしている。仕方なしに、シルキアは特異な能力だ。とそう言った。それで、とりあえずラジウは頷くのであった。

「へえ……って、何で使わなかったの!？」

シルキアの珍しい能力も不思議だが、それよりもそれをさつき使わなかったシルキアの行動に、ラジウは驚きを露わにした。そして彼に問い詰める。

「負けたからだ。完璧にな。」

そう言つて口の端を上げるシルキアに、ラジウはきよとした間抜けな顔をみせる。まだよくわからないでいるラジウが口を開く前に、シルキアは背を向けてたつたと歩き出してしまった。なのでラジウは慌てて後を追うしかなかった。だけど、行きよりはピリピリとした緊迫な雰囲気はなく、緩やかな時間が流れそうだ。

第一章 三通りの道しるべ（19）

「おっ、出てきた。」

アレンがちらりと見える人影に気づき、二人に合図を送った。キヴィの足の応急処置を終えたクレクがそれに素早く反応を示す。三人は洞窟をじっと凝視した。

ゆつくりと姿を現した二人のうち一人はボロボロで、泥だらけの傷だらけ。もう一方は無傷で、洞窟に入っていた時とまったく違っていいほど変化はない。

「っ！ラジウ様！！」

もちろんボロボロなのはラジウなわけで、クレクは叫ぶと同時に彼に駆け寄ったのである。そして、ワザとだろう。思いっきりシルキアとラジウの間に割って入った。かと思うとラジウの服をパンパンと叩きだした。いつものお世話というかお節介が始まったようだ。

「わっぷ。クレク！いいよ、大丈夫だから！」

埃を吸い込んで大きくむせながら、ラジウは何とかクレクを押しつける。クレクは眉を潜め不満そうな顔をしたが、仕方なく引き下がった。

「で、勝負はどうなったんだい？」

キヴィが、岩の上に腰を下ろしたまま、戻ってきた二人へと声をかけた。その言葉にシルキアはラジウに視線を超越す。お前が説明しろと、ラジウに言っているのだ。

「うんと。引き分け。」

へらつと笑って、ラジウはあっさりと答えを述べた。その答えに、キヴィとアレン、クレクまでもが驚いて固まる。全員違う意味で固まっているようだ。

「……………はあ！？引き分け！！？」

一番信じられないのだろう、アレンが口をパクパクと動かしながら声を張り上げた。今にもシルキアとラジウに食ってかかりそうな勢いだ。

「は？勝てなかったのかい？ラジウ。」

キヴィも間の抜けた顔でラジウに問う。それもそのはず、彼女にしてみれば勝てるようアドバイスをしたし、勝つだろうと大方の割合で思っていたのだから。

「うん。水晶落つこととして割っちゃった。ほし。」

語尾に自分で星というほど、ラジウは陽気に答えた。いや、しかし笑ってはいるが口は引きつっているし、額からは一筋の汗が流れ出ている。誤魔化すのが本当に下手なラジウだった。

ラジウの行動に、キヴィとアレンが冷たい視線を送るのだが、

「…………ラジウ様。いったいどうなされたんですか！？口で星。なんて言うなんて！！熱でもあるのではないですか！！？」

見抜けない保護者がここに居た。慌ててラジウの額に手をやり、熱

を測っている。勢いよくまくし立てたので、ラジウは固まったままクレクのなすがままである。さらに額から汗が吹き出る始末だ。

「ないよ。クレク。」

しかし、心情は冷静だったらしく軽くクレクをあしらう。

「っ……ラジウ。あんたねえ。」

いつまでも固まって冷や汗を流しているラジウを見て、キヴィはため息をつく。それから少し頬を膨らませ、膨れっ面をしてから言葉を続けた。

「勝てたのにわざとやったね？」

「ちょ、待ってよ！ー！それってシルキアが負けたってこと！ー？っつそー！ー！？」

キヴィの言葉にすかさずアレンが騒ぎ立てる。甲高い声の対立に、ラジウは思わず耳を塞いだ。

「ああ、負けた。」

「はあ！？ちよつと何認めてんの！？」

喚くアレンに、シルキアは当然というようにさらりと言うが、案の定。大きな声でアレンに反論されてしまう。

「……………ふう。」

そして、もう言い返すのも飽きたのか諦めたのか、シルキアはため息を一つもらしたただだった。アレンはシルキアの態度に納得がいらず、再び大きく口を開けた。

「あ、だから！引き分けなんだってば！」

「んでだよっ！？だいたい、お前。勝ったならなんでそんなに引き分けにしたいわけ？それも思いつきり納得いかないんだけど。」

シルキアが何も言わないので、仕方なしにラジウはアレンが言葉を発する前に声をかけた。しかし、やはりすぐさま反論が自分に返ってきてしまう。さらに質問が増えて。

「え……？じゃあ、アレンさんは僕に仕えたいの？」

「んなわけあるかーっ!!」

アレンの設問に、きょとんと目を見開いてさらりととんでもない事を聞くラジウ。アレンも思わず声を大にして突っ込んでしまう。

「え？だって。僕が勝ったら全員僕に仕えるって約束でしょ？」

首をかしげて、まだきょとんとしてラジウは聞いた。その言葉にアレンは、ああ。と小さく呟き、頭を抱え込んでしまった。どうやらようやくと、一番最初に約束したことを思い出したようだ。ラジウ達が勝ったら全員ラジウに仕える。シルキア達が勝ったらラジウ達は各々がいた場所に戻る。という約束を。

「で、アレンさんは仕えたくないんでしょ？」

「仕えたくない。」

ラジウの問いに未だに頭を抱えつつもきっぱりと答えるアレン。

「じゃあさ。今まで通りでいいじゃんか。何にも変わんなくてさ。」

大きくアレンに頷いてみせるラジウの顔からは自信満々さが伺えた。アレンは、目を見開いて彼を凝視する。

第一章↳三通りの道しるべ（20）

「ぷっ……あははは。」

が、彼は突如笑い出したのだ。笑いをこらえようとはまったくしていない。大笑いと言っていいだろう、腹を抱えて身悶えしている。

「初めからそのつもりだったね？ラジウ。」

キヴィはため息交じりにラジウに言うが、彼女もまた笑い始めた。

「へへ……。」「

ラジウもそれにつられて笑みを浮かべる。シルキアもふつと鼻で笑った。

「ふふ。それじゃあラジウ様。帰ってご飯にでもしましょうか。」

彼らを嬉しそうに見て、そっとクレクがラジウに微笑みかけた。ラジウは彼に笑顔を返し、大きく頷く。

「うん！」

「……ふっ。俺も一緒に行ってやる。」

「えっ！？」「

シルキアの突拍子もない言葉に、ラジウは驚いたように彼を見上げた。しかし、アレンはやっぱりね。と小さく呟き肩をすくめたので

ある。

「俺自身は貴様に負けたからな。約束は守る。」

その後、シルキアは小さくラジウに耳打ちした。”それと、貴様のその馬鹿さかげんも気に入ったからな。”と。ラジウはそれに頬を膨らませてから笑った。

シルキアは一度ラジウと視線を合わせてからアレンに向き直った。

「貴様はどうする……?」

「オレ? オレはいいや。自由気ままに生きていくさ! サークスとかして遊んでるよ。」

シルキアの問いにアレンはカラッと笑い、軽く言う。それに、ふつと小さな笑みを溢し、シルキアはアレンに片手を差し出した。アレンもニツと笑いその手をとった。

「ふん。バカだから死なんとは思うが。」

「あつはつはつは!。ひつでえ!。シルキアのほうこそ、ガキに負けるような力でくたばるんじゃないやねえよ? あつは、冗談だって! また会おうな!」

軽く笑いながら会話しているアレンだが、シルキアの手に力が込められたのに慌てて繕うように言葉を並べた。そして、ぎゅっとシルキアの手を握り返してから後ずさりをし、彼の手から逃れた。シルキアに舌打ちされたのは言うまでもない。

「ほんじゃ。キヴィも、ガキもホゴシャさんも、まったねえ。」

アレンが片手を上げたのを合図に、全員がそれぞれ彼に向かって片手を上げた。

「それじゃあ、また今度遊んでね！アレンさん！」

「やなことだった。」

ラジウが手を大きく振って叫ぶ。それに、アレンは笑いながらアツカンベーをし、手を振ったかと思うと駆けて行った。

「んじゃ、行くかね。」

「ああ。」

キヴィはアレンを見送ると、背伸びをし立ち上がった。それからさっさと城へと向かって歩き出す。彼女に相槌を打つと、シルキアも同じようにとつと歩を進めた。

「あ、待ってよ！」

大きな声とともにラジウが慌てて二人の後を追いつ、クレクも笑いながらラジウについていく。

アレンとシルキアは違う道を。また、ラジウも新たな仲間を加え、自分の道を歩き出したのであった。

第一章 三通りの道しるべ 完

第二章　真実と真意（1）

第二章　真実と真意

穏やかな朝が来て、少し遅い食卓に足を運んだのは三人。

「はい、三人とも遅いですよ。」

既に朝食を終え、待っていたクレクが笑顔でそう言った。もちろん、起きてきた彼らの朝食の準備をしながら。

「……………」

「昨夜、ちょっと本読んでてね。」

「じっはーん！」

シルキアは眠いのか、無言のままうつらうつらしている。キヴィは欠伸を一つし、言い訳を口にした。ラジウに至ってはクレクの話聞いていないのか、興味深々で目の前のオムレツに目を光らせている。

「もう、他の子供達は朝食を終えて外で遊んでいますよ。」

「はい。いただきます！」

咎める言葉もなんのその。ラジウはカラ返事を返し、与えられた食べ物にかぶりつく。まったく。と小さく呟くものの元気な彼の姿を

見て、クレクは微笑を浮かべていた。

「と、自己紹介がまだだったね。そういえば。」

キヴィもゆつくりと物を口に運びながら発言した。

「そうですね。いろいろとありましたし。」

それに答えるのはクレクだけだったりする。ラジウは勢い良く次から次へと食べ物で頼張り、シルキアは顔を落としたまま微動だにしない。

「短い時間だったのに長く感じたね。この三日間。」

「私たちにとっては長い四日間でした。」

しみじみとこの数日間を振り返る二人。それは、平和な朝を実感することによってのことだろう。

「おかわり!!」

そこに割って入ったのは、全てを平らげて綺麗になった皿。もとい、素早く食べ終えたラジウだった。

顔には食べ残しがちらりほらり付いている。クレクは、皿を受け取ると席を離れた。

「つたく、元気だねえ。」

キヴィが呆れたように呟く。しかし、ラジウはそんなことお構いなしに、クレクから2個目のオムレツを受け取っている。そして、案

の定。先ほどと同じように頬張り始めた。

「とりあえず、ラジウ。あんたのこと。教えてくれないかね？なんでこんなところに、大人一人とたくさんの子供が住んでるんだい？確かここは誰も住んでない空き家だったはずだけど。」

「うんとね、僕はラジウ・マイナー。この城の下にある城下町の王ホーデユ・マイナーの一人息子だよ。あそこにいるのが嫌になって飛び出してきたんだ。クレクは僕の従者で、他の子供達は僕についてきてくれたんだ。」

キヴィの問いに、オムレツを食べる手を止め。視線を上にし考えるように答えるラジウ。

「ホーデユ・マイナーって、あのつい最近死んだ？」

「……そうだよ。」

ラジウはキヴィの言葉に一瞬押し黙るが、頷いて返答してみせた。

「あー、酷なことを聞くんだけど……それは、本当かい？」

「本当だよ。父さんが生きてたら、僕はこんなことする必要もないもん。父さんがいなくなったから、僕は自分の身を守るために逃げ出してきたんだ……。」

少し躊躇いながらも問いをぶつけるキヴィに対して、内容のせいだろう。ラジウはむっつとしながら答えた。口調もほんの少し熱くなってきた。

「おかしいねえ……。」

「何が？」

「逃げてきたって、ホーマイ国からだろ？」

「うん。父さんのホーデユのホーと、マイナーのマイの字を繋げたホーマイ国から逃げてきたんだよ。それがどうしたっていうの？」

ラジウの答えにキヴィは頭を掻いた。どうやら相当言いにくいことらしい。しかし、意を決したようにラジウと視線を交える。

「実はね、噂で聞いた話なんだけど、ホーデユ・マイナーの息子。

ラジウ・マイナーは、ホーマイ国の国王にきっちり納まったと言われているんだ。」

「はっ！？」

「ええ！？」

キヴィの言葉に思わず声をあげるラジウとクレク。ラジウに至っては、使っていたスプープンをカランと下に落としてしまう程驚いている。

「ちょ、待ってよ！僕、国民の前で逃げ出したんだよ！？しかもそれ、四日前の出来事だし！！」

ラジウは立ち上がり身を乗り出す。そして、信じられない！と言った表情のまま言葉をキヴィにぶつけた。

「落ち着いてくれよ。逃げ出した噂もちろんあるんだよ。ただ、次の日には戻ってきたとか、あれはパフォーマンスだったとか。噂ではそういうことになってるんだよね。」

「そ、そんな風になってたとは……通りで誰もラジウ様を連れ戻しに來ないはずですね。」

「ちょ、どうということ!？」

食後のお茶を飲みながら、キヴィは噂を彼らに伝えた。それに、クレクは落胆しながらも納得する。しかし、ラジウはというと、まったく状況を飲み込めてはいない。

「ようするに、代役を立てられた。ってことだろうね。しかも、あんたでなく。そっちがラジウ・マイナー本人とされてるってことだね。」

「ぼ、僕、偽者じゃないよっ!！」

「わかってるよ、ラジウ。ただ世間ではそういう噂があるっていうだけなんだよ。それに、あんたはあの国を捨てたんだから、そんなことはもう、どうだっていいことだろ？」

熱くなり弁護するラジウを抑えるように、キヴィは言う。しかし、それは逆効果だったようだ。

「どうだっていいわけじゃないかんかつ!！僕は、ホーデユ・マイナーの息子なんだ!絶対良い王になって、父さんの国も守るんだからっ!！」

どうやら、ラジウの思惑とは違っただけ。大声で自分の主張を述べるラジウに、半ば押され、驚きを隠せぬままキヴィは彼を凝視している。

「……ぶっ……あははっ！あんなって、やっぱり面白いね！なんて大胆な発言するかなあ。」

そして、噴出して笑い出す。そんなキヴィの行動にラジウはむっとし、頬を膨らませた。その後、ダンッと大きな音を立てて椅子に座る。椅子がぎしぎしと音を鳴らした。

「僕はもう、何も言うことないからねっ！」

一言そう言つと、ラジウはそっぽを向いてしまった。明らかに拗ねている。それが更にキヴィを笑わせることになっているのだが、当の本人は気づいていない。

「ぶっ……くくく。わかった、わかった。じゃあ、今度はクレク。あんたがしておくれよ。」

「え？私ですか？」

なんとか笑いを堪え、クレクに話を回すキヴィ。しかし、いきなり自分に話を振られ、クレクは抜けた声を出す。そんな彼に、キヴィは当たり前。と言うように首を大きく縦に振った。

「……私は、ラジウ様の付き人ですよ。ホーデユ様とラジウ様に忠誠を誓っておりますので。」

クレクはそこで一旦話を止め、優しい柔らかな笑みを浮かべた。

「他の方がどうなろうと知ったことではありません。その点はご了承ください。」

どうやらクレクはあまり仲良くするつもりはないらしい。明らかに言葉を強調し、宣戦布告を言い渡している。流石にこれにはキヴィも多少頬を引きつらせる。

「人見知りが激しいだけなんだ。気にしないで。」

しかし、そこですかさずラジウが自分なりのフォローを慌てて入れた。もちろん、キヴィがそれに爆笑したのは言うまでもない。机に突っ伏し腹を抱えてひいこら笑っている。

「ええと……キヴィさん、大丈夫ですか？」

ぴくぴくと肩を震わせる彼女に、クレクは心配そうに問いかけた。

「だ、大丈夫……夫っ！」

キヴィは掠れた返事と共になんとか顔を上げ、涙を拭った。よほどおもしろかったらしい。

「次はあたしだね。あたしはキヴィ・ライズン。前に言った通り町医者さ。性格は大雑把。見ての通り。そんな感じだよ。」

キヴィは、さらりと自分の紹介こなす。大雑把な性格を自覚していたのか。と思わずラジウとクレクは、内心突っ込んでしまった。

第二章　真実と真意（２）

「さーで、最後はシルキアかね。」

その言葉に皆の視線が移動する。しかし、視線の先の人物は微動だにしない。尚且つ、ずいぶん前に出されたはずの皿の上には、まだ丸々と綺麗なままオムレツが乗っかている。

「……………すー……………」

「寝てんなーっ!!」

スパーンといった小気味の良い音が響く。どこからか取り出したハリセンで、キヴィがシルキアの頭を引っぱりたいのだ。

「……………ん？」

しばらく間が開いてから。薄く目を開けるシルキア。声には出さないが、反応遅っ！とラジウが内心突っ込みを入れたりもする。

「まったくあんたは！寝ることしか能がないのかい!？」

「……………ああ、アレンか。」

大きな声で怒鳴るキヴィとは対照的に、シルキアは顔だけ動かし彼女を見てから落ち着いた声で呟いた。まったくもってマイペースである。しかし、言ってる事は明らかに間違っていたりする。それに、キヴィは肩を震わせ怒る。そして、つかつかと何処かへ行ったかと思うと、水のたっぷり入ったオケを片手に携え戻ってきた。

「……目を覚ませーっ!!」

戸惑うことなくキヴィはシルキアの顔を思いつきり水の入ったオケに押し込む。その出来事に啞然とするほか二人。あまりのことに顔から血の気が引いている。

「……水か……。」

キヴィが押し込んでいた手を離すと、シルキアは顔を上げた。次に出てきた言葉は、単なるオケに入っていた物の感想。キヴィ以外はそれにどう突っ込んでいいものかと迷ってしまう。

「お湯のが良かったかい？ まったく。さっさと自己紹介おしよつ。」

シルキアにタオルを投げ渡し、今までのことなど日常だと言わんばかりに次の話へ移ろうとしている。

「いや、むしろ止める。……自己紹介？」

タオルを受け取り、顔を拭きながら不機嫌そうに言うシルキア。

「なんだい、顔すつきり。っていう顔してるくせに。名前とか言やあ、いいんだよ。」

キヴィは拗ねたように口を尖らせ応戦する。しかし、どうみてもシルキアの顔はそんな爽やかそうな顔はしていない。むしろ額に皺が刻み込まれ、とても不機嫌そうだ。

「ふん。服が濡れる。…名前？シルキア・ライズンだ。知ってるだ

ろっ。」

「そうかい。私にじゃないっつーにっ!!」

「ライズンって？キヴィとシルキアって兄妹なの？」

ラジウは二人の漫才に慣れてきたのか、二人のボケに突っ込むことなく気になった単語を拾う。

ラジウの国では、下の名前がファミリーネーム。家族の名前である。先ほどのラジウの父についての話もそうだったように、下の名前が同じ彼らは家族である可能性が高いのだ。

「あ、いや。兄妹ではないよ。」

キヴィは気まずそうに視線を逸らし頭を掻く。

「夫婦ですか？」

『違う。』

クレクの問い掛けにシルキアとキヴィの声が被った。二人とも同じように額に皺を寄せていることから、明らかに嫌がっている。

「いや、間違っるのはわかるんだ。うん。でもね、私たちのは家族の名前じゃないんだよ。」

キヴィが話しづらそうに二人を伺う。いつもと様子が違うことにラジウは首を傾げた。

「じゃあ、何の名前？」

「……………」

ラジウの問いに押し黙るキヴィ。答えたくないようだ。口はへの字に曲げられ、困ったように眉間に皺が寄っている。視線は自然とシルキアへ赴いた。

「……ふん。研究所の名前だ。」

シルキアは面倒くさそうに背もたれによっかかり、ため息混じりに鼻を鳴らす。そんな彼の答えにラジウは目を輝かせた。

「研究所？なに？キヴィとシルキアって研究したりすんの！？」

「俺はしない。」

「……あ、あたしだってやらないよっ！医者だって言っただろ。」

平然としているシルキアとは対照的に、キヴィは慌てふためいている。額からは汗が滲み出ており、弁護しようとする声を出すともってしまった。そして、その怪しい態度のまま話を続ける。

「む、昔ね。入れられてた研究所の名前さ！その前の名前は忘れちゃったからね。使ってるだけなんだよ！」

「へえーーーー。」

強い口調で捲くし立てるキヴィに、ラジウは疑いの眼差しを向ける。

「なんだい！別にキヴィと呼んでくれりゃあいだけだろっ！？っ

ていうか、それ以外じゃ反応しないからね！以上！！」

頬を赤く染め怒り口調で怒鳴り終えると、キヴィは自分は食べ終わった食器をそそくさと片し始めた。

「ちょっと、キ」

「ラジウ様！」

キヴィを呼び止めようとするラジウの声を、元気な声が掻き消した。その声に反応して振り向くと、窓から少年が元気に手を振っている。笑顔が良く似合う少年だ。

「あ、サート！」

ラジウは少年の名前を呼ぶ。少年の名はサート。彼はラジウを追いかけてきた子供の中で一番年上で、リーダー的存在だった。

「ラジウさまっっ！」

可愛らしい声と共に、サートの隣から小さな手が出たり消えたりしている。窓の向こうにまだ誰がいるようだ。ラジウは窓に駆け寄って下を見た。

「ノメルも来たの？」

そこに居たのは、前に泣きじゃくっていた最年少の少女ノメルだった。彼女は笑顔でラジウを見上げている。

ノメルとサートは兄妹で、とても仲が良いと評判だ。

「うん！遊びましょ、ラジウ様！」

ノメルの誘いに、ラジウは嬉しそうに頷きながら、窓の淵に足を引っ掛けた。そして、思いつき蹴ると、外へと飛び出していった。

「サート、ノメル！何して遊ぶ？」

「うーん、鬼ごっこがいいよー！」

そんな会話がだんだんと遠のいていく。

「まったく、きちんと靴は履き替えて欲しいものですね。」

ラジウを見送りながら、ため息混じりにクレクは呟いた。しっかりと欲しい。そんな親心の表れである。

「元気だねえ。よし、あたしも行ってくるかね。」

「はい、いつてらっしゃい。キヴィさん。」

片づけをするクレクと、オムレツに手もつけずにまた寝入っているシルキアを置いて、キヴィはスキップ交じりでその場を後にした。

「さて……シルキアさん。ご飯食べて下さい。このままでは、片付け出来ません。」

クレクは声を掛けながら、明らかに寝息を立てているシルキアを揺す振る。口調は冷たい。

「……ん……ああ。」

揺さ振られて起きたシルキアは、面倒くさそうに冷え切ったオムレツを食べ始めた。

「まったく……。シルキアさん。私は……。」

シルキアの前に入れたてのお茶を出すと、クレクは急に笑顔ではなく真剣な顔つきになった。そして、唾を飲み、ごくりと喉を鳴らす。

「貴方を。信じていませんから。」

はつきりと強い口調で言い切った。

「では。」

シルキアの反応を待たず、くるりと背中を向けるとクレクは食堂から出て行ってしまった。残ったのは、寝ぼけ眼で遅い朝食を取っているシルキアだけ。

「……………」

彼は、ただ無表情のまま冷えたオムレツを口に運ぶ。

「……………ふん。」

鼻を鳴らす。それだけの行動をしてから、シルキアは静かに朝食を済ました。

第二章　真実と真意（3）

「ラジウ！」

裸足で広い草原を駆け回っているラジウを、キヴィが呼び止めた。

「あ、キヴィ。どうしたの？」

肩で荒く息をする彼女に、ラジウは不思議そうに駆け寄ってきた。

「ラジウに聞きたいことがあるんだ。」

掠れた声で答えるキヴィ。城から離れたこの小丘に元気に走ってきたラジウを必死に追いかけてきたようだ。そんな彼女にラジウは首を傾げて続きを促す。

「実はね、あんたの父について聞きたいんだけど。」

「ホーデユ様のことですか？」

ラジウと一緒にいたサートとノメルもキヴィに駆け寄ってきた。サートが気になったのかキヴィに質問の内容を確認する。

「そうそう。私はね、いろんなところを転々としているせいでよく知らないんだよ。サートだっけ？あんたはホーデユ様のことでよく知ってるのかい？」

「はい！知ってますよ！ホーデユ様は、この国の守護神と言われるほどの人でしたから。キヴィさんも噂くらいなら聞いてると思います」

すよ。」

礼儀正しく笑顔で答えるサート。見たところ、彼はラジウと同じくらしいの年齢だろう。それにしてはしっかりしている。そんなイメージを受けさせる。

「そうそう。噂なら腐るほど聞いてるんだよ。だけど、どれが本当かわからなくてねえ。」

「ふーん。やっぱり父上って有名だったんだね。」

キヴィが苦笑うのを見て、ラジウはしみじみと言ったように言葉を紡いだ。

「そりやそうですよ。ラジウ様！ホーデユ様といえば、魔物に対抗できた唯一の人間と言われるほどなんですからっ！」

サートが興奮しながらラジウに説明している。そう、この世界では今。魔物と呼ばれる種が力で世界を支配しているのだ。ラジウ達程の少人数の人間は滅多に相手にされることはなく、平和な日々が続いてるわけだが。

「……へ、へえ。唯一……。」

サートの気迫はラジウを一步下がらせるほどだった。そして、ラジウは戸惑う気持ちに額に皺を寄せる。今まで大人たちからは何も聞かされずに育った身として、何も知らなかったことに戸惑っているのだ。

「そうだよ。だから、あんたの国以外は相当酷いもんだったよ。」

「噂で聞いてます。魔物に家畜として飼われたり、労働力として働かされたりしていると……。」

昔の記憶がキヴィを苦虫を潰したような顔にしている。それにつられて、サートの表情も曇った。ラジウはその言葉に驚き、二人を交互に見ている。

「それ、で？なんで僕の国は平気なの？」

「平気？そりゃあ、あんた、ホーデュ様の力さ。ホーデュ様を怖がって魔物が寄ってこなかったただけの話。」

「けど、ホーデュ様がいなくなった今。いつ攻め込まれるかもわからないんですね。」

ラジウの疑問はあっさりとキヴィに返される。サートが心配そうに顔を落とした。昔と今では状況が一転していること、それがラジウにもしっかりと伝わってきた。

そして、それと同時にラジウの奥から隠していた思いが首をもたげてしまう。

「……そう。だよね。ねえ、父上ってどうして死んだか知ってる？」

「魔王に挑んだから。じゃなかったかね。」

「ラジウ様……。」

突如目から大粒の涙が流れた。それを見て、サートが困ったように彼の名を呼んだ。

「ごめつ、平気。ありがとう。キヴィ、サート。僕に、父上の仇を教えてくれて。」

ラジウは必死に涙を拭いながら笑ってみせた。けれど、涙はとめどなく流れ落ちる

「あー……ラジウ。あたしが聞いたホーデユ様の噂、他に変なのがあるんだけどさあ。」

キヴィは頭をガシガシと掻いて目を泳がせた。それから何かを思いついたのか、言葉を紡いだ。

「変なの？」

それにラジウはすぐさま食いついた。気を紛らわせるなら、他のどんな話題でも良かったから。

「ああ、行く先々で現地妻作る。とか、愛人が星の数ほどいる。とか……女つたらし。だとか。」

キヴィの言葉は段々と小さくなっていった。なぜなら、ラジウが固まって動かなくなってしまったから。表情からはハテナマークが頭の中で無数に浮かんでいるのが手に取るようにわかる。それもそのはず、ラジウにとっての父のイメージは、厳格で優しくて何より母といちゃつきこいていた。というイメージなのだから。

「そ、そんなことないよっ！父上は母上と、僕が見てられないほどラブラブだったんだよっ！？」

「……じゃあ、やはり嘘なのかねえ。」

「その噂、嘘じゃなくて本当のことですよ。」

ラジウがキヴィにそうだよっ！と叫ぼうとした瞬間、横からあつさり肯定の台詞が飛んできた。その声はラジウの隣で二人の会話を聞いていたサートのものだった。驚いた顔を自分に向けるラジウとキヴィに笑顔を返しながら、サートは言葉を続けた。

「ホーデュ様は無類の女好きで、おとした数もふられた数も星の数だとか。このことは国でかなり有名でしたよ。それさえなければ完璧なお人なの。って皆言っていましたし。あれ？ラジウ様、知らなかったんですか？」

そんな彼の言葉に砂のようになるラジウ。でこを突けばそのまま崩れ去ってしまいそうだ。そんな彼の反応に、サートは不思議そうに首を傾げた。ラジウはやつともとの状態に戻ったかと思うと、うつむいて肩をわなわなと震えさせ始めた。

「……………クレクーっ！！」

そして、両の手をぎゅっと力強く握大きな声で叫んだ。叫びながら来た道を走り出す。

「ちょ、ラジウ！？」

「ラジウ様！？」

「あれ〜？ラジウさま〜？」

そんな彼の名を、キヴィとサート、ノメルがそれぞれ呼んだ。しかし、ラジウは止まらない。そのうち見えなくなってしまった。仕方なく三人は彼を追いかけることにした。

息絶え絶えに走ったラジウが行き着いた場所は城の洗濯場。

「クレク!!」

「おやおや、どうしました？ラジウ様。」

そこに居たのは、ちょうど洗濯物を干しているクレクだった。ラジウは息をしっかりと整えようと深呼吸をするが、気持ちだけが焦ってどうも上手くいかない。それに対してクレクはいつものものにこやかな笑顔で見守っている。

「父上が……父上が女好きだったって本当!!?」

やっと言葉を紡ぐ。大きな声の問いただしに、ピシッと音をたてて固まるのはクレク。明らかに多大な衝撃を受けている。

「……誰がそんなこと……を？」

「ちょ、ラジウ！早いよ、あんた!!」

口だけをやっとこさ動かすクレクの視界に、やっと追いついてきた三人が捕らえられる。そして、その三人のうち唯一大人であろう女性にクレクの目は向けられた。

「キヴィさんですか？ラジウ様に余計なことを吹き込んだのは。」

笑顔のままキヴィに疑問が投げかけられた。その疑問には激しい怒

りと不信感が上乘せされており、必要以上の気迫を感じずにはいられなかった。

「は、はい……。」

キヴィはその気迫に押され、顔を引きつらせながら返事をしてしまう。

「ね、クレク！本当なの？」

クレクの意識がキヴィに向かったので、ラジウは彼の服を引っ張り、自分の問いに答えさせようとする。

「それは……。」

ラジウに視線を戻すものの、押し黙って返答をしないクレク。話したくないのがみえみえである。それにラジウはこめかみをピクリと動かしした。

「クレク……答えて。」

「…………ラジウ様、私の口からは……。」

真剣に見つめるラジウの視線に耐え切れなくなったのか、クレクは顔を逸らして否定の意を述べた。

しかし、その否定の仕方は本当だ。と言っている様なものでラジウの顔が曇る。

そして、そんな彼に更なる痛い追撃が繰り返される。

「ラジウさまー。本当のことよ。わたし、ホーデユ様の娘だってマ

マが言ってたもの。」

「オレ達、全員。ホーデユ様の子供なんですよー。あははははー。」

「

その痛い追撃を行ったのは幼い少女。ノメルだった。単刀直入に言う彼女の言葉でラジウは背中に影を落とした。

そして、サートによる止めの一撃。

これは痛いではすまなかった、ラジウだけではなくクレクも砂と化してしまうほどの威力。

キヴィは話を聞いて思わず三人を見比べた。血が繋がっている、まあ片方だけがそう言われると似ているような気もしないでもない。

「あ、あれ？ラジウ様……？もしかして知りませんでしたか……？」

あまりに無反応を決め込む、実際は頭が混乱して動けないだけだが。そんなラジウにサートは慌てたように聞いた。

「……………っ。」

ラジウは顔を茹でタコのように真っ赤にし、向きを変えると一目散に駆け出した。逃げたとも言っ。

彼の姿は小さくなりやがて消えた。

それをポカンと見送るその場に残された者たち。

「あ…………ラジウ様。」

「…………クレク。あんたも知らなかったんだね？」

「まさか、サート君たちがそうだとは知りませんでした…………。」

サートが去っていたものの名を呼び、キヴィとクレクの二人も半ば放心しながらポツリポツリと話していた。

「サートお兄ちゃん、ラジウ様どうしたの？」

「わからないよ、ノメル。」

兄妹の会話が全員の気持ちの代弁をしてることは言つまでもない。

第二章　真実と真意（４）

さて、走り去ったラジウはというと、一人城の近くにある湖のほとりに居た。

湖の色は薄い水色。底は浅いのか深いのか水が透き通っていないのでわからない。

水面近くを泳ぐ魚はちらりちらりと影を現してはいるが。

「うー……変な顔。」

湖の中に写しだされる自分の顔を見て、ラジウはしょんぼりと言葉を落とした。

眉に皺が寄っており、口はへ字型。その割りに弱気な色を見せる瞳。

自分の顔じゃないみたいだ。と、そう思った。

しばらく自分の顔を見てから、裸足になりその足で水をかき混ぜた。ひんやりとして冷たい水が心地よい。

それから思いつきり足をばたつかせる。バシャバシャと水が景気のよい音を上げた。

楽しくてそのままつい遊びまわってしまう。しかし、それで頭の中のものが綺麗さっぱりなくなることはなかった。

それが再び顔をもたげると、ラジウは足を止め、ため息をついた。

「……はあ、なんだか頭がおっつかないや。」

僅かにさっきまでの振動で揺れる水面を見つめる。それはやがて静かに収まっていく。

「僕……どっちかというと母上似。なんだよね。そういえば、サー

ト……父上に似てた……。」

ぼつりと誰にともなく呟く彼の目からは、きらりと光るものが溢れ出る。

自分はあるなかに近くに居たのに、そんな自分よりも他人の方が父を知っている。そのことに苛立ちを覚える。それとも一つ。なんとも言えない、胸にぼつかりと穴が開いたような空しさに駆られた。

「父上……。どうしてもういないのさ……。」

水の中に無かったかのように消える涙。また水面が小さく揺れる。聞きたいことはたくさんあるのに。答えて欲しいことがたくさんあるのに。いつもの笑顔がみたいのに。声が聞きたい。名前を呼んでほしい。抱きつきたい。

ラジウの胸の奥底で誰かがそうやって叫んでいる。
ぎゅっと胸元の服を握りしめた。

「うつ……。」

小さな呻きと共に水面が大きく揺れる。

くしゃくしゃになって苦しそうな、みっともない顔も一緒に揺らぐのを、曇った瞳で捕らえる。

あまりに胸が苦しくて、ラジウは目を閉じて深く深呼吸をした。
そして、目をゆっくりと開ける。

「わっ!!?」

水面が激しく揺れて、自分の顔が崩れた。それに驚いて思わず大きな声を上げてしまう。
意識せずに体は身を引いていた。

そして、水面を揺らしたものが水の中から姿を現した。

ラジウの目が捕らえたのは白くて鋭く太い牙と、暗く深い深い空洞。一瞬、それがなんだかわからず、大きな口を開けて見入ってしまう。しかし、ラジウはソレと目が合った。即座にそれが魚だということに気づく。とてつもなくでかい魚だと。

また、牙があることからしても普通の魚ではないことが明らかなのだが。

大口を開けた魚は、湖から飛び上がり宙を舞う。そして落下。更にその位置はラジウのちょうど真上。

今にも魚はラジウを飲み込もうとしている。しかし、目が離せないで動けないラジウ。

ドスっ！！！！

大きな鈍い音とともに、ラジウの視界に光が戻ってきた。彼は、いきなり入ってきた眩しい太陽に目を細める。

ポチャンという大きな音が耳に入ってきた。それと同時に水しぶき。水しぶきは辺りに散り、綺麗で鮮やかな虹を作り出した。

「……ふん。」

ラジウの横にスタッと軽い音を立ててシルキアが着地する。どうやら魚は彼に蹴飛ばされたらしい。

中途半端に長い汚れた金髪が風で揺れる。

それを目で追いながらポカンとしているのはラジウ。

彼にシルキアは腕組をしながらじっと視線を送っている。見下ろすような形で。

鼻を鳴らただけで特に何も言っていないが、その瞳は不振な目。こんなところで何をしているのか？と、ラジウを問い詰めていたりする。

「えーっと……シルキア。何でここに？」

しかし、意図を汲み取れなかったらしく、きょとした目をラジウはシルキアに向けた。

「……………修行？」

「いや、聞かないでよ。」

問いかけに対して眉を潜め、何故か疑問系でシルキアの答えは出てきた。

それに対して、ラジウはすかさず突っ込み返す。

「ふん。貴様こそ何をしている？」

またもや鼻を鳴らし、シルキアは突っ込みをあっさりと受け流す。そして、先程伝わらなかった意図を今度は言葉でさらけ出す。

「え？……………えっと……………水遊び？」

「聞くな。」

答えに詰まって、今度はラジウが聞き返してきた。それにシルキアはきっぱりと突っ込みを入れる。

「……………」

「……………」

次に続く言葉が見当たらないのか、見事に会話が終了を迎えた。

あまりの気まずさがラジウを顔を横へと逸らさせる。しかし、顔を逸らせた理由はそれだけではなかった。

ラジウは思い出したのだ。さっきまで泣いていたことを。顔は涙でぐしゃぐしゃなはずなのである。

ラジウが顔を背けたのを見ても、シルキアは黙ったまま彼を凝視している。

「え？」

突如、暖かい感触が頭に生じた。そのせいでラジウは不思議そうな声を上げたのだ。

シルキアが軽くラジウの頭に手を置いている。

ラジウは、シルキアを見ようとした。が、シルキアの手力によって下を向かされてしまう。

「……貴様は、強くなりたいんじゃないのか？」

「……………わかんない。」

シルキアの低い声は、不思議とラジウの心を落ち着かせた。問いに対して考えてはみたけれど、正直な話。心の中ではまだ答えが出てこなかった。

「僕、まだ子供で。弱くって。父上とは全然違うんだ。父上の子供なのに……………」

「貴様は貴様であらう。」

思っていることをぼろぼろと口から溢す。

シルキアが一言。しかし、その後に何か様子は無い。
それがラジウを余計に不安な気持ちに掻き立てた。

「僕は僕だけどつ。僕、強くなれる自信がないんだっ！父上だっていないし、僕。僕……もう、駄目かもしれない……辛いんだ。胸が痛くて。何かを吐き出したくなる。どうしていいのか……わからない。」

ラジウはシルキアの視界から消えた。しゃがみ込んだのだ。
シルキアが視線をやると、膝を抱え、腕に顔を埋めている。

胸が締め付けられるような痛さに、ラジウの瞳からまた涙の洪水が止まらなくなる。

どうして。こんなことに。僕は。何が。どう。したいのか。

ラジウの頭の中に言葉が断片的に出ては消える。

「貴様は、自分の力で生きて行きたかった。のではないのか？」

「……僕の力？」

「誰かに守って欲しいなら、飛び出さずにいれば良かっただろう。
安全な場所から。」

シルキアの手が離れた。

途端、ラジウの心に冷たい風が吹いた。不安が顔を擡げる。

その不安に駆られてラジウはシルキアをそつと盗み見た。

いつもと変わらぬ無表情。その顔がラジウを見ている。

いつもと変わらぬ無表情はラジウをほつとさせた。

哀れみなんてない。帰れなんて言っていない。敵意を感じない。そんな表情だったから。

「それに、弱いからこそ強くなれる。特にガキはな。」

ラジウは小さく笑った。シルキアが励ましてくれているのがわかったのと、それに元気づけられた自分に気づいたせい。

彼は自分が強くなれる。そういう保障をくれたような気がした。

「はは。オーケー。そうだよな。僕は、まだまだこれから！強くなるうって覚悟してきたんだ。父上になんか負けるもんかつ！って。こんなところで挫けてたら強くなかなれないよね。僕、シルキアよりも父上よりも強くなるよ。覚悟しといてね！」

ふふんと鼻を鳴らして宣戦布告。新たな目標と今までの目標を思い出し、やる気が出てきたようだ。

「ふん。」

シルキアは鼻を鳴らしてでも、楽しそうな密かな笑みをラジウに向けた。

ラジウの挑戦は受け取ってもらえたのだろう。

「よっし！シルキア！そんじゃ、さっそく修行つけてよ！！師匠、師匠！」

ラジウはここぞといわんばかりに片手をハイハイと挙げて元気よく跳ね上がっている。

その顔は先ほどとは大きく違い、顔いっぱいの笑みで埋まっている。とても楽しそうだ。

そんなラジウとは正反対に、シルキアは額に皺を寄せた。

「……………弟子はとらん。」

「ええ！？そこ！？そこ、突っ込むとこ！！？」

かと思うと突っ込みとも取れない言葉。

冗談で言った台詞に真剣そのもので返してきたシルキアに、ラジウは驚きの声をめいっばいあげた。
激しく喧しいことこのうえない。

しかも、その後、大爆笑なものだから、より騒がしい。
シルキアの額に皺がさらに深くなった。

「ふう……笑いすぎだ。バカ。」

「あははは、ご、ごめん！」

呆れた様にため息をつかれても、ラジウの笑いが止まることはなかった。

シルキアのこめかみが動く。

「……ふつ。いいだろう。修行をつけてやる。一つ目の課題は、さつきの魚を倒すことでいい。」

顔は笑っている。というか、嫌味な笑いにしかラジウには見えなかった。

小さくラジウは『うそ……っ。』と呟くが、その後が続かない。
どうやら思考が停止しているようだ。

「とつとと行って来い。」

そんなラジウをよそに、シルキアは彼の後ろに回りこむと躊躇もせずその背中を蹴った。

蹴られたことによって簡単に崩れたバランスのせいで、ラジウは抵抗もできずに水の中へまっさかさま。

ジャボン！という音と水しぶきが同時にあがった。

その振動によって、黒い影がラジウに迫る。

「ぐっ！あぶっ！！」

が、しかし。そんなことよりも先に、ラジウの命は危険に晒されていたりする。

バシャバシャと音を立てながら沈んでいく様は滑稽である。

シルキアが小さな目をさらに小さくして、無駄に手足を動かしながら沈んでいくラジウを見ている。

そう、ラジウは泳げないのである。

「……………ふう。」

やっとシルキアも理解したのだろう、いつもより数倍は重いため息をついた。

それから地面を蹴るとラジウの救出に向かうのだった。

シルキアは、あっさりと水の中からラジウを引き上げながら、『陸で鍛えるか。』と小さく呟くのであった。

第二章　真実と真意（5）

時刻は夕刻を過ぎ、城の食堂で美味しそうなおいが立ち込めていた。

もちろんそれを作っているのは朝ごはんの準備もしたクレク。だいたいの人が食堂に顔を見せ、各自の椅子へと座っていく。しかし、クレクはそわそわと落ち着きなく辺りを見回していた。

「ラジウ様、遅いですね。クレクさん。」

クレクの手伝いをしていた、サートが心配そうに同じく辺りを見回した。

夕食の準備は当の昔に終わっている。それにも関わらず姿を現さないこの城の主。

「そう。ですねえ……… いったいどこまで行ったのでしょうか……。」

城の主ラジウは、昼間泣きながら駆けていったのだが、それっきり姿を見せないでいた。

再び扉へと視線を投げるが変化はない。クレクの顔が暗く曇っている。

昼間から姿を見せないラジウを、あの時追えば良かった。と、クレクは思っていた。しかし、彼には多様な仕事待ち受けていたため、追うことも探すこともしなかったのだ。根底には、ラジウが起こすいつもの軽い癪癢で、時間が経てば収まる。そう考えていたことがあげられる。だから、彼もいつも通り常務をこなしていたのである。

「たっただいまーっ！！」

暗い空間を打ち破るがごとく、噂の当人が元氣よくドアを開けた。
ドガがガタン！と音を立てる。

「うわぁ、美味しそうな匂い〜。」

上機嫌で入ってくると、目いっぱい息を吸い込むラジウ。顔は満面の笑みである。そして、料理へと目が釘付けになっていたりする。

「ラジウ様！！」

ラジウはビクと身を固まらせ、慌ててクレクへと向きを変えた。クレクは怒ったような、悲しいようなそんな声でラジウの名を呼んだのだ。そして、彼の顔からは不安や心配などが見て取れる。

それもそのはず。ラジウの格好は昼間出て行った時とは比べ物にならないほど擦り切れてところどころ穴が開いている。最悪、服が干切れて原型をなしていない部分さえもある。更に、服だけではなく肌も擦り切れていたり、赤く腫れていたりしている。何より、血がところどころから出ているのが気になるところだ。それどころか、青や紫に変色していたり、血が黒く変色している部分さえもある。一番酷いのは目で、左目の辺りが全て青紫。打ち身になっていた。クレクはラジウに駆け寄ると視線を合わせ、彼をまじまじと見た。そして、しだいに皺が額に寄っていく。

「ラ、ラジウ様。このケガ……は？」

細く震えている声でクレクは聞いた。不安そうな声に、ラジウは視線を泳がした。そして彼同様、おたおたした口調で答え始めた。

「え……えっと、修行でちょっと……。」

「修行？」

歯切れが悪いラジウの言葉をクレクが反復する。理由を話すまでは決してはぐらかさせない。そんなイメージを受けるくらい真剣なクレク。

こうなると、ここでも動かないことをラジウは知っていた。だから、仕方なく説明をするのであった。

「う、うん。僕、弱いから強くなろうと思って。シルキアに修行をつけてもらってたんだ。」

自分の後ろに静かに立ち、表情からは何も読み取れないシルキアを、ラジウはちらりと見た。クレクの視線も、ラジウにつられシルキアを見た。その視線は鋭く射るような目だったが、すぐいつもの穏やかな目になるとラジウに視線を戻した。

「……そう、ですか。シルキアさんに……。ラジウ様、キヴィさんに手当てをしてもらって下さい。それと、今後はこのようなことをすることをお止め下さい。」

ラジウに柔らかく笑んで、優しい口調で言うクレクだが、言葉の内容にはいささかとげとげしさが拭えない。

そして、クレクは椅子から立ち上がり、シルキアの前へと進み出た。ちょうど、ラジウとシルキアの間に立つような感じだ。

「ちょ、クレク！」

クレクは、自分の後ろへと追いやったラジウの言葉には聞く耳も持たず、シルキアにきつい視線を送った。

「シルキアさん。ラジウ様を危険な目にあわせないで下さい！」

怒気をはらんだ声。そして鋭く殺気を帯びた目。クレクは明らかにシルキアを威嚇していた。元は敵同士であり、戦いでラジウに怪我が多かったことなど、クレクが彼を敵視するのは当たり前と言える。当たり前だろう。

シルキアは彼に視線を返した。シルキアの場合、元から細い目であるため、きつく睨んでいるようにも見える。

「……………」

しかし、言葉は返さずに無表情のまま立っている。

「ラジウ様にもしものことがあつたら！」

「クレク！何言ってるの！？たかがかすり傷だろ！？」

何も言わないシルキアに対し、今にも掴みかかりそうな勢いでクレクは彼に怒鳴った。そんなクレクの服を力いっぱい引っ張り、ラジウが抗議する。

「今回はこの程度の傷で済みましたけど！シルキアさんとラジウ様の力の差では、死んでもおかしくないんですよ！？」

ラジウの抗議に、クレクは思わずその怒気をはらんだ口調のまま、ラジウにまくしたててしまった。

「僕、死なないよ！」

売り言葉に買い言葉。クレクの言葉にのせられて、ラジウも声を張

り上げた。こうなってしまうば、どちらかが折れるまでこの言い合いは終わらない。

「いつ何があるかわからないでしょう！？危険なことは止めて下さい！！」

「い・や・だ！」

「ラジウ様！いい加減にしてください！こんなところで暮らすことさえ貴方はまだ慣れていらっやらないのにつ。これ以上無茶をしないで下さい！！」

「うるっさいなあ！ムチャなんてしてないし！！僕のことなんだからクレクには関係ないだろ！！？」

「関係あります！いざって時に助けられないでしょう！？それに、ラジウ様は子供なのですから、一人で全部なんてできません！！」

いつまでも大きな声で吠え合う二人。しかし、クレクの一言でラジウは一瞬押し黙り、顔を落とした。それからすぐに顔を上げると、涙目でクレクをキッと睨みつけた。

「僕を子供扱いするなっ！！」

大声で叫ぶと、ラジウはシルキアの腕をとった。そして彼を引きずるように、ドアに手をかける。

「もういいっ！クレクなんか知らないっ！大っ嫌いだ！！」

そう言い残すと、シルキアの腕を強引に引っ張り、ラジウはドアか

ら外へ出て行ってしまった。ドタドタという足音がだんだんと遠ざかる。そんな足音を見送っているクレクは、微動だにできないほど固まっていた。

「……大嫌い……。」

今にも倒れそうなくらいクレクの顔は青ざめ、肩の力が抜けていた。頭の中はぐわんぐわんと揺れるよう。クレクはラジウの言葉に多大なショックを受けていた。

「あーあ、心配性だからねえ。」

キヴィが今までの出来事を見てやっと口を開く。

「クレクさん……でも、よくわかりますよ。ラジウ様、危なっかしいですもん。」

あまりに動かないでいるクレクを心配してか同情してか、サートが慌ててフオローをする。

「親の心子知らず。だね。あ、ノメル。こぼさないで食べ。」

ため息を一つついてキヴィは状況を一言にまとめた。それから向かい側に座るノメルに、彼女は笑いながら注意した。サートがその言葉を受けて、手拭でノメルの顔を拭き、机を布巾で拭い去った。

「わっぷ。ねえ、ラジウ様、平気なの？」

ノメルは首を振って手拭から逃れ、首を傾げた。幼い彼女にもラジウの不安は伝わってきているのだろう。

「ああ、平気だと思うよ、シルキアもいることだし。まあ、あの調子じゃあ今夜は帰ってこないかもしれないねえ。だけど、明日には帰ってくるさ。」

「そうそう。明日にはいつものラジウ様に戻ってるから、ノメルは気にしないでいいんだよ。」

「ふーん？ そうなんだ。早く元気になるといいね、ラジウ様！」

キヴィの言葉にサートは頷き、ノメルの頭を撫でた。彼に頭を撫でられ、笑顔で返答してから、ノメルはまたご飯を食べ始めた。この間、未だにクレクは固まったままである。

第二章　真実と真意（6）

さて、ラジウとシルキアはというと。先ほどの湖にいたりする。薪を集め、湖の辺で火をたき、串刺しにした魚を焼いている。その付近に、目を赤くし涙をとめどなく流しているラジウと、濡れた髪をほどき乾かしているシルキアがいた。ちょうど火を囲むように彼等は向かい合って座っていた。火の明かりで影が揺らぐ。

「……………」

シルキアは相変わらず己から何も離そうとはしない。ラジウは、ゆらゆらと揺れる火を見ながら口を開いた。

「……………なんで子供扱いするんだろ。」

「子供だからだろ。」

「っ！シルキアまでっ！！」

ぼつりと呟いたラジウの言葉に、シルキアが反応する。しかし、その彼の台詞はラジウにまた大声を上げさせた。

そんなラジウをシルキアは一瞥すると言葉を紡いだ。

「……………貴様が貴様であるように、子供は子供だ。」

シルキの声は静かで、ラジウの中の怒りをだんだんと鎮めていくようだった。決して暖かくはない冷たいような静けさだが、ラジウは確実に彼の言葉と声で落ち着きを示し始めている。

「……背伸びしたいお年ごろなのっ！」

口をわざとへの字にし、ラジウはそう言った。その口調は、先ほどの取り乱したようなものではなく、拗ねたようなもの変わっていた。

自分が幼いことはよくわかっている。どんなに頑張ったところで、年が取れるわけでもない。それは認めざるをえない事で。

ラジウは組んだ腕に顔をのせた。

「あーあ。僕ってそんなに頼りない？そりゃあさ、王宮生活からこんなところに来て、いろいろ大変なことあるよ？でもそんなことで文句なんか言ってられないじゃんか。僕の他に人がいるのに、僕だけ文句言って贅沢なんてできないよ。ねー、聞いてるー？」

今まで溜まっていたことをベラベラと言葉にして吐き出した後、ラジウは口を挟んでこないシルキアに確認の意図を込め、話を振った。

「ああ。」

「……じゃあさ、シルキアはどう思う？」

一言の返答のみで台詞を続けようとしないうシルキアに、ラジウが仕方なさに促した。

「ふん。貴様の好きにすればいいだろう。何かをすれば何かが起きる。それを全て予測するのは不可能に近い。」

「そりゃあそうだけどさー。じゃあさ、質問変えよう。僕って、一人で生きて行けなさそう？」

身もふたもない言葉に思わず苦笑いを浮かべたラジウ。しかし、その返答は彼が聞きたいものとは異なっていた。だから心臓がドキドキするのを押さえ、ラジウは思い切って答えてほしい核心の問いを投げかける。

「ああ、無理だろう。」

「うつわ！？即答！！？」

あまりにそつけなく素早い返答は、ラジウに大きな声をあげさせた。シルキアはしばしラジウの顔を相変わらぬ無表情のまま見た。

「……ふん。半人前。」

「ええ！！！？ひつど！泣くよ！？」

「勝手にしろ。」

「うわぁ……冷たい。」

シルキアの言葉にラジウの大げさなアクションと声。しかしラジウからは、どこか楽しげな雰囲気が見える。

ラジウの台詞にシルキアは一度小さくこめかみを動かした。

「そうか。それならこれはやらんでもいいな。」

そして焼けた魚を全て手に取った。冷たいという言葉が、彼の機嫌を悪くしたようだ。その腹いせだろう、案外大人げない。

「わっ！やだっ！！夕飯食べてないからお腹減ってるのに！！」

「知らん。」

ラジウがシルキアの手から魚を奪おうと彼に掴みかかるが、いかんせん子供の力、びくともしないうえに魚を上に掲げられてしまい手も足も出ない。

「ぶーっ！」

「変な顔だな。」

頬をパンクするのかと思うくらい膨らませてみれるラジウに、さらりと思ったことを率直に言うシルキア。それにラジウは、ショックを受けたようによろめき口を開け、頬に手を当てた。その面白いこと。シルキアはその顔を見て、無表情のままだが少し噴出した。噴出されたことに更にショックを受け、ラジウが何か言おうと口を開く。

「ラジウ様ーっ！」

くっつかかろうとしたその時、ラジウの名前を少し高い子供特有の声が呼んだ。声を方を二人を見ると、暗い中を小さな影が、こちらに向かって駆けてくる。

「サート！何でここがわかったの！？」

近づいてくる少年に、ラジウはびっくりしたようにシルキアから離れ、駆け寄った。ラジウの前まで来ると、それがサートであることがよくわかった。息を切らせていることから、城からここまで走ってきたのだろう。

「はあはあ。そ、そりゃあこれだけ大きな声で騒いでたらわかりますよ。」

サートが息を整えながらしゃべる。ラジウはその返事を聞くと、何を思ったのか辺りを見回した。しかし、人影は他にはない。

「あ、オレだけですよ？ノメルは寝かしてきましたし、クレクさんはあの後倒れちゃって。それでキヴィさんが看病してます。」

そんなラジウの行動を読み取ってか、サートはにつこり笑い説明した。

「たお……れた？」

サートの台詞に、ラジウは頬を引きつらせた。予想の範囲をこえていたのだろう、少しばかり焦りを見ることが出来る。サートは頷いてラジウに答えた。

「あ、はい。だいぶショックだったらしく……。」

「弱いな。」

思ったことを口走るシルキア。そして、ラジウは気まずそうに首をたれた。

「もう、違いますよ、シルキアさん！クレクさんはそれほどラジウ様が大切なんですよ!!」

「……守らなきゃいけない存在だからね。」

サートがいきり立って説明するが、それにラジウは寂しそうに反応を示した。しかし、次のサートの言葉にラジウは固まるのだった。

第二章　真実と真意（7）

「違いますよ！好きだからです！！」

「はっ？」

「守らなきゃいけない存在だからじゃありません！クレクさんを見てればわかります。クレクさんにとってラジウ様は好きだから守りたい存在なんです！！」

「ぶっ……は、恥ずかしいこと言っなよ、サート！！」

真剣にラジウを見つめ熱弁するサートに対して、ラジウは両手をぶんぶん振って慌てていた。彼の顔は耳まで真っ赤でまるで茹蛸だった。よほど恥ずかしかったのだろう。

「あれ？……ラジウ様、顔真っ赤ですよ？」

「う、うるさいなっ！」

驚いたように瞳を見開き、不思議そうにサートは首を傾げた。それに両の手で顔を隠そうとするラジウ。そんな彼を見てサートはにっこりと笑った。何かをサートはわかったのかもしれない。

「ラジウ様、クレクさんのところに戻りませんか？」

「……………」

サートの説得に折れたらしく、ラジウは小さく頭を縦に振った。腕

の間から見える顔は、まだ多少赤い。

「貴様、すごいな。」

「えゝ？シルキアさん、褒めても何も出ませんよ？」

魚を平らげ腕組をしながらその様子を見ていたシルキアが、サートに言葉をかけた。その口調はどこか驚きが混じっていた。それに対して、笑いながらサートは答えた。

「あ、シルキア！もしかして全部食べちゃったの！？」

「ああ。」

サートの視線がシルキアに向き、ラジウも彼に目を向けた。そして目に付いたのは魚がついていない串。それが何を示しているのかラジウはすぐに気づき、大声をあげた。

シルキアは平然と頷き後始末を始めた。砂をかけ、火を消している。それを見たラジウは肩をガクンと落とした。これ以上彼に何かを言ったところで仕方がないことがわかったようだ。

「んもう！仕方ないから帰ってクレクにご飯作らせる！！」

ラジウは、怒りを発散するかのようにつんでから踵を返して、足踏み荒く歩を進めていった。

「シルキアさんも相当なものだと思いますよ？」

「……ふん。」

その様子に笑みを溢し、サートはシルキアも声をかけた。シルキアは鼻をならして返事をするだけ。それにサートはひとしきり笑ってからラジウの方へと向きを変えた。

「ラジウ様、待ってくださいよ！」

さつさと先を歩いていくラジウを彼は追う。

傍から見れば何とも穏やかな光景だ。危険が迫っているとも知らずに、彼等は歩く。

湖の水面に泡が少しづつ浮き出す。水面の色が段々と淡くなる。光が水面の下から上ってきているのだ。

”何かいる”初めに気づいたのはシルキアだった。しかし、時既に遅し。水面から飛び出た”ソレ”はラジウとサートに向かって、襲い掛かるうとしていた。

「逃げる！！」

シルキアの咆哮がラジウ達の耳に届く。その声は、二人を振り向かせた。目の前には先ほどの光景とはまったく違う、水色に輝く長い布のようなものが目の前にあった。しかも目と鼻の先まで迫っている。

「ラジウ様！」

とっさにサートはラジウを両手で強く突き飛ばした。

「ったあ！？」

間抜けな声を発し、ラジウは勢いがついたまま大きく吹っ飛んだ。背中を地面に打ち付けたが、慌てて身を起こす。すぐさま、先ほど

まで自分が居たであろう場所に目をやった。その場所はすでに何もない。あつという間に水色の”ソレ”がサートを飲み込み、湖の中へと引きずり込んでいった。あまりの出来事に、放心状態になりばーっとしてしまうラジウ。

「ちっ。」

シルキアは彼を見て舌打ちをすると彼の傍へ走った。そして、走ったままの勢いでラジウを小脇に抱える。また水色の”ソレ”が湖から顔を出したのだ。

抱えられた瞬間、ラジウの視界は湖の光景ではなく、暖かみのあるオレンジの光に照らされたレンガの壁に変わっていた。シルキアが自分を抱えて、彼の特殊な能力の一つであるテレポートで移動したことがわかるまで、数秒かかる。

どうやら城の一室にテレポートしてきたようだ。白いベットが規則正しく三つ四つ並んでいる。部屋の端にある机の上は、書類の山で埋まっていた。その近くにある椅子の上には、いつもより大きな眼鏡をかけた、青緑の髪と瞳を持つ女性、キヴィがいた。ラジウ達を、口をあぐりと大きく開けながら見ている。

ここが城にある病室だということに、ラジウはやっと気付いた。

「何やってんだい、あんたら？」

目を見開いたまま、不思議そうに問いかけるキヴィ。シルキアは、ラジウを床に降ろすと彼女に向き直った。彼の額にはじんわりと汗が滲み出ている。

「……水色で、輝く触角みたいなものを何だと思う？」

「そりゃあ、人間じゃないだろうね。動物にしたって、そんなもの

は聞いたことも見たこともないよ。極めて魔物の可能性が高いだろうねえ。」

真剣なシルキアの顔つきに、キヴィも真顔で答えた。何が起きているのか分析するかのようには、ラジウとシルキアを交互に見ながら。

「そうか。」

「そうだよ。いったい何があったんだい？あんたの疲れ具合からして、部屋一個分とかそういう距離の場所じゃないね？」

何も状況説明などしないシルキアに、キヴィが業を煮やして問い詰め始める。話の内容からして、どうやら彼女は、シルキア的能力についてよく知っているようだ。

「ああ、魔物が居た。少し離れた湖にな。」

キヴィの言葉に、小さく頷いて台詞を紡ぐシルキア。

「さ、サートがつ！キヴィ、サートがつ！！」

今まで声を発さず、顔を落とし床を凝視していたラジウが、シルキアの言葉に反応を示すかのように、いきなりキヴィに訴えかけた。しかし、上げられた表情は眉間に皺がより、目からは涙が次々に零れ落ちている。同じ言葉をうわずりながら何度も叫んでいるのが、混乱しているのを示していた。

「ちょ、落ち着きなよ！ラジウ！！」

いきなり服を掴まれ、涙目で見上げられては、流石にキヴィも慌て

ふためく。それでも、ラジウが落ち着く様子は垣間見れず、必死な叫びは続く。

「サートがつ！サートが大変なんだよ！！」

「ラジウー！落ち着けていつてるだろ！！？」

喚くラジウに対抗して、大声で怒鳴るキヴィ。それに、ラジウはびくつと身体を震わせ黙り込んだ。そんな彼に、腰を落とし、逆に見上げるような位置にキヴィは身体を動かした。そしてラジウの腕を優しく握った。

「ラジウ。いったい何があったのか。ゆっくりでいいんだ。落ち着いて説明しておくね。」

「あ……サートが……サートが湖の中に……水色の変なのに……連れてかれた……の。」

ラジウは、震える青い唇をなんとか押さえ、小さな声で少しづつ語った。キヴィは『よくできました』と言いながら、小さな彼の頭を軽く撫でた。大丈夫、安心しろ。そう言っているようで、ラジウは強張らせていた肩をおろした。

「シルキア、ラジウ。クレクを連れてそこへ行くよ。何が起きてるのか、この目でしっかり見るためにね。」

キヴィはにっこり笑ってみせた。

第二章　真実と真意（8）

そして、場所は湖のほとりに戻る。暗闇の中で、サラサラという水の音が辺りに響く。

月明かりが人影を四つ浮かび上がらせた。

「……何も変わったことはなさそうですが……。」

辺りを見回し、クレクは呟いた。確に辺りは静まり、月明かりに照らされたその場所は何の変化も見られない。

湖はただ月の光を淡く反射させるだけ。

「で、でもっ！！湖の中から何か変なのが出てきたんだっ！！」

「近付くな。」

そんなはずはないっ。そう心が急ぎ立てて、ラジウは湖に駆け寄ろうとする。しかし、シルキアが、彼の服を掴み止まらせる。先ほど異変があつた場所に近付くのは、危険だと言っているのだ。

「湖に住む魔物といえば巨大魚、水の精霊、もしくは妖精。そう称される部類かねえ。大概そういう奴らは、」

キヴィはぶつぶつと思案しながら、近くにあつた手ごろな石を拾い上げる。そして、大きく振りかぶった。

「自分の住処を荒らされたら出てくるんだよっ！」

そして、そのまま石を投げた。湖に人が近づくことはなく、石が水

面を揺らす。すると、先ほどと同じ発光した水色が水底から這い上がってきた。

「ほーら、お出ました！」

バシャっという音を立て、水柱が勢いよく立ち上る。水しぶきがあたりには撒き散らされる。それらがだんだんと収まり、視界から水色が消えていく。

「えっ!？」

ラジウが素っ頓狂な声をあげる。

水が消えると同時に現れたのは、透明な薄水色をし、辺りを照らす美女。人間のような形をしているが、足は水に溶け込み、体中には青い文様がところどころ浮かんでいる。また、長い髪は途中で体の中に溶け込み、表情は無表情のままラジウ達を見つめている。

その水の中から現れたそれに、困惑の色を浮かべているのはラジウ一人だけ。

「ふーん。見た目からすると、精霊みたいだね。」

キヴィが平然としながら言う。慣れているのか、性格のせいなのか定かではないが、どつしりと構えている。

「精霊？さっきから思ってたんだけど、魔物って種類あるの？」

そんな彼女の態度につられてか、緊張がほぐれた様子でラジウは問いかけをぶつけた。

彼は世界の状勢をつゆほども知らなかったのである。だからそんな問いが出てくるのだ。多分彼が知っているのは周りに居た物のこと

ただだろう。完璧に箱入り息子といったところだ。

「ああ、知らないのかい？魔物ってえのはね、人間と違った形を持ち、人間よりも強い力を持つ者を総称して言うんだよ。特に好戦的な者を指すんだけどね。その中にはいろんな種類があるんだよ。だいたい見た目と能力によってわけられてるんだだけだね。精霊っていうのは、実態……いや、形を持たないものを言うんだ。」

「形を持たない？今、目の前に居るのに？」

「あれは私たちのマネをして形をとってるだけさ。精霊は見るたびに化する。それは何かと対峙する時、こいつはその形に似た姿へと変貌する性質を持っているらしいんだよ。だから、今はあんな風に人間に近い形をとっているんだ。」

キヴィは、次から次へ自分の頭の仲から知識を引っ張り出していく。隣でラジウが早くもプスプスという音を立て、煙を上げているとも知らずに。

「ええと、キヴィさん。完結に言うかどうかということですか？」

そんなラジウを心配そうにみやり、助け舟を出すクレク。キヴィはそこでやっとラジウが自分の説明についてきてないことを知った。仕方ないねえ。とぼやきながら、キヴィは一言にまとめた言葉を吐く。

「サートを連れて行ったのは、多分こいつ。ってこと。」

キヴィの答えがわかったのだろう、ラジウは気力を取り戻した。

「そうか、こいつがつ！サートを返せ！！」

そして、薄水色の”ソレ”を睨みつけ、大きな声で叫んだ。それにキヴィが、やれやれと言う様に方をすくめるのだった。

ラジウの声に應えるかのように、”ソレ”はにやりと笑んだ。笑みは妖艶で、それでいて生気が感じ取れない冷たいものだ。それにぞっとして全員が固まったとき、再度水しぶきがあがった。さっきよりも大きな水しぶきで、湖は覆い隠されている。

「な、なにこれ……？」

視界がやっと開け目の前に現れたのは、灰色で円状の平べったい階がいくつか縦に連なっている建物。水の上には一番広い一階しか出ていないが、水面にはまるでそこにあるかのように、鏡のごとく六階まで映し出されている。下に行けば行くほど縁が小さくなり、まるで逆さまに立っているような錯覚に見舞われる。水面に写っているものは現実には存在しない。

しかも、その出ている部分へは、彼等が居る場所へと橋がかかっていた。

「っ！！水の中に城ってか？ラジウ、見てごらん！一番小さな円のところ、てっぺんの窓っ！！」

「サート……！！」

キヴィの言葉に全員が視線を移動させる。一番小さな円の窓に、サートの顔がちらりと覗いていた。身体には水の荊が突き刺さり、彼の動きをとめている。

「ちょ、キヴィ！助ける方法ないの！？」

異様な事態に焦りを露わにするラジウ。彼はキヴィへと真剣な視線をおくる。その目は心配という色によって曇っていた。

「あるよ。……あの中に入って、サートを助け出せばいい。それだけだよ。」

キヴィは少し間を空けながら説明をした。そしてさり気なくラジウの襟首を捕らえる。

グッ。そんな音がするかのように、ラジウの首に服がめり込んだ。彼女から説明を聞いたラジウは、矢も盾もたまらずに走り出そうとしたのだ。

「あんたは、そうやって最後まで話を聞かないんだからまいるよ。ったく。」

咽こんでいるラジウの服を離し、ため息をつく。そして、ラジウが不満そうな顔を自分に向けてくるのを確認してから言葉を続けた。

「いいかい？なんでわざわざ一階だけ地上に出てると思う？しかもご丁寧に道まで作ってさ。」

キヴィの問いに、ラジウは首を一回、二回……三回とひねる。そして、少しの間のあと、はっとして手を叩いた。

「親切な人なんだね！」

バシン！！

「違うつー!!」

ラジウの言葉にキヴィのハリセンが炸裂した。思わず頭を抱えるラジウ。それを苦笑いながら見ていたクレクが、口を開いた。

「畏の可能性が高いのですよね？キヴィさん。精霊達は、精神的ダメージを与えることが好きだと聞いています。」

「そうさ。だから間違いないく、あそこに入るのは危険なのだ。というわけで、私はシルキアと私で行くことを押すね。」

クレクの言葉に頷きながら、キヴィは提案をする。もちろん、その提案はラジウに対するものだった。先ほどの行動を見れば、一目瞭然。サートを助けに行くといい出すにちがいがなかったから。

「えー！？キヴィは危ないよ！そ、そりゃあ一人よりはいいかもだけれど……。」

やはりラジウは不満そうに抗議した。自分も連れて行け、そう言っているのがよくわかる。

第二章　真実と真意（9）

「それなら、私が一人で行きましょう。」

考えもつかない人物からの申し出に、キヴィとラジウが目を見開いた。クレクはそれを見て、気まずそうな笑みを浮かべ、シルキアへと視線を移した。

「ふん。貴様一人ですか？それなら、俺一人で十分だ。」

その視線に横目を返し、シルキアは自信満々の一言。その台詞に、クレクの顔が強張った微笑みへと変化する。

「あまり甘く見ないで欲しいのですが、どうせ協力などするつもりはありませんし。私は私、シルキアさんはシルキアさんで行けばよろしいのではないのでしょうか？」

固まったままの笑みを浮かべ、クレクは言った。その笑みは冷たく無機質である。クレクが踵を返し、湖に向かおうとすると、ラジウが彼の服の裾を引っ張った。

「僕も連れてつてよ！！」

そして自分の意見を主張する。それに対してクレクは眉を潜め、首を横に振った。彼の行動は明らかな拒否を示していた。ラジウは彼の反応にいったんうな垂れた。

だが、思い直したのかすぐに顔を上げた。そして、シルキアを見る。今度は彼に訴えているのだ。

「……足手まといはごめんだ。」

「　　っ！！」

シルキアの言葉に言葉をなくすラジウ。眉が八の字に変わり、頬を膨らませ、目からは涙がちりと顔を覗かせた。それは明らかに落胆しているのが誰にでもわかった。クレクにさえ胸をぎゅっと掴ませるくらいだ。

シルキアはラジウを見たまま言葉を続けた。

「だが、経験を積まなければ、足手まといはいつまでも足手まといだ。」

シルキアは話の途中でラジウからクレクへと視線を移した。

シルキアの発言はどうとつてもラジウの肩を持つような内容だった。その発言は、ラジウにぱっと顔を輝かせ、逆にクレクには額に皺を増やさせるものとなった。

「それでも危険な目にはあわせられません。それならば私と貴方が行けばいいだけの話でしょう？　そうすれば簡単に方がつくはずです。」

クレクのひどく秘めたい視線と口調がシルキアに突き刺さる。クレクから感じられるのは敵対心。それでしかないことを、シルキアは感じていた。

「どうやら貴様は、俺に対して喧嘩を売っているようだな？」

だからこそシルキア同じように鋭い視線を彼に向けた。クレクは待ってましたとばかりに速やかに背中にも常備している弓に手をかけた。

「そうですね、貴方とはまったく意見が合いませんし、はつきり言
って嫌いなタイプですから。」

「そうか、それならばその喧嘩。買ってやる。」

気持ちを書わにしたクレクに対応するかのようにはシルキアは腰に差
した短剣を手に取り構えた。二人ともが戦闘体制に入り、にらみ合
っている。今にも戦いの幕が切って落とされる。そんな緊迫した空
気が辺りに漂った。

「ちょっとお待ち!!」

その間に大きな凜とした声が邪魔をする。しかし、二人は睨みあつ
たまま動こうとしない。その様子に、キヴィはため息をついた。
キヴィは、ラジウの傍に移動し、彼の腕を取った。そして二人から
ラジウを引き離す。

「二人ともお聞き！私は精霊のことはある程度文献で知っているん
だ。その中の一つで、奴等の城にはね、決して一人では入れないん
だよ。わかったかい？だから、あんたら二人で行つとくれ。」

キヴィはラジウの手を引き、歩き出す。その行動の変容に、シルキ
アとクレクは彼女を見た。

「私はラジウと行くからね！」

そしてラジウにウィンクすると、既に橋までの一歩手前。そこから
ダッシュで精霊の城、塔へと駆け出した。ラジウは驚いたものの、
引きずられないように足を動かした。

あつという間の出来事に、シルキアとクレクは目を点にして口を開け、見ているだけ。

「ちなみに、要望、変更、拒否は受け付けねえからね！ハンデとして先に生かせてもらっからね！」

キヴィの声ではっとするが、やられた。そういう表情なのだろう、二人の顔に影が落ちる。

キヴィとラジウは既に橋を渡りながら塔の入り口を目指していた。

ゴゴゴゴ

正気を取り戻し、追おうとする二人の耳に地鳴りが届く。慌てて辺りを見回すと、キヴィ達が走っている橋が、彼女達が走った後を追うようにして段々と沈んでいくのであった。そうまるで階段のように、一定の幅が次々と。

だから、もうクレクの足元より先は水の中に消え、ジャンプしたところで、まったく届かない位置まで水の中に埋まっていた。

「……ちよっ！私たち行けないじゃないですか！！？」

思わずクレクが声を上げた。止める間もなくラジウを引っさらわれ、あまつさえ後を追うことさえもできない。そんな今の状態に、クレクは多少取り乱していた。

「ふん。キヴィのやつ……知っていたな。」

そんな彼の後ろで、シルキアがため息混じりに毒づいた。そして、

シルキアは何も言わずにクレクの肩に手を置いた。

彼の行動に驚き、とつさにクレクは逃げようとする。しかし、次の瞬間、景色が一変したことに身を固まらせたのだった。

草や木といった緑色の景色から、一瞬にして全てが灰色の世界へと変わったのだ。誰でも驚きのあまり、体が動かなくなるのは当たり前だ。まして、シルキアのこの能力を初めて体験したものならばなおさらだ。

一つだけ色が違うそこから、キヴィとラジウがこちらに向かって走ってくる。しかし、何かが変だ。

「……逆さま？」

シルキアが眉を潜めて呟く。それにようやつと意識を取り戻したクレクが、シルキアの声に彼の視線の先を追った。壁が切り抜かれ、外が見える入り口がそこにはあって、それにラジウとキヴィが近づいてくる。しかし、彼等はクレク達と足がひきつけられている地面が間逆だった。その光景を見ていると、まるで自分が天井にくっついていてるかのような感覚にとらわれる。

クレクが違和感まるだしの景色に意識を奪われている間に、キヴィとラジウはようやつと入り口まで走ってきた。息を切らしながらキヴィは二人を見ると、肩を落とした。

「あーあ、ずるいよシルキア。」

キヴィがため息混じりに抗議する。一方、キヴィに半ば引きずられながらやってきたラジウは目を白黒させていた。そんな彼をキヴィは入り口の中に捨てるかのようにポイッと放り投げる。投げられ宙を舞うラジウだが、すぐさま白の引力に引きずられ頭から床に向かって落下する。慌てて手足をばたつかせる行動も空しく、ラジウの頭はガンっ！という音と共にシルキア達の足元に打ち付けられたの

である。

キヴィはラジウの様子を見てから小さく頷くと、しゃがみこんで足から入り口に入った。すると、彼女は見事足から着地したのである。

「いったーっ！！」

「ラジウ、あんた受身ぐらいとれるようになった方がいいんじゃないかい？」

横で頭を抱え起き上がれないでいるラジウに、キヴィが一言。それどころではないうえに、投げた張本人に言われてはラジウもなんと返していいかわからない。しかし、『せめて頭は守れ』とシルキアにまで言われてしまった。

「さてと。お？なんだい、クレクも来てたのかい。どうやってここまできたんだい？」

ラジウの手をとって起こしながら、キヴィはクレクが居ることに首を傾げた。

「俺が連れてきた。」

その問いにはクレクではなくシルキアが答えた。そして、まだ言い終わっていないのか再び口を開くシルキアだが、

「なーんだ、仲良いじゃないか。じゃあ、チームは変えなくていいね。じゃあ、とつと行こうじゃないかラジウ。」

キヴィの台詞が割って入った。台詞を邪魔されたことにシルキアは眉を潜めてキヴィを見るが、彼女はラジウを見て目配せをしている

ため彼の不機嫌な顔に気付いていない。

「あ、うん。行こうか。」

キヴィの目配せに、ラジウは何度も激しく頷いた。キヴィとラジウは他の二人を無視するように、部屋の隅にある上の階まで続いているであろう螺旋階段へと足を運んだ。

「え？ちよつと、キヴィさん？」

二人の行動に、今までばかと口を開け話についていけていなかったであろうクレクが慌てて声を掛けた。
声に二人は一緒に振り向く。

「シルキア、クレクと組まなきゃ絶交だからね。」

「クレク、シルキアと組まなきゃ駄目だからね。命令！」

キヴィからシルキアへ、ラジウからクレクへ、駄目だしの念が押された。シルキアはため息をつき頭を重そうにゆっくりと横に振り、呆れた様子である。一方、クレクは頬を引きずらせながら仕方なくラジウに頷いたのだった。

反論してこない彼等を見て、ラジウとキヴィは顔を見合わせて笑い、ずっと上まで続いている螺旋階段へと足を運んだ。

階段を上ると、二人の姿はさっと消えてしまった。しかし、残されたクレクとシルキアは消えてしまったことに驚きを示さなかった。なぜなら、重力が違う時点で既にこの城の中は精霊の巢の中であることを理解していたからだ。何が起ころうとも可笑しくない。と彼等は認知していた。

「さて、多分ラジウ様やキヴィさんと一緒になることもないでしょう。心もとないですがシルキアさん、行きましようか。」

まだ敵意と皮肉を捨てられない視線と口調で、クレクはシルキアに提案をする。

「ふん、仕方あるまい。どうやら二人でないと先に進めぬようだ。付き合ってやる。」

シルキアは額に皺を寄せた後、彼を見ることなく歩き出した。実は先程からシルキアは自分の力を使って移動しようと試みているのだが、どうも上手く行かないのだ。シルキアの力は、人か場所を思い描くか、その場所が視界に入っていれば使うことができる。それが上手く発動しなかったのだ。

さらに、二人で行動しなければいけないことの証明として、階段の前に立ったシルキアの伸ばした手がバチッと音を立ててはじかれた。先程あっさりとラジウとキヴィを飲み込んだにも関わらず、その階段の先はシルキアを拒否したのである。

クレクはそれを見て大きなため息を吐くと、しゅしゅと言った感じでシルキアの傍へと足を進めた。

そして、二人は一緒に階段へと姿を消すのだった。

第二章　真実と真意（10）

「何もないただっぴろい部屋に出たねえ。」

階段を上ってしばらく行くと、広い円形状の部屋がキヴィとラジウを待ち受けていた。

明るく声を出したのはキヴィで、その声が何重にも響き渡って木霊する。

「ねえ、キヴィ？クレクとシルキア……大丈夫かな？」

肩を落としながら額に皺を寄せ、何かを考え込んでいたラジウが心配そうに言った。

「大丈夫も何も、嫌でも二人で行動しなきゃならないだろうね。」

「なんで？」

キヴィは周りを見ながら、興味なさそうに二人のことをさらりと口にした。そのあっさりした態度と内容に疑問を持ったのだろう、ラジウがいささか強い口調でキヴィに問いかける。

「ああ、実はね、精霊ってのは本当性質が悪いんだよ。最悪の組み合わせで行動しないと、精霊のどこまで決して辿り着けないようになってるんだよ、ここは。そこで仲たがいをさせるのさ。残るのはたった一人……そういうのが好きな連中なんだよ。覚悟しときな。」

キヴィの話にさらに心配そうに眉を顰めるラジウを見て、キヴィは諦めるとでも言うかのように、肩を竦めた。

「いいんだよ。子供と女子ほっ婆といて喧嘩してる野郎共なんぞ、一度痛い目見れば。」

「キヴィ……。」

嫌味を紡ぐ彼女に、ラジウは思わずと遠いところに視線をやってしまった。

「だけどね、ラジウ。二人の心配ばかりしてる場合じゃないんだよ？ 私達だって、敵の腹の中にいるんだから」

私って、誰？

キヴィの台詞に何かが割って入った。透き通るような高い声。キヴィは目を見開いて後ろを振り返る。

ねえ、私って誰？

「キヴィー!!」

妙な声に焦っているキヴィを、ラジウが呼んだ。彼の口調もまた、上擦っており慌てているようだった。キヴィはラジウの方へと体を向けた。ラジウはある一転を指差し固まっていた。彼の指の先を目で追っていき、キヴィはぎょっとして体を強張らせた。自分にそっくりな”ソレ”が自分を凝視していたから。

「アレ……僕。だよね？」

ラジウがぼつりと彼女に言う。ラジウには、目の前に佇む”ソレ”

が自分に見えているのだ。それを彼の台詞で瞬時にキヴィは読み取り、にやりと笑みを溢した。何かを思いついたのか、余裕の笑みが彼女の顔に張り付いている。

「ふふん。ラジウ、あたしゃこいつの正体がもうわかったよ。」

自信満々の発言をし、キヴィはラジウに目配せをした。しかし、まだ”ソレ”の正体がわからないラジウは、目を白黒させて彼女を見るしかなかった。

「ほんと！？いったい何なの？コレ。」

「よし、じゃあヒントをあげよう。私にはアレが私に見えるんだよ。」

キヴィは答えを教えるわけではなく、にんまりとした笑ったままヒントを出す始末。明らかに彼女は楽しんでいる。

ラジウは眉を顰めて、口をへの字へと曲げた。正直に言うところ、キヴィもそうだがシルキアも、またクレクもこの出来事を楽しんでいるようにラジウは感じていた。サートのことを誰一人心配していないように思えて仕方なかったのだ。

かといって、ラジウもサートとは短い付き合いである。だから、サートのことをよく知らない他人と区別してしまうキヴィやシルキアのことがわからなくもなかった。なにせ、彼等の方がサートとは関わった時間は少ないのだから。けれど、ラジウはサートを助けたいと真に思っていたのだ。だから、彼等の行動にいささか不満を覚えているのが今の現状である。

「ねえ、キヴィ？どうしてヒントなんて出すの？教えてくれてもいいじゃん。」

いささか怒り口調で、ラジウはキヴィに問いかけた。

ラジウが怒っているのは、他にも理由があった。ラジウはどうしても重ねてしまうのだ。居なくなってしまった父と、サートを。目の前から消え去り、戻ってきたときには……そのことがラジウの頭によぎり胸を締め付けていた。それが苛立ちとなり表に顔を出し始めているのである。

頭に血が上った状態で、いくら考えたとしても答えはでてこない。考えれば考えるほど胸のもやもやが募っていた。

「それじゃあ、面白みがないだろう？」

キヴィの一言が引き金を引いた。ラジウが肩を震わせ、大きな口を開けて吼える。

「キヴィ！ふざけてる場合じゃないよ！？サートが大変なんだよ！」

悲痛な叫びを吐き出したが、ラジウは眉を顰めた。キヴィの様子がおかしいのだ。

キヴィはラジウの咆哮にびくつと身を震わせたかと思うと、目を大きく見開いて後ずさったのだ。先程の余裕の表情とは打って変わって怯えたような表情になる。いくらラジウに吼えられたからと言って、そこまでおののくことは可笑しな話だ。

「う、うるさいね！鏡のクセに何言ってるんだい！？」

そして、キツとラジウの横を睨みつけ怒鳴り散らす。まるで、ラジウのことが眼中にないようにじっと見つめている。異様な光景に、ラジウはキヴィの顔色を伺った。血の気が失せ、少々青白くなつて

きている。目は見開いたまま微動だにせず、眉が折り曲げられ恐怖しているのがありありと伝わってきた。

自分の声が聞こえていない。そして、明らかに彼女は自分でない何かを見ている。それは、隣にいる自分。ラジウは、恐る恐る彼女の視線を追ってみた。

視線の先に立っていたのは、彼女が言っていた通り鏡に映しだされているであろう自分がこちらを見ていた。しかし、様子がおかしい自分とはまったく違う様子なのだ。怯え眼でラジウを見る彼。ラジウは彼の正体に気付いたからだろう、驚いてはいるが怯えてはいないのだ。

ねえ、君は本当にラジウ？ラジウは、こういう不可思議な物を見て怖がらないほど、強かったわけ？

彼はラジウに視線を向けたまま、ポツリと呟いた。その言葉にラジウは戸惑い、一歩下がった。初めて目にする鏡の性質を持つ得体のしれないもの。普通ならば、恐怖しないはずがない。けれど、ラジウには今、その感情は存在しなかったのである。それを自分で感じてしまい、逆に不安がラジウを襲った。

怖がらないなんて、君のほうが鏡なんじゃない？

怖がりながらも重い言葉を吐く、目の前の彼。

ラジウはもう一歩後ろに退いた。自分は本当にラジウなのだろうか？疑問が頭を過ぎっては、また浮かんでくる。

君は誰？僕はラジウ。ラジウ・マイナー。ねえ、君は誰？

ラジウの戸惑いの表情に、鏡の彼は核心したように言った。強い目の光がラジウを射抜く。

「ちがつ！僕がラジウ・マイナー。ホーデユ・マイナーの息子だ！
」

今にもラジウは不安に押しつぶされそうになっていた。不安を振り払いたいがために、必死に大声を張り上げる。

相手に痛いほど不安が拭えないでいることが伝わるくらい、ラジウは必死さが滲み出ていた。

父上のこと、何も知らなかったくせに？

最後の止めというばかりに、その言葉は深く深くラジウの胸に突き刺さった。無意識のうちにラジウの目から一筋の涙が零れ落ちた。ホーデユ・マイナーの息子だというのに、ラジウは彼のことを何一つ知らなかった。さらに、サート達から聞いた話で知らないことが明確になっていた。そこを指摘されることで、自分が”ラジウ”であることへの不安感、疑問、焦りが頭の中で渦巻き始める。

自分は”ラジウ”ではないのだろうか？一瞬だけ、ラジウの頭を過ぎった疑問。

それが敵の罠に陥ってしまったことに、ラジウは気付けなかった。すぐさまラジウの意識は真っ暗闇へと放り投げられたのである。

部屋に残っているのは、目を瞑り倒れている二つの体。キヴィもまた、敵の罠を回避することはできなかったのだ。

その場で、彼と彼女は死んだように動きはしない。

第二章　真実と真意（11）

一方、別の部屋にはクレクとシルキアが対峙していた。二人とも手には自分の得物を構えている。

彼等がいる部屋には壁際に様々な武器が並べられ、戦えといわんばかり広いスペースが整えられていた。キヴィとラジウがいた部屋の四倍の広さがあるだろう。

「なるほど、キヴィさんが」二人組みでないといけない」と言っていた理由がよくわかりました。」

「ふん、どちらかをあの鎖に繋げということだろうな。」

目を細めてシルキアを見据えるクレクに対して、シルキアは彼から視線を外しある一点を凝視した。目をやった場所には、一つの鎖と鉄の輪が壁に備え付けられていた。それは誰がどうみても、手錠の一種。

この部屋には、入ってきた入り口もなければ、出る出口すら存在しなかった。何か仕掛けがあるに違いない。そこへ壁に不自然に備え付けられた手錠と、大量な武器。明らかに出口と関係があるのだと、誰もが気付く。

「貴方も私も譲る気がない。と、すれば、力尽くでどちらが行くかを決める必要がありますね。」

クレクは、弓に矢をつがえながら静かに言った。言い終えると、シルキアへ矢を向け、狙いを定める。

ヒュン

音が風を切った。それからカンという壁に当たる音がクレクの耳に届く。

シルキアの頬から赤い血が滴り落ちた。思ったよりも早い引きに、避けるのが少し遅れたのだった。

「やはり貴方、お強いですね。」

クレクがシルキアの行動を見て眩きをもらす。彼の頬にもまた、一筋の血が流れていた。シルキアが、クレクの攻撃の際に持っていた探検を放ったのだ。

「……貴様もな。一つ、聞きたいことがある。」

勝負は五分五分と言っていいだろう。両者とも遠距離からの攻撃が得意であることから、勝負がつきにくいことを認知していた。だから、シルキアはクレクに話し合いを求めたのである。

「なんででしょう?。」

クレクは、再び弓に矢をつがえ、シルキアに目標を合わせながら答えた。動けば射る。と言っているのだ。しかし、それは仕方ないことだった。弓は矢をつがえないと、その間時間がかかり敵に攻撃のチャンスを与えてしまうからだ。

一方、シルキアの短剣は手に持ってさえいれば投げるだけで良いのだ。時間の差を考えれば、クレクの行動は当たり前のことだといえよう。

「なぜ、そこまでラジウに固執する？」

「そんなこと、貴方には関係ありませんし、説明したところで……貴方になど、決してわかりはしませんよ！」

矢が風を切り、走り抜ける。今度は警戒をしていたからだろう、クレクの矢をシルキアは軽々と避けてみせた。しかし、追い討ちをかけるようにクレクは更に素早く、彼に向かって矢を放つ。

「……それなら質問を変える。貴様は、ラジウに何を求めている？」
避けながらも、シルキアはクレクから目を離さずに淡々と問いかける。

「求める？何も求めてなんていません。私はただ、ラジウ様に従う下僕でしかありません。」

矢をシルキアに向け、今度はしっかりと答えるクレクの瞳は、いっ

「ふん。あいつはそう思っていないみたいだが？」

シルキアが言葉を紡ぎ、短剣を抜いて彼目掛けて放り投げる。反撃してくるとは予想していなかったのだろう、クレクは慌てて短剣から身を逸らした。

「ええ、ラジウ様はお優しいですから……ね！」

語尾を強調したのは、強く弓を引いた不可抗力である。矢と短剣が飛び交うが、いっこうにそれらは相手に当たらない。痺れを切らし

たのか、クレクは次から次へと矢を放つ。

「いや、貴様もそうは思っていない。」

「何を!？」

シルキアは次々と矢を避け、意を決したように方向を変え、いきなり彼に向かって走り出した。クレクが構える弓の前で立ち止まるシルキア。ちょうど弓の先端の前に、彼の胸が待ち構えていた。流石にクレクは驚きの声をあげ、まじまじとシルキアを見た。無表情なため、何を考えているのか読み取れはしない。

「ふん。下僕や従者なら主に従うはずだ。しかし、貴様はあいつの意思を汲み取ろうとさえしていない。だから、貴様は貴様自身が下僕や従者であると思っていないわけだ。」

感情を出すことなく、淡々と言い切るシルキアの台詞に、クレクの手から汗が滲み出た。一度、ぐつと手に力を込め、シルキアを睨みつけるクレク。しかし、それにさえシルキアは微動だにせずに弓を持つ彼を見ているだけ。

クレクは苦い顔をしてシルキアから視線を外すと、弓を静かにそのまま下へとおろしたのだった。クレクはうなだれる様に頭を垂れた。

「……そうかもしれません。私は主の命令や意思よりも、主の命の方が大事なんです。私は……一人の主を亡くしました。ラジウ様の父、ホーデユ様です。その時に、自分の居場所が無くなることを知りました。私は結局、私のことしか考えていないのですよ。貴方を見てると、悔しいですが自分が自分しか見えていないのを思い知らされます。」

クレクが顔をあげると、その表情は弱弱しく儚いものだった。苦笑ったようなひどく辛そうな印象をシルキアは受けた。

クレクは自分自身でわかっていた部分を指摘され、現実を突きつけられてしまったのだ。しかし、その分少しは冷静になれたのだろう、自嘲気味だが自分のことを客観的に見ようとしている。

「……俺のどこをどう見てそう思うのかはさっぱりわからんが、失くしたくない程大切な者なのだろう。あいつが。」

シルキアはふいつとクレクに背を向け歩き出した。クレクは彼の行動に首を傾げて様子を伺う。シルキアは、とある地点まで行くと、立ち止まって屈み込んだ。

ガチン

金属音が室内に鳴り響く。

クレクはシルキアの行動に、目を点にしていた。シルキアが自分の左手に、壁に繋がっている手錠をはめ込んでしまったのだ。

「なん……で？」

ようやく搾り出した掠れ声で、クレクは彼に問いかけた。人差し指が微かに揺れながらもシルキアの腕を差している。

「ふん。こんなところで時間を食ってる場合ではないだろう？」

「……貴方がそこまで心情身溢れる方だとは思いませんでした。」

シルキアの言葉に、クレクは口に手を当て大げさに驚いてみせる。大げさな動作に、シルキアはたらりと冷や汗を流した。

「違う。ラジウがサートを助けたがっているからだ。」

「やはり思いやりのある人なんです」

「違う。いい加減にしろ。貴様がラジウに応えたいと思っているだろうと思っただからだな……。」

きっぱりと言い放つシルキアに、クレクは驚いたまま更に一言。しかし、その台詞は途中でシルキアに一掃されてしまった。こめかみを押さえ、怒りと呆れを露わにするシルキア。それに、クレクは笑った。

「冗談ですよ。気遣いありがとうございます。まあ、まさかそこまでする頭があるとは思いませんでしたが。」

「貴様……。」

しかし、笑顔はすぐに消えうせ、クレクは考えるように顎に手を置いた。シルキアは彼の言葉にじと目を返す。

シルキアの視線に気付いて、慌ててクレクは手を軽く振った。

「はは、まあそう熱くならないでください。それより、貴方は先へ行きたいと思わないのですか？この先にはたぶん。サート君やラジウ様の他に、キヴィさんもいらっしゃるかもしれないですよ？」

あっさりとシルキアに引き下がられ、クレクはこのまま先へ進むのに気が止めたのだ。理由を聞こうと、彼と仲の良いキヴィの名を出

してみる。しかし、シルキアは眉一つ動かさない。

「何か勘違いをしているようだが、一言言っておく。あれはそう簡単にやられるたまではない。まあ、ラジウもサートもだが。」

シルキアの言葉には、ラジウの好きにやらせてみればいい。そんな意味合いが含まれているのだとクレクは感じていた。

「そういうところが嫌いなんですよ、シルキアさん。私が見えないラジウ様や他の方のことが見える貴方が、ね。」

クレクは踵を返し、シルキアが手錠をはめた際に静かに現れた壁の穴へと足を運ぶ。クレクの静かな口調に、シルキアは彼の背中に向かって、同じく静かに言った。

「ふん。当人達より周りのが見えるのは当たり前のことだ。俺には見えない部分は、貴様が見えているはずだ。あいつには、親身に心配する奴の手助けの方が必要だと思ったからこそ、貴様に譲るだけだ。俺なら、絶対途中で見捨てるからな。」

シルキアの言葉は、クレクの背中を後押しする。クレクは、笑った。シルキアの言葉が冗談に聞こえたのだ。彼なら、口でも態度でも無関心を装っているが、決して認めたものを見捨てることはしないだろう。と、思ったからだ。そう思ったのは、もしかしたらシルキアが自分に多少似ているからなのかもしれない。

「それと、シルキアでいい。」

最後に付け足すようにシルキアは台詞を吐いた。思わずクレクは振り返り彼をまじまじと見る。別段冗談を言っているようには見えな

かった。

シルキアがクレクを認めたことが、クレクにも伝わってきた。

クレクは、もう一度シルキアに背を向け、穴の近くまで行くと足を止めた。

「言ってくれますね、シルキア。いいですよ。私の全力でもって彼等全員守り抜けばいいのでしょうか？すぐ終わらせてきますので、待っていてください。」

「そりゃあ、見物だな。」

クレクが片手を挙げ、シルキアも答えるように片手を上げた。

二人が感じていたわだかまり、それは自分にならないものを持つ相手への嫉妬、不満、自己嫌悪だったに違いない。それを認め合った今、二人の関係は前よりは少し良くなったのかもしれない。

第二章　真実と真意（12）

さて、暗闇の中に引き込まれたラジウはというと、暗闇の中で薄ぼんやり考え事をしていた。

（いつたい、僕は誰なんだろう……？）

考えていても、答えは全く出てこなかった。暗闇の中、光がラジウの横を通り過ぎる。それが何だか、ラジウにはわからなかったし、わがらうともしていなかった。ただ、頭を垂れ、うなだれているだけ。

光は次々とラジウの正面から後ろへと流れていく。光の正体は映像だった。長い四角に切り抜かれたような映像が次から次へと流れていく。

「私はラジウについていきます。貴方がどう変わろうと、どんなことをしようと、味方が誰一人いなくなろうと、私は貴方について行きますとも。」

声がラジウの耳へと届いた。ラジウがよく知っている声は、そうクレクの声。一コマの映像が声と共にラジウの横を通り過ぎていった。ラジウが顔を上げて映像を目で追う。その場面を知っていた。自分が城を飛び出す前の、クレクとの会話のシーンだということにラジウは気付いたのだ。

今度は違う場面がラジウに迫ってくる。映像には、シルキアの横顔が映し出されていた。

「貴様は貴様であろう。」

これは父上の話をしていた時に、シルキアが言った台詞。ラジウはその言葉に立ち上がった。父上とは違うのだと、シルキアが思いを込めて言ってくれた言葉だと、ラジウは今更ながらに解った。

「僕は……僕？」

過ぎ去っていく場面を見送りながら、ラジウはポツリと呟いた。

「あまつたれるんじゃないよ！」

いきなり後ろから大きな罵声が飛んできた。ラジウは思わず身を震わせ、慌てて振り返る。大きな声を発している場面にいるのはキヴィ。仁王立ちで腕を組み、こちらを睨みつけるように見ている。

「あんたは善悪が解らないほど幼いのかい！？自分で何が正しくて何が間違ってるのか判断もできないのかい！？ええ！どうなんだい！？他人の言葉に惑わされるんじゃないよっ！」

そう、この台詞はシルキアに負けてへこんでいた時にキヴィがラジウに向かって放ったもの。ラジウは場面に気付いたと同時に、この後言った言葉達を思い出す。

『あんたの言葉で、僕を左右してよ。』

映像の中のラジウと、ラジウの声が被った。彼の目には、輝きが戻り強い意志を持つ表情が映し出されていた。

「そうだよ。僕は僕でしかないんだ。自分を見失って弱気になってる場合じゃない。だって、僕をラジウだと言ってくれる人がいるんだ。だから、僕は自信を持って言える。」

ラジウは拳をぎゅっと握り締め、顔を上へと上げた。

「僕は、ラジウ・マイナーだ!!」

叫ぶと同時に、眩い光がラジウを包み込む。

「っ!!」

光が収まると、ラジウの視界には床と壁が入り込んできた。円形状の造りが見てすぐにわかる構造。

ラジウは、目を瞬かせ腕に力を入れると、自分の体を起き上がらせた。ふらふらしながらも立ち上がる。

「……夢……?」

眩いてから、ふと視界に映り込むものに目を移動させる。すぐ隣に青緑の髪を持つキヴィが倒れ込んでいた。白衣を身に纏った彼女は、頑なに目を閉じており唇は青く変色していた。

「キヴィ!!」

ラジウは必死に彼女の名を大声で呼ぶ。けれど、彼女からは何の反応も返ってこない。

ラジウは、キヴィの手首に腕を伸ばした。

「冷たっ!」

ひんやりと冷たい彼女の手に、ラジウは一度手を引っ込めてしまう。だが、それでは彼女の生存確認ができはしない。再びラジウは彼女

の手首へと手を伸ばし、脈があるかどうかを確認した。
どくんどくと正常にキヴィの脈が鳴っていることに、ラジウはほ
っと胸を撫で下ろす。

「やっぱり、キヴィも僕と同じ状態なのかな……？」

眉を顰め、ただラジウを見守ることしかできない自分に、ラジウは
ふがいなさを感じていた。どうにかしたい。その気持ちが強くなる。

「……だめ……。ねえさんっ！」

ラジウはびっくりして身を引き、目を見開いたまま彼女を凝視する。
キヴィの瞳から一筋の涙が零れ落ちたからだ。

「……私の名前……名前は。キヴィ」

彼女が名前を言おうと口を開く。ラジウはキヴィに名前を言わせて
はいけないと、直感的に感じた。

自己紹介をするさいに、言葉を濁した彼女のことを思い出す。きつ
とファミリーネームは人に言いたくなかったはずだ。それに、ラジ
ウはその名前を聞いてはいけないような気がした。

「キヴィ！君はキヴィ・ライズンだろう！？豪快で大雑把で、そん
でもって短気なうえにすぐ調子にのるけど、芯があって、自分自身
に自信を持って男らしいキヴィ・ライズンだろ！！？他の誰が何
て言っても、僕は、君がキヴィ・ライズンだって思ってるから！だ
からっ……だから戻ってきてよっ！」

ラジウは、キヴィが口を開いて言っている言葉が自分に聞こえない
ように、大声でがなった。彼女の冷たい手をぎゅっと握り締め、目

をしつかりと瞑り、一気にまくしたてた。

戻ってきて欲しい。その思いがラジウの心に湧き上がっていた。誰一人失いたくはないと、ラジウの心が叫びを上げているのだ。

思いに答えるように、キヴィの手がぴくりと反応を示した。反応を感じ取り、ラジウは勢いよく目を開けた。

目の前には、瞳をうつすらと開け、微かに笑みを浮かべながら自分を見るキヴィがいた。

「キヴィー!!」

ラジウも目に涙を浮かべて、満面の笑みをつくり彼女の名を呼んだ。

「ラジウ……だあれが豪快で短気で男らしいって？え？」

が、そんな暖かい良い雰囲気の間はすぐさま終わりを告げる。キヴィが起き上がってこめかみをぴくぴくと動かし、引きつり笑いを浮かべながらラジウの頬を掴み両側に伸ばしたのだ。

「う、ごへんっ。」

頬を摘まれ、引っ張られているせいでラジウは上手くしゃべれないが、涙を流しながら必死に彼女に謝った。それに文句をぶつぶつ言いながらも、キヴィはばつと手を離れた。

「だ、だってえ。キヴィのこと思い浮かべたらそういう言葉しか出てこなかったんだよお。」

真っ赤に腫れた頬を押さえながら、ラジウは頬を膨らませて言う。腫れた頬を膨らませたことにより、かなり顔が膨れたように見えてしまう。思わずラジウの顔に笑いそうになるキヴィだが、なんとか

それを押さえ込んだ。

「そうかい。覚えとくからね。今日のこと。……にしても、心配かけたみたいだね。ラジウ。」

鋭い目つきになったかと思うと、キヴィはすぐに柔らかい笑みをラジウに向けた。それにほっとしたのか照れくさそうに少し赤みが差した頬を掻くラジウ。

キヴィの手がラジウの片方の手に重なった。その手は先程と打って変わって暖かい。

周りに誰もいないことから、キヴィはラジウが自分にしてくれたことに気付いた。

「ありがとよ、ラジウ。」

キヴィは立ち上がり、ラジウの頭を優しく撫で礼を述べた。暖かい手の温もりに、ラジウはキヴィを見上げて笑む。

「へへ、どういたしまして!」

キヴィの言葉にも暖かみを感じたラジウ。だから、自然にラジウの口はキヴィに対する返事が滑りでたのだ。ラジウの笑みにつられるかのように笑みを返してから、キヴィは辺りを見回した。すると、すぐに上に登る階段を見つけた。

「お、先へ進めるみたいだね。さ、行こうか。」

「……ね、ねえ、キヴィ。キヴィも自分が自分じゃないって思ったの?」

さっさと歩き出してしまふキヴィの後を、慌てて追いかけて、ラジウは戸惑ったようにキヴィの背中に問いを投げかける。今まで疑問に思っていたが、なかなか聞けないでいたのだ。

「ん？まあ、そんなとこだね。」

しかし、答えは曖昧なものだった。ぼかして、その後の言葉を紡ぐうとしないキヴィ。彼女は後味の悪そうな表情で、決してラジウを見ようとせずに視線を泳がしていた。これ以上触れて欲しくない。そう言っている事がありありと伺える。だから、ラジウはこれ以上突っ込んだ話をすることはできなかった。

「ほら、ラジウ。早く行かないと置いてくよ？」

「あ、ごめん！待って！」

さっさと階段を上り始めるキヴィに、ラジウも精一杯早く階段を駆け上った。小幅が違うせい、早足で行かなければ彼女に追いつかないのである。

第二章　真実と真意（13）

階段を上った先は、先程よりも少々狭い部屋が待ち構えていた。また、前の部屋同様何もない。

ラジウ達が部屋に入ると、上ってきた階段はすつと姿を消した。キヴィもラジウも、階段が消えるのを確認すると、新たな出口を探して視線を辺りに巡らせる。

『あつ！』

声が三つ重なった。目の先にいる相手に、互いが驚いているのだ。ラジウ達の視線の先には、長い銀髪をなびかせ立っている人物がいた。

「クレク！」

「ラジウ様に、キヴィさんではありませんか！」

ラジウに名を呼ばれ、クレクはラジウの元に駆け寄ってきた。真剣な顔つきで彼はまじまじとラジウを見る。しばらくしてから、ラジウの無事を確認できたのだろう、やっと安堵のため息を吐いた。

「ご無事で何よりです。」

「クレク、そんなことよりシルキアはどうしたんだい？」

ラジウのことしか目に入っていないクレクに、キヴィは眉を顰めながら先程から気になっていたことを聞いた。クレクとシルキアは一緒に居たはずである。しかし、いるはずの者がこの場にいないとい

うことは何かあった意外には考えられない。キヴィを一抹の不安が襲った。

「あ、シルキアさんなら下の階に無事でいらっやいますよ。」

いつもの笑顔でクレクはキヴィに答えた。しかし、彼女の顔はますます疑心暗鬼の表情が色濃く出てきてしまふ。どうしてそう言い切れるのかはどうしてもわからないでいるのだ。

キヴィが口を開く。

「つめたっ！！」

が、ラジウの甲高く悲鳴に近い声がキヴィの台詞を邪魔した。彼の言葉で、冷たいという感覚にクレクとキヴィも気がつく。足元が水に使っている。ものすごい速さで皆が見ている中、水はくるぶし辺りまでせり上がってくる。

「っ！水攻めかい！？」

「まずいですね、早いですよ。」

キヴィはこの状態に舌打ちをし辺りを見回した。彼女の横でクレクが冷静に分析をしているが、水は速さを増すばかりでくるぶしから膝下辺りまでやってくる。キヴィやクレクにとってはまだ何でもない高さだが、幼いラジウにしてみれば既に腹まで水に浸っているわけ、かなり危険な状態ということが見て取れる。このまま何もしないでいればすぐに頭まで水がやってくることは必須。

クレクはラジウの状態を知ると、すぐさま彼を持ち上げて自分の肩の上に座られるように担ぎ上げた。

キヴィは横で行われたことに目を白黒させる。自分を担ぎ上げた時

も思ったことだが、見た目的には優男で女に間違えられそうな感じのクレクに、そこまで力があるとはまったく見えないのだ。しかし、子供とはいえ人一人を軽々と素早く肩の上にのせてしまうのだ。それが、キヴィには信じられないのである。

「キヴィさん！私が上ってきた階段がまだあります！！」

腹まで浸かった時、クレクがある一点を指差して大声を出した。声にはっと自我を取り戻し、キヴィはクレクが指し示す先へと視線をやった。水の中に埋もれているにも関わらず、下の階から光が漏れている箇所が存在する。

キヴィは天井を仰ぎ見る。天井はかなり遠く、待てば待つほど脱出が困難になっていくことを示していた。迷っている暇はない。キヴィは胸まで迫ってくる水の中に、ざぶんと音を立てて身を沈めた。

「ラジウ様、目を閉じて息を止めてくださいね。」

クレクはキヴィを見送ると、ラジウを肩から降ろした。一番背の高い彼でさえ、すでに胸の辺りまで水に浸っている。

ラジウはクレクに言われたとおり目をぎゅっとつぶり、口を両手で塞いだ。それを確認すると、クレクは彼の頭と肩に手をかけて抱きかかえ、彼女の後を追うべく水の中へと姿を消した。

階段まで辿り着き、一歩足が外に出るとキヴィの体は思いつきり重さに引っ張られた。

ドンガラガッシャン！！

何か壊れるようなぶつかるような音が二度、辺りに響き渡る。キヴ

イに続き、クレクとラジウも重力に引つ張られ階段を転がり落ちたのだ。

「いたたたた。」

一番最初に起き上がったのはキヴィ。頭を擦りながら自分の体を一周見、濡れていることを確認した。彼女の後に続き、ラジウとクレクも身を起こす。

「キヴィ？」

びしょ濡れの服を絞っているキヴィの名を、誰かが不思議そうに呼んだ。声に振り向くと、シルキアが多少目を見開いてこちらを見ていた。彼は左手が手錠によって壁に括り付けられている。

「シルキア……あんた、何やってんだい？」

シルキアの異様な光景に、キヴィは服を絞る手を止め、眉を顰めて彼を凝視した。シルキアは、眉一つ変えずに彼女を見返し、少し考えるような間を置く。そして、多分自分が今おかれているだろう状況を口にした。

「ああ……人質？」

「あんた、お姫様ってガラじゃないだろ!？」

スペン。

何とも気の抜けた音が耳に残る。いつの間にかハリセンを取り出してシルキアの頭を引っぱらいたキヴィだが、ハリセンも水に濡れているため、小気味良い音はどこへやら。気の抜けるような間の抜けた音しかでていない。

その彼女の行動を目で追いながら、ラジウは服を絞り、同じように水を切っているクレクにぽつりと意見を述べてみる。

「キヴィの思考回路ってさ、変だよな。」

「そうですねえ、意外にメルヘン思考なのかもしれませんよ?」

スペン、スペン!

彼女のハリセンが二度炸裂した。ラジウと彼の言葉に笑いながら返答したクレクへ、すぐさまキヴィが突っ込みを入れたのだ。

「だーれーが、メルヘン思考だって!!!?」

少し顔が赤いのは怒っているせいなのか、恥ずかしがっているせいなのかはわからないが、キヴィは怒鳴り声をあげるのだった。

しかし、水に濡れて重いハリセンは意外に痛いものである。ラジウは頭を抱えて聞いていなかったりする。

「まあまあ。」

「それより、帰りが早かったな。」

怒るキヴィを、クレクはなだめるべく声をかけた。しかし、シルキ

アがなだめる彼へと割り込むように言葉を投げかける。

シルキアの言葉にクレクは思わず固まった。どうやら、行く前に啖呵を切ったことを言っているらしい。

「えー、どうしてシルキアさんが手錠してるのか聞きたいでしょう？キヴィさん。」

シルキアの台詞を完全にスルーし、にっこりと笑顔を浮かべながらキヴィに話しかけるクレク。だが、彼の額からは汗が滲み出ている。さらにシルキアに背を向けていることから、明らかにシルキアが出した話題には触れたくないらしい。

「おい。」

「実はですね、一人此処に括り付けないと次の階へ進めないようになっているのですよ。ですから、シルキアさんが自ら手錠をかけて私を先へと進めてくださいました。」

「そのわりにあっさりと帰ってきやがったがな。」

まったくの無視を決め込んで話を進めるクレクに、シルキアは淡々と言葉を挟むのであった。流石に何度も突っ込まれては、クレクもいい加減無視ができずに怒ったシ顔をルキアに向けた。が、クレクの視線が自分に向けられると、すぐさまシルキアはあさつての方向を向いてしまう。

キヴィはクレクの説明に目を見開いて驚いていたためか、彼等の行動やシルキアの言葉を一切聞いていなかった。シルキアが他人にゆずることや配慮が出来たことにとても驚いているのだ。キヴィがやっと正気を取り戻し、顔をあげてシルキアを見た。これから何かを言おうという決意が垣間見れる。

「あ……とれた。」

その前にシルキアから一言発せられた。キヴィ、クレクは目をひん剥いてしまう。はつきり言っただけ目が飛び出しそう。シルキアの言葉通り、手錠が彼の腕からぼろりと外れて落ちたのだ。誰も言葉の失い、しばらく場に沈黙が訪れる。

「……あ、新しく繋ぐ者を決め直せということでしょう。部屋に戻ってきてしまいましたから、きつとそういうことですよ。」

なんとか口を開いたのはクレクだった。いつまでも驚いたまま音を発しないキヴィの隣で、何とか平常心を取り戻し、クレクは頷きながら発言した。まるで自分に言い聞かせるような言葉に自己納得をしている。

「な、なんだ。そういうことかい。それなら……。」

キヴィはクレクの説明に納得し、ほっと肩を降ろす。そして意味ありげに目を細め、クレクと目を合わせた。クレクは答えるように彼女を見返すと、今度はシルキアへと視線を移した。

「やはり、それがいいだろう。」

シルキアもクレクに視線を送り、頷いてみせる。シルキアの目がキヴィに移動した。彼女も彼に瞳を合わせると頷き返す。

そして、全員の視線が一斉にラジウへと向けられた。今までぽかんと状況を見守っていたラジウは、驚きとともに開いていた口を慌てて塞ぐ。

三人の視線に嫌なものを感じ、ラジウは一步後ろに後ずさる。危険

信号を脳みそが発している。逃げなきゃいけない。と。

「おい、連れて来い。」

シルキアが発言したかと思うと、クレクがラジウに近寄り笑顔をにっこりとラジウに向けた。極上の笑みに、ラジウの額に冷や汗が浮かぶ。

案の定、ラジウの体は宙に浮かび上がった。クレクはラジウが暴れても逃げられないように後ろへ回り、脇の下に腕を通して持ち上げたのだ。

「ちよっ！クレク！！」

ラジウは、手足をばたつかせ小さな抵抗を試みる。しかし、抵抗空しく、ラジウはシルキアの所まで連れてこられた。

ガシャン！

手錠をかける音。ラジウには人一倍大きく聞こえたことだろう。手錠はラジウの腕の場所で黒く怪しく光り輝いていた。

クレクは手錠を確認するとラジウを降ろし、キヴィのところまで戻っていった。だから、ラジウが伸ばした手は空しく宙を切る。むすっとし頬を膨らませながら横へと視線を投げるが、既にシルキアも二人の場所まで移動している最中だった。

「なんで、僕なのさ！！？」

怒りに任せてラジウは三人に叫び訴える。身を乗り出したせいでジ

ヤラつと鎖が鳴った。ラジウの真剣な眼差しが三人を射る。三人は一旦目を見合わせてからラジウに向き直った。

「そりゃあ、戦力外だし？」

「カナツチですし。」

「馬鹿だから。」

キヴィ、クレク、シルキアが順々に口を開いて台詞をラジウに送った。言葉は槍となって、次々とラジウに音を立てて突き刺さる。ラジウはその場で動かなくなった。

ラジウが戦闘不能になると、三人は新たに現れた階段へと足を運ぶ。

「……。」

ラジウは何も言わないが、下唇を噛み、去り行く三人を見据えている。目は今にも泣き出しそうな程、目の中で水が揺れている。

ラジウの様子を見かねたキヴィが、階段から消える前に彼に一言こいつだ。

「ラジウ。感謝するんだね。」

ラジウはキヴィの言葉の意味がわからずに、目を見開いてきよろんとするだけ。そんな彼を残し、三人は次の階へと進むのだった。

次の階は、先程の水はどこへやら。ただの何もない部屋に戻っていた。しかし、三人が部屋に足を踏み入れると、すぐさま階段が掻き消え地面から水が滲み出した。

「クレク。あんたずいぶん頭が柔らかくなったもんだね？」

「何のことです？私は後で一生恨まれるのが嫌だっただけですよ。」

キヴィの意地悪な問いに、クレクは笑って流した。シルキアは二人を見ているが、言葉を発さない。どうやら、ラジウの前で三人がしたアイコンタクトは、何か裏があるようだ。

「あははは。まあ、あの子は気付いてないだろうけどね。シルキア、あんたはなんでラジウを残してきたんだい？」

「足手まといはいらん。」

きつぱりとシルキアは答えた。しかし、その答えも一つの理由である。カナヅチであるラジウが、水攻めに合う場所にいることは足手まといどころか自殺行為ものである。

「じゃ、クレクは？」

「おや？わかりませんか？キヴィさん。三人と一人。どちらが根性悪な最終ボスのところに招待してもらえenと思います？」

キヴィの問いに、試すようにクレクは尋ねた。彼の顔は相変わらず笑顔だが、余裕のあるものだった。

「そうだねえ。今まで二人で行動した結果。なんでか仲良くなって二人を見ると、明らかに見事何の関係も崩せずに失敗しているんだから。いつそ精神的ダメージを与えるなら与えやすい一人に絞るのがいいと思うけど？」

「そうですね。助けも来させずに一人をターゲットにし、なおかつ

他の人を苦しめて見せしめにするとか効果的でしょうね。」

カマの掛け合いとでも言うのか、わきあいあいに二人は相手を探っている。しかし、シルキアがため息をついた。

「ようは、また人質ということか。」

正直なところ、城に入ってからシルキアはまともな相手とまったく戦っていない。そのことが不満なのだろう、シルキアは不機嫌そうに腕組をしている。

「人質ね……もう少し優しく扱って欲しいもんだね。」

胸まで来ている水に、キヴィはパシャパシャと愉快的音を立て遊びながら呟いた。

「で？勝算があるからこそ貴様は行かせたのだろうか？」

「もちろんだよ。っていうか、多分ラジウしか奴は倒せないよ。私は、まあ、できるかもだけど、あんた達二人には絶対無理だね。ま、決めた以上うだうだ言ってもしょうがないのさ。後はラジウに任せしてみるしかないよ。」

遊ぶキヴィの手をとり、音を止めさせてからシルキアはキヴィに視線を流した。キヴィはシルキアにウィンクで返した。台詞の語尾には、それ以上話しても意味がないという釘が含まれていた。

「ふん。あいつが相手を倒すまでにどうにかすればいいんだろう？」

「……いつまでかかりますかね？」

シルキアは淡々と言い放つが、それにクレクが苦笑いをして言葉を挟んだ。クレクの発言は辺りを静かにさせるのに十分だった。キヴィもシルキアも黙り込む、水の揺れる音だけが耳をつく。しばらくして、キヴィが口を開いた。

「どうにかする。それを考えようか。」

水の中で浮ける様、足を動かしながら三人は思案し始めた。

第二章　真実と真意（14）

さて、置いていかれたラジウはと言うと、キヴィに言われた言葉を座り込んでのもんもんと考えていた。しかし、ガコンという音を耳が捉え、ラジウは現実に取り戻される。音の出所をきよきよと見回して探す、特別なものなどは見当たらない。

ラジウは首を捻り、もう一度端から端まで視線をゆくりと移動させていく。

「えっ!？」

しばらくラジウは気がつかなかったが、視線を移動させることであることにはつとした。地面がだんだんと遠のいていることに。

ラジウは、自分が上に昇って行っているということを理解したのだ。自分の足元を見ると、四角いラジウを乗せている一角だけが天井に近づいていることがわかる。

ラジウは上を見上げた。天井はなく、黒い空間が自分を待ち構えている。

キヴィが言った言葉の意味を、ラジウは少しだけわかったような気がした。これから自分が向かう場所、おそらくそこには何かが待ち構えている。何かはきつとサートを攫った奴に違いない。ラジウは何故か確信を持っていた。

暗闇の中に入ると、すぐに光が目の中に飛び込んで来た。風景は先程居た部屋より、二回りかそれ以上狭い場所だった。壁の周りには何も置いていないが、真ん中に一つ、そびえ立っているモノがあった。

「サート!！」

ラジウは叫んだ。視線の先には水の荊が体のところどころに深く刺さり、血を流して立っている黒髪の少年。瞳は閉じており、ラジウの声でまったく反応を示さないことから明らかに意識がない。

サートの体は非情にも、水の荊が彼の手や足に食い込み支えていた。

よく来た。

透き通るような、でも冷たいような無機質な声がラジウの耳に届く。後ろから声が聞こえたことに、ラジウは一瞬身を強張らせたが、無理矢理体を後ろに振り返らせた。が、目の前はただの壁が立ちふさがるだけ、何もない。

一安心できないまま、ラジウは背中に冷たいものを感じた。何かが自分の背後にいる。わかっているからこそ、ラジウは振り向きたくなかった。けれど、敵が背後にいるとわかってしまっている以上、いつまでも背中を向けてはいられない。確認しなければと自分を奮い立たせるラジウ。

強張った体を、恐怖に駆られた心を必死に奥底にしまい、サートを助けたいと思う気持ちを振起す。ゆつくりとラジウは首を動かした。背後にいるモノが動く気配はない。ちょうど肩まで首を動かすと、それはラジウの目に飛び込んで来た。すぐ近く、触れるか触れないかの場所にソレは居た。

「っ！！」

声にならない声をあげ、ラジウは体と手で振り払うように素早く体を回転させた。しかし、ソレに触れた感覚は冷たい水以外の何ものでもなかった。

振り返った勢いで、ラジウはバランスを崩し尻餅をついてしまう。顔を上げると、目の前にソレは立っていた。目がかち合う。

透き通っている水色にすらりと伸びた背、綺麗だと誰もが言うであ

ろう容姿、ソレは人の形をしていた。今度はしっかりと足もあり、服のようにひらひらとした体と同じようなものを身に纏っている。

「……。」

よく来た。

水色のソレはラジウをじっと見つめると、口を開いた。

「あ、あんたいつたい何なのさ!？」

私は精霊。人間よ。我が糧となるか？

淡々としたしゃべりに強い命令口調。

人は今、魔物の餌とされていることもよくある。しかし、精霊は一般的に人間であろうと魔物であろうと、自分の縄張りに入ってきたモノを糧にしている。だから、精霊は先程から餌を弄んでいるだけにすぎないのだ。こんな問いも遊びの一つに過ぎない。

だが、それをわかる程、ラジウは精霊のことに詳しいわけではない。

「な、何言ってるのさ!？僕はサートを連れ戻しに来たんだ!！」

だから、馬鹿にされたとも思っただろう、ラジウは座り込んだまま口だけで吠えた。

逃がさない。逃げられない。

精霊は手をゆつくりと横に突き出した。ラジウは目で精霊の動きを追う。すると、突き出した先の壁が上へと移動していく。

「なっ！！」

壁が動いた先はガラスで区切られ、向こう側の部屋がよく見えた。ガラスの向こう側は青に近い水の嵐になっている。キヴィ、クレク、シルキアがその中に浮かんでいた。天井から頭二つ分しか、もう空気がある部分が残されていない。荒々しく波を立て、水は彼等を襲う。

「クレク！キヴィ！！シルキア！！」

ラジウは手について勢いよく立ち上がり、壁まで駆け寄ろうとする。

ニユル

何かがぬめる様な音とともに、ラジウの体は動きを止めざるを得なかった。彼の首には水色の長いホースのようなモノが絡みつき、ギリギリと首を締め付ける。

絡みつく水を辿ると、精霊の腕が異様に長く伸びてラジウの首を締め付けていることがわかった。腕はかなりの力があり、ラジウの体を地面から浮き上がらせたのである。

ラジウは苦しさから必死に長い腕を掻き抜いた。けれど、感触は水を切っているという感覚だけ。

「ぐっ。」

ラジウの視界にキヴィが入ってくる。彼女は口を動かして何かを言っているようだ。しかし、ラジウにはそれが何なのかわからない。辛うじて三文字の言葉を言っているのは理解した。

けれど、ラジウの意識も朦朧となっていく。

「おにいちやーん。」

ラジウの意識が飛びそうになった時、聞いたことのある子供特有の高い声を耳が捉えた。それによってラジウは引き戻される。

「ノ……メル？」

声の主の名を息を切らしながら呟いた。サートの妹のノメルの声が小さいが窓の外から聞こえてくるのだ。彼女は寝ているはずなのに、なぜ声がするのか。

「おーい。ラジウさま？」

だんだんと声は近づいてきている。ラジウは悟った。ノメルは起き出して自分達を探しているのだと。そして、だんだんとこの塔がある湖に近づいてきていることを。

精霊がにやりと笑みを浮かべ、窓の外を見やる。ラジウは必死に精霊の腕に指を食い込ませようとするが、あっさりと水の中に飲まれ、手を握る形にしかない。

精霊が、窓からもう片方の腕を伸ばした。

「や、やめろーっ！」

ラジウには叫ぶ意外に何もできなかった。手を伸ばし、必死に訴えるが精霊は一切ラジウを見ることはなかった。新たな得物の方に興味を持っているようだ。

「きゃっ！」

悲鳴とともに、ノメルがラジウの視界へと入ってきた。精霊が伸びる手を使ってノメルを捕まえ、最上階まで引きずり上げてきたのだ。腕をつかまれ、宙に浮いている茶髪の少女ノメル。その瞳には涙が薄っすらと浮かんでいる。

「な、なにに？」

状況がわかっていないノメルに、精霊は笑みを溢し、彼女の首を絞め始めた。

ラジウとサートを見つけ、一瞬顔を輝かしたノメルだが、首を絞められることで恐顔が怖に歪む。ラジウは、そんなノメルに手を伸ばすが、あまりに遠くどうにもならない。

首を絞められ、更には口を精霊の腕から這い上がる水が埋めつくす。ノメルの瞳から大粒の涙が零れ落ちた。

我が糧なり。美味ぞ。

精霊が笑んで、頭に響く声を発した。ノメルの涙が頬を伝い、精霊の体に吸収されていくのだ。ボロボロと流れ出る恐怖におののいて流れるノメルの涙は、精霊にとって最高の食事。

涙を糧にしている？水が本体だから触れる液体は全て吸収してしまうのだ。ラジウは目を見開くと、キヴィがいる方向へと視線を移動させた。

第二章　真実と真意（15）

すでに全てが水に埋まった中で、キヴィは必死にガラスの壁を叩いていた。ラジウと目が合うと、人差し指を目に当てて、頬を沿い顎まで移動させてみせる。先程言っていたことが涙という言葉だと気がついたラジウは、精霊に向き直る。

ノメルが気絶しない程度に喉を絞め、大粒の涙を食らっている精霊。ラジウは目を閉じた。自分の心を奮い立たせなければいけなかった。たぶん、精霊を倒すためには恐怖などの心を抱いてはいけなかったから。

「いいんだ。僕にはやらなきゃいけないことがある。こんなところで足止め食らっていいわけがない。僕はラジウ・マイナー。皆を助けたい。助けなきゃ、僕は僕でいることが恥ずかしくて、きっと生きてなんか行けない。」

ノメルに氣をとられてか、ラジウの首を絞めている力は先程よりも弱いものとなっていた。ラジウは、自分に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

心の中で何かが燃え盛っていた。ラジウは顔を上げる。彼の目にも涙が滲み出していた。

「僕は、死んだって諦めるもんかっ！」

そう叫ぶと、声を出した振動によってラジウの涙が落ちた。涙はラジウの首を絞めている精霊の背へと落ちる。吸収されるかと思ったが、精霊と涙が触れた瞬間、精霊の片方の腕が消えていた。

ドテっという音と共にラジウは床に落ちた。しかし、目の前の光景に目を白黒させるだけだった。精霊がノメルを離し、キツとラジウ

を睨みつける。

ノメルは既に気絶しているようでぴくりとも動かない。ラジウは、腕に力を込め精霊から視線を外さないようにゆっくりと起き上がった。

貴様、我に何をした？

怒気をはらんだ口調で精霊はラジウに尋ねる。ラジウは首を横にぶるぶると振る。正直なところ、ラジウにも何が何だかわからなかったのだ。

キヴィに促され涙を流そうとし、ノメルが恐怖で泣くを見て恐怖はいけないと思ったただけなのだ。それがどうして精霊の片腕をあつさりと消してしまったのか、ラジウにもさっぱりわからなかった。

答えぬつもりか……ならば、他の者に答えさせるまでだ。

怒りを露わにしているものの、精霊は冷静なままキヴィ達がいるガラスをある方の手で勝ち割った。

ガシャンという音と、水がどつと流れ込んでくる。キヴィ、クレク、シルキアもその水にのってラジウがいる部屋まで流されてきた。

「げほっげほっ。」

荒く咳をする三人。飲んでしまった水を吐き出すように前のめりになっている。水はラジウがいる部屋まで来ると精霊に吸収され量を減らしていく。しかし、足の踝までで水の量の変位は止まった。

精霊は、三人を一人一人みやる。キヴィのところまでくると、視線を止めた。消えたはずの腕が生え、キヴィを捉え自分の場所まで引っ張っていく。

「キヴィ！」

「ぐっ！な、なんだいいったい！？」

自分の近くまで連れてきたキヴィを、精霊はじつくりと品定めをするように目を細めながら見る。

貴様、こいつが我に何をしたか知っているのだろう？何か合図を送ったな？

精霊の言葉に、キヴィは鼻で笑った。そして、状況を理解したからだろう、余裕の表情で精霊を見る。

「ふふ。あんた、実際はよくわかってるんだろ？ラジウ、泣きな！めいっばい泣きな！」

黙れ！

キヴィはラジウに向かって叫ぶ。精霊が吼えながらキヴィの首を絞め始めた。ノメルやラジウ達を締めていた時の比ではない。かなり強い力だろう、キヴィがすぐに気を失ってしまうほどだ。明らかに精霊は動揺している。

「……わかった。泣いてみる。泣いてみるよキヴィ！」

ラジウはそう言うと言を閉じた。

決して負けてはいけない。僕は、僕は負けない。負けるなんて悔しい思い、もう二度としたくなんかない。誰かを失うなんてこと、したくない！ラジウは自分の決意に目を開けた。

なぜか決意を固めると、涙が出てきた。これまでの様々な出来事が

頭の中で周り、失いたくはない気持ちが頭をもたげるのだ。ラジウは、父のことを思い出していた。だから、涙が止まらなくなっていたのだろう。

しかし、それは以前の悲しみにくれる涙でないことを、ラジウは知っていた。

「父上、僕は強く生きてみせる！」

ラジウの目から数滴の涙が零れ落ちた。涙は床にある水に溶け込む。それを見た精霊は、量の手をラジウに向かって伸ばした。ラジウはそれを真っ向から見つめた。

「お前なんかに負けない、負けやしない！キヴィの分も、ノメルの分も、サートの分も、みんなの痛みの分だけ僕が涙を流してやる！お前なんか、消してやる！！」

シルキアとクレクがそれぞれ武器を放つ。その武器は精霊の手を邪魔し、ラジウのところまで来ることを遅らせた。

守りたい。その気持ちからまたラジウの瞳より涙が数滴零れ落ちるか、思うとその零れ落ちた部分が、いきなり閃光を放った。あまりの眩しさに全員が目をつぶる。

き、貴様。必ず殺して……や……

精霊の怒りが混じった声が、だんだんと薄れ消えていく。ラジウは、両の腕で目を庇い、そのまま固まっていた。しばらくすると、光が止み目を開く。

「……あれ？」

暗闇の中何も見えなかったため、ラジウは首を左右に動かして辺りを見回した。だんだんと目が慣れてきて、暗闇の中でシルエツがだんだんと浮かんでくる。

「何？湖？」

そこは、明らかに城に近い湖のほとりだった。そこに、自分以外に五つの影が転がっていた。ラジウは、立ち上がると一つの影に近寄る。それはキヴィだった。

ラジウはキヴィを揺さぶってみる。すると、彼女は目をぴくりと動かしゆつくりと瞳を開いた。

「キヴィ！」

「……ああ、ラジウ。あんた、ちゃんとやっただね。」

身を起こし、頭を振ってからキヴィはラジウに笑いかけた。ラジウは兆手をぎゅっと握ってガッツポーズをしてそれに応えた。

「おい、いったい何がどうなってる？」

いつの間にか起きたのだろう、ラジウの後ろにシルキアとクレクが立っていた。シルキアがキヴィに視線を投げる。今の状況を説明すると目が言っている。

「ああ、実はね。精霊ってーのは体への攻撃がまったく効かないんだ。それで、精神攻撃をするしかないんだけど、水の精霊っていうのは厄介でね冷静沈着な奴等が多いんだ。だけど、欠点もある。それは、液体であれば何でも吸い尽くす体質なんだ。だから、体内に気持ちの籠った水を直接流し込めばいい。聖水とかめっちゃ効果て

きめんなんだけど、持ってなかったし。だから、ラジウの涙腺の弱さにかけてみたんだよ。」

キヴィはさらさらと説明を繰り返すが、説明のせいでだんだんしよげくれているラジウには気付いていない。

「なるほど。それなら確かにラジウ様が一番適切ですね。泣き虫ですし。」

留めにとこりと言いつた放たれるクレクの言葉。流石にラジウもその場に蹲って膝を抱えてしまった。シルキアがぽつとラジウの頭に手を置く。

「シルキア……。」

ラジウが涙目でシルキアを見上げる。シルキアはそれに無表情のまま口を開いた。

「長所は生かしたほうがいい。」

「……うわーん！シルキアの馬鹿！！」

最後の最後で結局フォローにもならない台詞を吐かれ、ラジウは泣きながら逃走してしまった。それを追おうともせず見送る三人。

「で？実際のところは怎么样了たのですか？」

クレクが先程の返答では信じられないのか理解が不十分なのか、キヴィへと問いかけた。

「うーん。強い心で消えろ！と思ったりしたんじゃないのかねえ？
精霊は液体と一緒に思いも吸収してしまうんだ。だから、ラジウの
思いが知らずに吸収され精霊への命令になったはずなんだよ。ただ、
恐怖を克服しなきゃ、そんな効果は得ないんだ。私達なんかよりず
っと負けず嫌いのラジウだからね、恐怖なんかより負けたくない
て気持ちのが勝ると思っただよ。」

「なるほど。泣く面でも思う面でもラジウ様が適任だったわけですね。」

キヴィの説明に、クレクは納得し、頷いて見せた。

「ああ、私達大人には無理なことを、あいつはやってくれたのさ。」

「ガキだからな。」

キヴィはラジウの走っていた方向を仰いで呟いた。彼女の言葉にシルキアは相槌を打ち、彼もまたラジウが去っていった方向へと視線を投げる。

「さ、サート君とノメルさんを連れて、私達も帰りましょうか。」

クレクは笑顔のまま未だに倒れ意識の回復しないサートを担ぎ上げた。シルキアはノメルの方の手をとる。こうして、三人は二人を連れて静かになった湖を後にした。

第二章　真実と真意（16）

太陽が昇り、辺りを照らし出す時間。

「ラジウ様ー！」

元気に回復したサートがいつまでも寝ているラジウの寝室へとやってきた。昨夜、サートの意識が戻らないので、ラジウはずっと起きて彼を見ていたせいか大声で呼んでも返事がない。と、言っても見ている間に寝てしまい、クレクに自分の部屋まで運ばれてきていたのだから。

「朝ですよー？起きてくださいよ。」

サートはお構いなしにラジウを揺さぶる。ラジウは身を起こすが目がまだ開かない。

「うーん……眠いよ。……ん？」

寝ぼけ眼を手で擦り、やっと目を開けるラジウ。目を開けたそこには、にっこりと笑顔を浮かべながら笑っている黒髪を一つに結んだ少年がいることを確認して、ラジウは目をひん剥いた。

「サート！元気になったんだ！？」

「はい、おかげさまで！」

身を乗り出して自分をまじまじと見るラジウに、サートは笑顔で元気良く答えた。サートはところどころに、薬を塗ってその上から布

を被せたような部分が見受けられた。多分、かなりの傷の数があるのだろう、いつもと違って長めのシャツを着ており素肌が見えないようになっている。

「良かったあ。」

ラジウもにっこりと笑って胸に手を当てた。

「はい。じゃ、ラジウ様。ご飯食べに行きましょう!」

「うん!」

二人は一緒に食堂まで駆けていく。どちらが早い競争でもするかのように全力疾走をしている。食堂につくと、キヴィとシルキアが椅子に座り、クレクが食事の準備をしていた。

「ごっちはーん!」

ラジウが元気良く声をあげ、自分の席へとつく。サートも遅れてやってくると同じように椅子へと腰をかけた。

クレクが二人の前にパンといり卵、ハムがのった皿を差し出した。

「元気だねえ。昨日あんなことがあったってえのに。」

キヴィが食後のコーヒーを飲みながら、ラジウを見て言う。しかし、聞こえてないのかラジウはご飯を夢中で食べている。キヴィはため息をついてコーヒーをもう一口含んだ。

「キヴィさん。あの湖、まだ危険ですかね?」

自分尾食事を持って席についたクレクは、少しむくれているキヴィへと話しかけた。昨日は結局サートとノメルを看病する方に忙しく、詳しい話を聞けなかったからだ。

「いんや。ラジウの涙で消滅したし、いるのはせいぜい大きな魚くらいじゃないかねえ。」

「そうですか。それなら遊ぶときはやはり大人がついてた方がいいでしょうね。」

キヴィの答えに、クレクは思案しながらラジウを見る。それにラジウは食事の手を休め、むっとしたように頬を膨らませた。

「まあた、そうやって子供扱いする!」

「いいじゃないですか、子供なんですから。」

食って掛かるが、あっさりとクレクに流され、思わずこけそうになるラジウ。だけど、ここで引き下がることはできなかった。

「やだよ、クレクの心配性!」

「親は心配するものですよ。」

しかし、またもやあっさりさっぱりと受け流すクレク。怒る様子も見せず、ラジウはなんだか拍子抜けしてしまう。

「じゃ、じゃあいよいよ。僕、またシルキアと遊びに行っちゃうんだからね!」

ラジウはこれでどうだ！と自信満々にクレクを煽った。クレクは顔をあげ、笑みを浮かべた。

「夕飯までには帰って来てくださいね。」

ドンガラガッシャン

凄い音を立ててラジウは椅子からひっくり返った。あまりにあっけない返答に驚いたのだ。しかし、クレクは気にした風もなく、食事を続けている。

なんとかラジウは机に掴まって起き上がる。

「……な、なんなんだよ。クレク……もしかして、大っ嫌いって言った事根に持つてる？」

机から目だけを出してラジウは様子を伺っている。今度はクレクが食事をする手を休め顎に手を考えた。そういえばという表情をしていることから、既に忘れていたようだ。

「ご、ごめんね？僕、本気で言ったわけじゃないだよ？ね？」

しかし、表情を読み取れないでいるラジウは恐る恐るクレクに視線を投げる。いつまでも怯えているラジウに、クレクは優しく笑い『大丈夫ですよ。』と一言言って食事を再開し始めた。

「な、なんかクレクが優しいよ？どうしてかな？」

隣に座るキヴィに、ラジウは耳打ちをするように小さく聞いた。し

かし、キヴィも肩を竦めて首を傾げてみせる。

「それはですね、無愛想で何考えてるかわかりませんが、たまに良いこと言うシルキアさんのおかげですよ。」

しかし、明らかに回りに聞こえていたラジウの言葉に、クレクは笑って説明した。

「貴様、俺に喧嘩を売っているのか？」

「そう聞こえます？褒めてるつもりなんですけど。」

すでに食事を終えたのであろう、傍観していたシルキアが眉を顰めてクレクに視線を投げた。しかし、クレクは冗談めかして笑うだけ。

「ふん。後、さん付けはやめろと言ったはずだが？」

「いやですねえ。シルキアさんが嫌がりそうですからやめませんよ。」

シルキアの新たな追撃にさえ、笑顔で逆に返すクレク。ラジウが目を白黒させてしまいうらい、クレクは前とはちがくなっていた。

「な、なんかクレク、レベルアップしてるけど。なんで？ねえ、シルキア？」

「俺は知らん。どうでもいいがああ嫌がらせを止めさせろ。」

ラジウがシルキアに話しかけるが、不機嫌そうにシルキアはラジウに目をやる。明らかに多少怒っているのが伺える。

「えー？やだよ。なんか、何か言ったら倍になって帰ってきそうだもん。今日のクレク。」

「ラジウ様、遊びに行きましょう！」

シルキアの言葉に首を激しく横に振るラジウ。

シルキアが何か言う前に、サートは笑顔で彼に話しかけた。ラジウはうんと大きく頷いて、残りの飯をかつ込んだ。かと思うと、すぐさま立ち上がってサートとともに食堂を後にするのだった。

「クレク。あんた、なんだか本当に柔らかくなったねえ。」

キヴィが飲み終わったカップを置くと、クレクに言った。クレクはそれに笑いながら答える。

「信頼できる仲間ができた。というだけですよ。キヴィさんもシルキアさんも、ラジウ様のことよろしくお願いしますね。もちろん、他の子供達もですが。」

「……ふん。俺も行つて来る。」

クレクの言葉に、シルキアは鼻を鳴らすと立ち上がった。

「はい、夕飯までには連れて帰って来てくださいね。シルキアさん。」

「ああ。」

シルキアは片手を上げると食事の片づけをしているクレクに振って

見せてから食堂を後にした。

キヴィは、クレクからもう一杯コーヒーを貰うと、ゆっくりと本を読み始めた。彼女は感じていた。安心できる場所へとこの場所が変化していつていることを。

真実を知り、真意を知った相手へ許される暖かい信頼という場所へと変貌していくこの場所で、ラジウはまだ知らないことを知っている。

今までも、これからも。

第二章　真実と真意　完

第三章 失うもの（1）

第三章 失うもの

鳥が鳴き、朝を告げる。まだキリが濃く太陽が霞む朝早い時間に、ラジウは珍しく起きていた。起きて、彼は城の入り口より奥に行った場所にひっそりと佇む一つの墓の前にいた。

今朝とつてきた花を沿え、ラジウは墓をじっと見つめた。墓に彫られている名前はホーデュー・マイナー。ラジウの父である。

「父上……いつか必ず、体も顔もここに埋めてあげるからね。」

呟いて目を閉じ、ラジウは一筋の涙を流した。そんなラジウの後ろに一つ、黒い影が立っていた。影に気付かずに、ラジウは目を開けると涙を拭い立ち上がる。

立ち去ろうと振り返り、初めてラジウは背後に人が立っていたことに気付いた。思わず身構えるラジウ。

後ろに立っていたのは、背が高く体を一枚の黒い布で隠し、顔さえもその布をフード状に被り隠している。見える部分はフード部分から覗く黒くて長い髪。それと、額から突き出している鋭くとがった一本の角だった。それ以外はまったくどんな風貌なのかラジウにはわからなかった。

「そう、怯えないでいただきたい。」

低い声でその黒装束の者は言った。どうやら男の人のようだ。ラジウは構えたままじっと彼を見る。

「ラジウ・マイナー様とお見受けしますが……。」

「そう、だよ。」

静かに低い声が呟く。ラジウは額から冷や汗を流し答えた。この人から決して視線を外してはいけない。そうラジウは感じていた。

「やはりそうでしたか。では、貴方の父の元へいらっしやいませんか？ラジウ様。」

男の甘い誘いの言葉はラジウの心に揺さぶりをかける。しかし、ラジウは行きたいという思いを堪えた。なぜなら、男の額から見える角が彼をあるものだとして証明しているからである。そう、彼は人間ではない。魔物の部類なのだ。

人間を食らう魔物もいることは、湖の件で痛いほど知っていた。だから、安易についていくのは危険だと判断したのだ。

「……何を言ってるのさ？魔物についていくほど、僕は落ちぶれちゃあいないよ。」

挑発的な態度でラジウは魔物を睨み付けた。しかし、魔物の表情がわからないためどう思っているのかが判断できない。

「そうですか。残念ですね。」

魔物は挑発にのることなく、淡々と言い放ちラジウに背を向けた。もう一度誘うことはせずに、魔物はそのまま歩き去ってしまった。ラジウはぼかんと口を開けてそれを見送り、立ち尽くしているだけだった。

「確かにそうだけどね、あんだ。ああいうのが稀だってわかってないだろ？」

頬杖についてじと目でキヴィはラジウを見る。しかし、ラジウは笑っており、まったく反省していないことが伺える。

「大丈夫だよ。クレクだって良い奴だし。」

「ラジウ様、あんまりよく動くお口でしたら、ゲンコツを入れて差し上げましょうか？」

ラジウの言葉に、クレクは右手を握ってみせ笑顔で強く言い放った。こめかみ辺りがぴくぴくと動いていることから怒っているのは明らかである。

「そ、それよりさあ、角を持つあの魔物っていったい何なの？」

怒っているクレクにこれ以上何か言っては何が起こるかもわからないと思つたラジウは、すぐさま話の方向を変えていく。

「うーん。聞いた限りじゃあ人型だと思うんだよね。黒い髪つていうのは魔力を持つてると言われててね、狙われやすいうえに魔物にされやすいんだよ。もしかしたら元は人間かもしれない。悠長にしゃべってたんだろ？そいつ。」

「うん。すごい礼儀正しかったよ。」

ご飯を食べながら、ラジウはこくこくと頷いた。クレクが眉を顰め口を開く。

「人間を魔物にすることが、可能なのですか？」

「ああ。一説によると、人間を魔物に変えることができる魔物が存在するらしいんだよ。人型はあまり力はないが人に警戒されにくいという利点がある。だけど、人型の魔物なんてエルフや小人、人獣と呼ばれる奴等ぐらいだろうね。」

キヴィは、説明をさらりとしてみせる。知識だけはこの場の誰よりも持っているキヴィのことだから、あながち間違っではないだろう。

「にしても、妙だね。なんでこんな人が少ないへんぴなところへ魔物が来たんだろうねえ。サートでも狙って来たのかね。」

「なんでサート？」

「あんだ、今の私の話を聞いてたのかい？黒髪だろ、サートは。いわゆる魔物に好かれる体質ってわけだよ。まあ、魔力を持っても使えないのが人間なんだけどね。」

ラジウの気の抜けた問いに、頬をびくびくと動かしながら、ため息混じりにキヴィは答えた。それから、何を思ったのか白衣の大きなポケットから分厚い本を取り出してパラパラと見始める。

「ラジウ。どうやらあなたは今の情勢や、魔物のことについて知らなすぎるね。今日は、あたしと一緒に勉強だよ。たくさん、いろいろ教えてあげるからちゃんと言えよ。」

「え？やだ。」

パラパラと本をめくっていたキヴィだが、ラジウの即答にその本を閉じた。本を右手に持ち替えて、高く上げたかと思うとそのまま振り下ろす。

ガツンというなんとも鈍い音が出た。本の角は、見事ラジウの頭にクリーンヒットしている。

「仕方ない奴だね。せめて、その魔物がなんで来たのかを掻い摘んで話してあげるからよくお聞き。魔物ってえのは今、ほぼ全域を支配しているのは知ってるだろう？ だけど、人間つてのもあらゆる所に散らばって生きているんだ。だから、大きな街は魔物に攻め落とされたとしても、小さな村の集落などは生き残っているんだ。というか、魔物がそんな小さな集団は相手にしていないと言った方が正しいんだがね。で、私達がいるこの城も大した人数の人間がないから、魔物は見向きもしないはずなんだ。それがなぜ、ラジウの前に現れたのか。答えは簡単。」

ここでキヴィは得意げな笑みでラジウに視線を寄越した。しかし、本で殴られたラジウは目を回して気絶一步手前。まったくキヴィの話聞いていなかった。

「らーじーうー。」

ラジウの襟首を掴み、揺さぶり起こすと、キヴィはやっと続きを紡いだ。

「なんで魔物があんたの前に現れたのか。宣戦布告だよ。」

「せ、せんせいふこく?。」

目を回しながらも、なんとかキヴィの言葉を理解しようとラジウは奮闘していた。しかし、頭もグルグルと回っているせいか、か細く上擦った声になってしまっている。

「そうさ。ホーマイ国への宣戦布告。それが目的だと思うね。私は。」

本をしまい込み、キヴィは言い切った。ラジウは頭を振り、なんとか自分の意識を取り戻した。

「え？でもそれならなんで僕のところに？」

「だから、ホーデユ・マイナーの息子だからだよ。あんたの力加減を見ておきたかったんじゃないのかねえ。」

ラジウの問いに頬杖をつき、もう説明するのもめんどくさそうにキヴィは答える。ラジウもさほど興味がないのか、ふーんと相槌を打っただけ。そこに、片づけを終えたクレクが割り込んできた。

「しかし、ホーマイ国では、ラジウ様の偽者がおられるのではありませんか？普通でしたら、そちらの方へ魔物も行くのではないでしようか。」

「両方行っただと思うよ。どちらかに山勘なんて真似しやしないよ。で、ラジウ。あんたどうするんだい？ここまで攻め込んでくるかもしれないよ？」

クレクの心配げな態度にキヴィは手を顔の前で振って軽く返答し、ラジウに向かい直るとにやりと笑みをこぼした。

「うーん。まあ、大丈夫だよ！キヴィもシルキアもいるし、クレクだつてそこそこ戦えるよ？」

神妙な顔つきに戻ったキヴィに、ラジウは頬にお弁当をつけたままにつこりと笑い、あっけらかんと言いつつ放った。

緊張の欠片も感じられないラジウの台詞に、キヴィは開いていた目を半分まで閉じ肩を落とす。

「あのねえ、ラジウ。あんたが今まで見てきたのはあくまで人との戦いでしかないんだ。魔物との戦いつつたら、シルキアもクレクも一瞬にして消されちゃうレベルなんだよ。わかるかい？」

「えー？でもさ、クレクは魔鳥と戦ったよ？」

自分の名前が出るたびに、乾いた笑みを浮かべるクレクだが、今の二人の会話には入ってこようとはしない。どうやらなんとも言えない状態らしい。しかし、彼が割って入ってこないとなると子供の喧嘩のごとくキヴィがラジウに向かってケンカ口調になっている。ラジウも子供であるからなおさら喧嘩腰で返してしまうという悪循環へ陥ってしまうのだ。

「……人に近い魔物はいわゆるざ・こ。なんだよ。レベルで言ったら2か3くらいの魔物。ちなみに人間はレベル1で魔物の王と呼ばれる奴は確実にレベル99だよ。わかったら街には近づかないことだね。」

キヴィはもうこれ以上話す事はないとでも言うように、ラジウが口を開く前に立ち上がった。それから大きくを伸びをし、クレクへと向き直った。

「クレク。後で私のとこに来てくれ。」

「わかりました。仕事を一通り終えたらお伺いします。」

端的なやり取りを交わした後、片づけをしているクレクにキヴィは笑ってみせ食堂を後にしたのである。

「ねえ？なんで街に行っちゃいけないの？」

キヴィを見送り、しばらく口に入ったものを租借してから、ラジウは一緒に食堂に残っているクレクへと疑問をぶつけた。

クレクは洗い物をする手を休めずに、ラジウに背中越しから返答を返す。

「いろいろあるですよ。どうせ行く気などないのでしょう？」

「うん。まあ、ない。」

クレクの返答はひどく曖昧でほぼ核心に触れることはなかった。だがラジウは彼の台詞に突っ込むこともせず、そういえばそうだと思いついてしまう。よほど街への興味が無いのだろう、遊ぶ場所なら街よりもこの方がたくさんあるせいかもしれない。

「じゃ、僕も遊びに行ってくるね！サート呼んでシルキアのところに連れてくるよ。」

飛び出そうとするラジウに、クレクが何か言いたそうに顔を向けたので、ラジウは誰とどこへ行くのかをきっちりと報告した。それさえ言っておけばクレクが小言を言わないことを覚えたのだ。

クレクは行き場所を聞くと、笑顔で「行ってらっしゃい。」と一言。

ラジウもクレクに笑顔を返し、食堂を元気よく飛び出していった。

第三章　失うもの（2）

湖の辺には日が差し込み、キラキラと水面を輝かせていた。ちょうど、太陽が真上に来ているお昼時。数本生えている木の陰にある岩場に一人、腰を降ろしている人物が居た。

「シルキアー！」

遠くから甲高い声が人物の名を呼ぶが、彼はまったく動く気配を見せない。ラジウはだんだんと近づいている動かない影を見て、眉を顰めた。

「シルキア！？」

もう一度、今度はさっきよりも大きな声で呼んでみる。しかし、やはり彼の反応は一寸もない。仕方なくサートと一緒に近づいて行くラジウ。

シルキアを見て、サートは眉を顰める。とあることに気が付いたのだ。

「あれ？シルキアさんの釣竿ひいてませんか？」

ラジウは首を傾げてサートが指差すシルキアの手を見た。シルキアの手握られている木の釣竿が、微かにびくびくと動いている。

「ちょ、この湖って……。」

ラジウが言いかけた時、いままで小刻みで小さい揺れをしていた釣竿が、一気に湖の方へと引っ張られた。シルキアの手は竿から離れ

ない。そのかわり、あっさりとシルキアの体が湖に引きずり込まれていった。

ポチャンという音が辺りに響く。

「……………」

「……………」

ラジウとサートは口を開いたまま、その場で固まってしまった。ラジウにいたっては、遠くに居るシルキアに、思わず手を伸ばしたままの状態で時が止まっている。辺りがしんと静まり返る。

「……………あつ！シルキアさん！！」

サートが我に返り、湖へと駆け寄る。ラジウもサートの声ではっと意識を取り戻したが、カナヅチであるうえにこの湖には嫌な思い出が多々あった。だから、行きたくても湖の近くに行くことができないのである。

湖が大きな波紋を辺りに散らかし、やがて消えていくのをラジウとサートは見つめていた。

流石にやばい状況だと感じたのだろう、ラジウが慌てふためいて、画面蒼白になりながら叫ぶ。

「ど、どうしよう！シルキアが死んじゃった！！」

「勝手に殺すな。」

しかし、突っ込みとともにシルキアがずぶ濡れの顔を水面から出してきた。いきなり飛び出して来たので、ラジウは驚いて尻餅をつい

てしまう。

シルキアは気にすることなく、顔から水を払うようにひとしきり頭を振った。そして、近くの岩から陸へと登って来る。

「シルキアさん、大丈夫ですか？びつくりしましたよ。」

服を絞っているシルキアの様子を見て、ほっと胸を撫で下ろすサート。流石に目の前で湖に落っこちられれば、誰でも驚くだろう。

「ああ。」

「シルキア！遊ぼうぜ！！」

ラジウは平然としているシルキアに安心したのだろう、元気よくシルキアに飛び掛った。

バシャン！

ラジウの勢いに押され、シルキアはラジウと一緒にそのままもう一度湖へと落下していった。それもそのはず、シルキアが立っていたの場所は、湖から上がったすぐそこ。バランスを崩せば落ちるのは当たり前である。

「……………」

今度はすぐさま水の中から顔を出したシルキアは、眉を歪め額に皺を寄せるとため息をついた。それから横で手をバタバタと動かしながら水を飲み、明らかに溺れているラジウに視線をやると、何を思

ったのか腕を伸ばす。シルキアの手は次の瞬間、ラジウの湖の中に押し込めていた。
ガボガボと空気を吐く音を立てるラジウ。今にも溺れてしまいそう
だ。

サートは彼等のやり取りを見ながら、目に涙を浮かべて笑いを堪えようとしていたが。

「な、なに笑ってるんだよ！」

ラジウがシルキアの手をどかし、彼の手に必死に掴まっている。ゲホゲホと水を吐いてから、笑いを堪えきれていなかったサートに噛み付いたのだ。しかし、それすらも面白かったのか、ぷつとサートは吹き出して更に笑いを増してしまう。だから、上手く謝ることができないでいた。むっとしたラジウがサートにもう一度くつてかかろうとするが、タイミング悪く、もう一度シルキアによって湖に沈められてしまった。

「がぼがぼっ！！」

しかし、水面がラジウの動き以外で微かに揺れる。同時に、サートが水面に浮かぶ大きな影に気付き、笑うのを止めて目を見開いた。

「たっ！？」

目の前にいる彼の表情の変化が視界に入り、シルキアは沈めていたラジウの襟首を引っつかむと、丘に向かって放り投げたのだ。顔から着地し、思わず声を上げるラジウ。

シルキアは振り返って腰に差していた短剣を素早く抜き去った。

「げっ！あのバカでかい魚！？」

ラジウは身を起こし、慌てた様子で湖を見た。湖には、前に一度襲われたことのある池の主らしき魚が、シルキアに迫ろうとしていた。シルキアは魚を睨みつけて対峙する。一瞬だった。シルキアが短剣を見えないうちに放ち、その短剣が大きな口を開けている魚の横を通り過ぎていく。

ベリ

何かが剥がれるような音がすると同時に、シルキアは魚の前から消え失せていた。魚は空を切り、水しぶきを辺り一面に撒き散らして、湖へと沈んでいく。

ラジウとサートの目には、水しぶきと太陽の光が織り成す虹が映し出されていた。ラジウが綺麗だと思い目を細めた瞬間、虹を切り裂くように影が降ってくる。影はラジウとサートの前で見事に着地をはたした。

着地した彼の両手には、右に先程投げた短剣、左には大きな鱗が握られていた。

「……何それ？」

「ウロコ。」

「見りゃわかる。」

ラジウが指をさし持っているものの正体を聞くが、シルキアは一言きっぱりと言い放つのみ。彼の返答に負けじと即答で突っ込みをしますラジウ。

「……………」

「……………」

ラジウとシルキアの間に沈黙が訪れた。風が二人の間を通り過ぎていく。

「シルキアさん、そのウロコってさっきの大きな魚のものですよね？」

「ああ。」

とりあえずサートは頬を搔いてから二人の間に割って入った。そうしないとこれ以上話が進まないと感じたのだろう。

シルキアはサートの問いに頷いて答えると、手に持っていた鱗をラジウへと手渡した。目の前に鱗が来て、ラジウは思わず手を出して受け止めた。しかし、シルキアの意図がわからず首を傾げて彼を見る。

「何これ？」

「ウロコ。」

「……………」

ラジウのぼろりと零れ落ちた疑問に、またもや率直に答えを出すシルキア。ラジウは流石に押し黙ってしまった。

「キヴィに渡せ。」

しかし、黙り込んで額に皺を寄せしきりに自分を見るラジウを気にすることなどまったくなく、シルキアは彼に単刀直入に指示を出す。その言葉で、ラジウはやっと理解した。シルキアが薬の材料を採るべくこの湖にやってきたのだと。

「ふーん。あのでっかい魚、釣ろうとしてたんだ？」

「ああ。力負けしたかな。」

茶化してちょっかいをかけるラジウだったが、シルキアの思わぬ言葉によって逆に内心突っ込みをサート共にしてしまう。『力負けうんぬんの前に、あんた寝てたがなっ！』と。

「わ、わかった。じゃあ、届けに行つて来るよ。」

暗い影を落とす中でなんとか自分を奮い立たせ、ラジウはサートにもう片方の手を差し出した。一緒に行こうという意味表示だ。しかし、サートは胸の前で手を止め、首を横に振った。

「すみません。少しシルキアさんと話がありますから。オレ、残ります。」

「そう？わかった。じゃ、行つて来るね！」

ラジウは一瞬顔を曇らせたが、すぐににっこりと笑って頷いた。そして、シルキア、サートに片手を上げて挨拶をすると、そのまま踵を返し走り去っていく。

サートも手を振ってラジウを見送った。

第三章　失うもの（3）

「……ふん。話とはなんだ？」

ラジウが見えなくなるのを確認してから、シルキアはサートに話を切り出した。無愛想な表情から感情は一切読むことができず、振り返ってシルキアの顔を見たサートは苦笑った。

「あのウロコ。キヴィさんから話を聞いてるんじゃないんですか？」

「……ああ。」

サートはシルキアから視線を外し、明後日の方向を見て真剣な口調で言う。シルキアも彼と同じ方向へ視線を投げると、一瞬と惑ってから返答を返した。

太陽が、真上から少し西へと傾いていくのが二人の視界に入ってくる。

「そつだ、シルキアさん。釣り、教えてくれませんか？」

暗い雰囲気を打ち砕くように、サートは笑顔でシルキアに向けた。気をつかっているのがわかるほどの曖昧な笑みに、シルキアは小さく頷く。そして、近くに予備として作っておいた二つの竿の一つをサートに投げて寄越した。もう一つの竿はしっかりと自分の手に握られている。

湖を囲む岩にそれぞれが一定の距離を開けて腰を下ろした。決して近くはなく、決して遠くはない距離。互いの声が聞こえるぐらいの幅だ。

「……何を聞きたい？」

糸を湖に垂らしてから、しばらくの沈黙。最初に言葉を切り出したのはシルキアだった。

「シルキアさんって、旅してたんですよね？オレみたいな人って……いましたか？」

シルキアの促しに、サートは彼を見ないまま問いかけをぶつけた。しかし、曖昧な言葉達はどこか戸惑いを感じさせる。

「お前みたいに……魔物が体内に巣食っている奴のことか？」

シルキアは、一瞬言葉を止め躊躇いながらも核心に触れてきた。それに対して静かにサートは頷く。

実は先日の水の精霊との戦いの際、ラジウが水の精霊を倒しはしたものの、サートの体には既に精霊の身体の一部が混入されていたのだ。それは、体内から彼の身体を蝕んでいく。

「いたな。たくさん。」

サートが何を問いたいのか、シルキアには大体予想がついた。だが、真実を告げるべきか否か。また、本当にその問いかけなのか。それがわからないせいか、シルキアの目は細められ、真剣になっている。彼の真剣な目つきにサートはゴクリと唾を飲み込み、喉を鳴らした。でも、聞かないわけにはいかなかった。

「あ、あの。その中で助かった人って……。」

「いなかった。」

率直な答え。それがシルキアが出した返答だった。

今のサートに本当のこと以外を教えたところで、何の役にも立たないことは初めからわかっていたのだ。ただ、言っているものか少し悩んだだけで。

シルキアは今までのいろいろな所を旅して来た。だから、魔物に食とされ喰われて来た者や、種を植えられ体内から喰い破られてきた者など、数多く見ている。それらは死ぬという恐怖を植え付けられ、徐々に喰い殺されていった。

たくさんの人が殺されていく中で、生存者など見つけることは不可能に近い。いや、シルキアの経験や見聞きしたことの中で生存している者の話しは一切出てこなかったのだ。火のないところに煙は立たず。煙も立つほどの火がないということだ。

「そつかー。じゃあ、しょうがないですね。」

サートはあまりに酷い現実の言葉にも、カラッと笑って見せた。シルキアは小さな目を多少見開いた。

「なぜ、笑っていられる？」

「えっ？」

シルキアの思いがけない一言に、今度はサートの目が丸くなった。彼がただの子供である自分のことを気にかけるなど思いもしなかった。そんな表情。

しかし、シルキアはサートから視線を離さないまま答えを待っている。質問に答えなければ彼が口を再び開くことはないだろう。それが容易に想像できたサートは、頬を掻いてから、再び笑ってみせた。

「笑ってた方が良いことあるから、ですかね。」

それだけ言うと、湖から竿を上げるサート。シルキアはその返答に満足いかないのか眉を顰めた。

「……辛くないのか？」

その一言に竿は途中で動きを止めてしまった。そのせいで浮は宙を舞い、針は水の中で波紋を広げた。

「……辛くないわけ、ないじゃないですか。怖くないわけ……ないに決まっていますよっ！けど……。」

サートは声を張り上げたかと思うと、突如肩を落とした。それと同時に口調も聞き取れないほど弱気になってしまう。

「けど、オレ。自分が死ぬことより、周りの人を傷つける方が辛いです。偽善者って言われるかもしれませんが、目の前の人を自分の意思でないとわかってても”殺したい”と思ったら怖くて……。オレ、いつの間にかラジウ様の首を絞めようとしたことあるんです。あの日から、何度もあるんですよっ。」

サートの肩がガタガタと激しく震えるのを見、自分の言葉で彼の必死で押さえていた感情を引きずり出してしまった自分の馬鹿さ加減に、嫌悪感を感じてしまうシルキア。

しかも、どうやらサートは既に水の精霊の支配を受けてしまっているようだ。彼の言うあの日は、水の精霊と戦った日のことを示していたからだ。あの日からサートは精霊の一部を身体に入れられ、それが日に日に成長をし、今や自分を倒したラジウを恨む気持ちの彼の脳内を支配してきている。精霊がサートの身体を食い破り復

活するのも時間の問題であろう。そして、力を取り戻した精霊がラジウに襲い掛かるのは明白なことで、そのことはサートもシルキアもわかっていた。

「……シルキアさん。オレがホーデュ様の血を継いでるって知ってます？」

「ああ、キヴィから聞いた。」

しばらくの沈黙の後、静かな口調でサートは話を切り出した。彼の表情は、顔を落としているせいで窺えはしない。

ホーデュというのは、ラジウの父でありホーマイ国の王だった者だ。サートはラジウと腹違いの兄弟で、実際に彼の血が流れているのである。

「ホーデュ様の子供って本当にたくさんいるんです。オレ達もそうですし、他にもいろんなところにいるはずです。でも、なんでホーデュ様の息子として王の座につけるのがラジウ様だけか……シルキアさんは知っていますか？」

「……ふん。王妃との子だからではないのか？」

シルキアの返答に、サートの口元が秘かに緩んだ。けれど、その笑みはどこか影が薄く嘲笑しているかのよう。

「それもあります。けど、王妃様はふと長い間どこかへ行く癖があって、王妃の座も危ういと言われてたんです。実際、ホーデュ様が亡くなった今もその癖のため何処にいるかわからない状態です。いまや生きているのかどうかさえ……。まあ、そういうわけで、あまり王妃様のことを認めている方もいないんです。だから、もちろん

ホーデュ様の子供を生んだ女の人の中には、彼へ直々に申し出る方もいらつしやったんです。」

緩んだ口元はすぐさま元に戻り、未だに顔を上げないせいで彼の表情はやはり窺い知ることとはできない。視線がまったく合わない今の状況は、ひどく周りの空気を重くしているようで、シルキアに口を挟むことをさせなかった。

「けれど、ホーデュ様は女の人に言っただんです。『子供がもし、成人できたら我が子として認めよう。』と。」

「……ふん、年齢が達していないということか。」

重々しい口調で綴るサートに対して、シルキアも彼を見ることなく呟いた。しかし、サートは静かにゆっくりと首を横に振ったのである。シルキアの言葉を否定するために。

「いいえ。成人まで生きている人がいないんですよ。ホーデュ様の子供は全員子供の間に死にます。短命なんですよ。」

さすがにシルキアは言葉を失ってしまった。何を言っているのかよくわからないのだ。しかも、重い内容は逆に真実味が薄められており、口を開けば疑いが露わになってしまうであろう。

「嘘……みたいですよね。だけど、オレより年上の人は皆……皆死んでしまっただんです。もちろん、死に方はいろいろですよ？病氣から戦士、事故死……今度は、オレの番なんです。」

自分で発言していてひどく苦しくなったのだらう、サートは胸元をぎゅっと強く握り締めた。

「ふん。ならラジウはどうなる。貴様は死んで、あいつは生きてい
るとなぜ言い切れる？」

ラジウがホーデュの息子だと認められ育てられてきたのならば、彼
は成人まで生きると言っているようなものである。シルキアはそん
なことがあるのを信じていないのか、信じたくないのか、不機嫌そ
うに問いを投げかけたのだった。

サートはおもむろに空を見上げる。彼の表情はどこか悲しげであつ
たが、目は輝きを失ってはいなかった。

「占いです。」月無き暗闇の夜、気高き獅子のたつた一人の子供が
誕生する。獅子最愛の闇ガラスとの間の子は、困難に負けぬ力を持
ち、世界をもほろぼす力を持つだろう。」と、予言があつたそうで
す。獅子はホーデュ様をさし、闇ガラスとは王妃様をさします。」

「闇ガラス……？闇と言う表現は確か、魔の物に使われるものでは
ないのか？」

サートの説明の中で、引がかかった言葉を繰り返すシルキア。彼の
言葉にサートの目は大きく見開かれた。どうやら驚いているようだ。

「よく知ってますね。そうです。闇とは魔力を持つ者を示し、カラ
スも同様に忌まわしき力のことを示してます。王妃様は魔女だつた
んです。」

「……そんな話し聞いたこともないが。」

シルキアは眉を顰めた。王妃が魔女だったということを、噂ですら
聞いたことがなかったのだ。

魔女とはほとんどの者が黒い髪を持ち、何らかの方法で魔力を扱える人間のことを言う。しかし、元来魔女は人間でありながら人間ではない扱いを受け、人間の世界から追放されているはずなのだ。それが王の正妻だと聞かされても、誰が信じるというのか。しかも噂にすらならないわけがないのだ。

「当たり前ですよ。言っただのはホーデュ様自身ですから。多分、ホーデュ様以外誰も知らないこと……なんだと思います。」

「……会ってたのか？」

納得したのか、シルキアからはもう疑いの台詞は出てこなかった。一つだけの問いに、サートはこっくりと頷いてみせる。

「ええ。何度か”父”として会いに来てくれました。あの方は、優しすぎたんです。ラジウ様はあの方にそっくりで……顔も性格も。だから、オレの中に水の精霊が残ってるなんて、絶対にラジウ様には言わないでください。」

朗らかな笑顔がシルキアに向けられた。シルキアはその笑顔を意味を汲み取れず眉間に皺を寄せる。

「なぜだ？」

「あの日、ラジウ様は強くなりました。オレ、ラジウ様には強いままで居て欲しいんです。ラジウ様は、ホーデュ様と同じで優しすぎる。もしオレの中にまだ水の精霊がいると知ったら……。」

サートは途中で言葉を止めた。しかし、その台詞の先は彼が言わずとも、シルキアにも伝わっていた。

シルキアは立ち上がるとサートの頭へと手を置き、軽く数回叩いた。ペシペシと言った音が響く。

「帰るぞ。」

ほんの一言だけ伝えると、シルキアは自分の竿を引き上げ、糸を竿の部分に巻きつけた。それを肩へとかける。サートも彼の真似をして竿を肩へとかけた。

「あのっ……。」

何も言わずに踵を返すシルキアに、サートは申し訳なさそうに声を掛けた。

「何だ？話しなら道すがら聞いてやる。」

振り返ることなく発せられたシルキアの台詞には、どこか暖かみがある。サートは肌で感じ、笑みを溢したのだった。早足で彼の隣へと行くサート。彼が動き出したのを音で察したのだらう、シルキアはゆっくりと足を進めるのだった。

第三章　失うもの（４）

時間は少し戻り、場所は城内のとある一室。キヴィが一番よくいる部屋、医務室である。医務室と言ってもベットが数個並べられ、たった一つに戸棚にキヴィが持つてきた薬がしまつてあるだけの簡素な部屋だ。後は本に埋もれている机と椅子しかない。

キヴィは椅子に腰を下ろしていた。ドアから光りが差し込み、読んでいた本を照らしたことでドアが開いたことに気付き、キヴィは振り返った。誰が扉を開けたのか確認するまで一瞬緊張が走ったが、すぐそれが敵でないことがわかる。

「なんだい、ノメルじゃないか。どうしたんだい？」

扉を開けていたのは小さな少女だった。茶色の髪が風になびく。

「あの……眠れない。」

ノメルは顔を落として小さく呟いた。あの精霊の出来事からたびたびノメルは思い出すのであろう、何度も悲鳴を上げたり泣き叫んだりを繰り返していた。最近はいぶ治まってきたが、夜寝付けないことが多かった。

「昨夜寝てないのかい？……おいで。」

問いに申し訳なさそうに頷くノメルを、キヴィは優しく手招きした。少し微笑んで嬉しそうな表情を見せたノメルがキヴィの元へと走り寄ると、キヴィは彼女を受け止め抱き上げる。ノメルの身体は小刻みに震えていた。

「怖い夢でも見たのかい？」

ノメルを自分の膝の上に乗せ、頭を軽く撫ぜながらキヴィはノメルを覗き込んだ。顔は少し青かった。ノメルはうんともすんとも言わずに、キヴィにしがみ付きじっとしている。

「やれやれ。」

呆れ口調なものの、キヴィの手はノメルの背中を優しく撫ぜていた。ゆつくりとノメルの震えが小さくなっていく。安心したのだろう、しばらくすると身体の震えも止まり、すーっという寝息が聞こえ出した。

「まあ、しょうがないか。あんだけ怖い思いしたんじゃ。っと、やっと来たかい。」

ガタンという音で、再びドアに目をやるキヴィ。そこには今まで待っていた青年の姿があった。銀髪の髪をなびかせ、つかつかと近寄ってくる。

「まるで母親みたいですよ、キヴィさん。」

につこりとした柔和な笑みが、キヴィの前で止まった。キヴィの顔が一瞬で赤くなる。

「クレクっ！あんだ……」

「しっ、起きちゃいますよ？」

大口を開けて反論しようとするキヴィだが、すぐさま口到人差し指

を当てられ押し黙ってしまった。そして、視線を下にするクレク。つられてキヴィも下を見ると、気持ち良さそうに自分の膝の上で寝ているノメルが視界に入ってきた。

「ふふふ。まあ、お似合いで可愛いと思いますけど。」

キヴィが反論できないことを言いことに、クレクは変わらない笑みでからかいの台詞を付け足した。眉間に皺を寄せ、さらに顔を赤くするキヴィだが、なんとか口を閉じ大声を出さないようにしていた。頬が膨らんだしかめっ面を見て、ラジウを思い出してしまったクレクは顔を背けて噴出してしまった。

「ぶっ……。」

「く〜れ〜く〜っ……」

「ああ、すいません。それより、お話とはなんですか？」

怒りを低い声でぶつけてくるキヴィに慌てて話をかえるクレク。しかし、キヴィは頬をもう一度膨らませてから腕組をしてぷいっとな顔を逸らしてしまった。

「……………」

「あの、キヴィ……さん？」

明らかに拗ねているキヴィに、クレクは冷や汗を掻き名前を呼ぶことしかできなかった。実際の話し、会ってまだそんなにたっていない相手なのだから対応が分からないのも無理はない。

「まったく。まあ、いい。じゃあ、話してもしょうかね。そこに座りな。」

ため息をついてから、キヴィはとげとげしい口調で自分の正面にあるベットを指差した。クレクは素直にそれに従う。

キヴィは正面に座ったクレクをマジマジを見つめた。

「あのね、話っているのは……あたしの仕事についてなんだ。」

言いくそうに頬を掻くキヴィにクレクは首を傾げた。いまいち彼女の意図が見えないのである。

「あー……あたしはこの医者だ。誰かが怪我をしたらそれを手当てしなきゃならない。だから、一人ひとりの特徴をしっかりと把握しとかなきゃならない。その意味、あんたにならわかんと思うんだがね。」

「……何を言いたいんですか？」

キヴィの真剣な表情に、クレクの顔からも笑顔が消えた。緊迫する空気。密かな殺気をキヴィは彼から感じていた。しかし、ここで退くほど彼女は大人しくはない。

「わかった、はっきり言おう。あんたが何なのか教えてもらいたい。人間じゃないんだろ？」

「っ……。」

キヴィも覚悟をしたようにクレクを睨み返した。クレクは彼女の言葉に明らかな同様を示した。しかし、すぐさま目が細められ、殺気

が放たれる。

「貴方に言う必要性はありません。そういう話なら、私はここで失礼させていただきます。」

ひどく冷たい口調でキヴィを射るクレク。ずっと立ち上がり、彼女に背を向けてしまう。

「必要あるさ。人間には人間の治療法があるし、他には他の治療法がある。もし、あたしがあなたに人間の治療法を使ったら、あなたは助からないかもしれない。」

キヴィは、クレクの背中に静かにけれど感情がこもった声で呼びかける。彼は動こうとしない。

「……そしたら、あんた。あたしはラジウにどう頭を下げればいいんだい？」

ラジウの名前ではっと顔をキヴィに戻すクレクの表情は、苦虫を潰したような不安な顔。本当のところ、自分が人間ではないことを知られること、ましてや種族をばらすことは命の危険性がある。信用できない人間に正体を告げることなど、できるはずがないのだ。

「……………」

秘密を軽々しく口にはできない。そういうかのようにぎゅっと口を結ぶクレクを、キヴィはずっと眺めていた。

「……わかった。あんたにだけ秘密をばらせというのも一方的すぎるよね。こうなったら、あたしもあたしの秘密をあんたに話そうじ

やないか。」

いつまでも黙っているクレクに、キヴィはポンッと手を叩き提案をした。彼女の顔はにやりと歪み愉しそうである。

「どうだい？それならお互い秘密をばらさないだろ？」

キヴィの言葉に、クレクは目を瞑りため息をついた。そして小さく「どうして、この人には敵わないのでしょうか。」と呟くのであった。それはキヴィの耳には届いていない。

「わかりました。そこまで言うのであればお教えしましょう。ただし、誰にも言わないでくださいよ？」

再び座りなおし、やれやれと頭を掻きながら今度はキヴィに届く声量で口を動かす。もちろん。というようにキヴィの首が勢いよく縦に振られるのを見て、クレは頭にやった手を自分がつけている耳と後頭部を隠す薄黄色い布に手をやった。

布の下の切目の部分にある白と黄色で模様が、キヴィにはとても印象的だった。

「……なるほど。」

無言のままクレクがその布を取ると、キヴィは頷いて納得した。明らかに特徴がそこに隠されていたのである。

キヴィの言葉に小さく頷いたクレクはすぐさま布を元に戻し、視線を彼女に投げてよこした。

「じゃあ、私の話って訳だね。」

キヴィは、他のことには一切触れることなく自分の話を始めた。けれど、本当はもっと突っ込んでみたかっただろう、クレクの特徴を見た時の彼女の目は爛漫に輝いていた。だが、多分これ以上突っ込んで聞いたところで、クレクが答えてくれるとは思わない。それをキヴィは感じ取っていたのだ。

「じゃあ、一つ。私の本当の名前はキヴィ・エクストイラ。」

「エクストイラ？その名前はどこかで聞いたことが……。」

「あるだろうねえ。私が小さい頃、最年少の学者として世間に公表された名だよ。」

クレクが考え込む仕草を見ると、キヴィはあつさりと答えた。肩を竦め、どうでもよさげに。

「そうなんですか。あまり隠す必要はないように思いますが……。」

傲慢しても良いくらいだとクレクは思った。最年少の学者といえば、そうとう頭が良いのだろう。それをいちいち隠す必要があるのだろうか？そんな疑問が彼の頭をよぎったのだ。

「馬鹿言っんじゃないよ。ただの一介の医者がそんな名前……知らないさ。まあ、これ以上はあんたが他のことしゃべってくれんならしゃべってもいいけど？どうする？」

茶化すように笑って軽快に言うキヴィ。しかし、口調とは裏腹に、言葉にはこれ以上何も聞くなと言う感がひしひしと窺えた。クレクは両手を上げ、小さく首を横に振りそれに答える。

「よし、それじゃあ、今後ともよろしく頼むよ、クレク。」

「もちろんですよ。」

キヴィがウィンク一つ。それに対して、クレクはいつもの柔らかい笑みを向けて見せた。交渉成立。この話にはもう口にはしないと二人の目が言っている。

「ああ、そうだ。もう一つあんたに言うておくことがあったんだ。」

思い出したかのように、ポンと手を叩くキヴィ。それに、クレクは首を傾げて相手の出方を待った。

第三章　失うもの（5）

「サートのことなんどけね……あんた知ってるかい？」

「……水の精霊のことですか？」

キヴィが言葉を濁し再び暗い雰囲気になってしまつたので、クレクは一瞬目を細めてから言葉を選び発言する。しかし、その言葉はあたりをよりいっそう暗くしてしまった。

「ああ、やっぱりわかつてたかい。」

キヴィが声のトーンを落として話す。あまり良い話題ではないのと、ひとに聞かれてはまずいからだろう。

「ええ、何度かラジウ様に襲い掛かろうとしていたところを止めましたからね。無理でなければ詳しく話を聞きたいと思っていました。」

クレクもつられて声を落とす。彼の目は真剣にキヴィに向けられ話が続くのを待っていた。それにキヴィは静かに頷いて、了解の意を伝えるのであった。

「実はね、水の精霊の支配の進行はかなり進んでいるんだ。多分、サートが喰われるのも時間の問題だと思ってる。それは、あんたもあたしも、シルキアも……大人は全員理解しているはずだ。だから、言わせてもらう。サートはもう助からない。死ぬしかないんだよ。あたしにできるのは、気休めに薬で少し寿命を伸ばしてやることだけ……。」

クレクが頷きながら相槌を打つので、キヴィの言葉は止まることなく流れ出た。もちろん感情も一緒に。悔しいというかのように下唇をかみ締め、眉を顰めるキヴィ。辛そうな彼女の表情に、クレクの胸がぎゅつと締め付けられた。

「……………」

「……………」

今の現状では、クレクにもキヴィにさえもどうすることもできないのだ。それを改めて思い知らされ、沈黙が二人の肌を痛く突き刺す。

「キヴィさん！」

沈黙の中、いきなり自分の名前を大声で呼ばれてビクッと身を固めるキヴィ。クレクも慌てて声のする方向に視線をやった。二人の視線の先には、ドアからひょっこりと顔を出した一人の少年がこちらを見ていた。

「さ、サートつ。い、いつからそこに？」

キヴィが上擦った声で視界に入った子供に問いをかける。焦っているキヴィに対し、サートは首を傾げて不思議そうに彼女を見ているのであった。無邪気な顔に、今まで話していたことの後ろめたさがあり、キヴィは顎をひいて多少背を仰け反らせている。

「ついさっきだ。」

しかし、サートの変わりに彼の後ろに立っていたシルキアが彼女の

質問に答えた。どうやら、二人一緒にここまで来たらしい。

サートはシルキアの言葉に苦笑いを浮かべ、ちらりと彼を見ると、シルキアはふんと鼻を鳴らし、視線を彼から逸らした。

「あはは。いいのに、気を使ってそんな庇ってくれなくても。シルキアさんったら優しいなあ。」

「ふん。いちいちバラす必要もないと思ったただけだ。」

笑うサートに対し、無表情のまま感情が窺えない声色で発言するシルキア。「恥ずかしいのかね。」と密かに呟いたキヴィの言葉は、クレクにしか聞こえていない。

「あははは。まあ、そうですけど。それってなんか後ろめたいっていうか、後味悪いって言うか、なんか悪い気がしません？ま、というわけで。キヴィさんのお話、オレ達聞いちゃいました！」

茶化すようにシルキアへ言葉を投げかけ、更にはキヴィにまったくいつもと変わらない笑顔に向けてサートは告白した。それには流石のキヴィも目をぱちくりさせてしまう。

「あんた……大したただね！それで、笑顔でいられるなんてあんた、そうとう覚悟してるってもんだ。」

キヴィは、にっと笑ってサートの目を見た。強い芯の通った心が目を通して伝わってくる。ビリビリと伝わるサートの強い意志に、キヴィは唾を飲み込んで喉を鳴らした。彼女の瞳は輝いて、本当に愉しそうである。

「ありがとうございます。あの、それで、お二人にお願いがあるん

です。」

「なんだい？」

サートは会釈をしてから、真剣な顔つきになった。それにともない、辺りの空気が一瞬にして張り詰める。とても重要な話しなのだろう、サートは目を一回閉じてから自分を落ち着かせると話を切り出した。

「このこと、ラジウ様には言わないでくれませんか？」

緊張でカラカラに乾いた舌と喉は掠れた声を出すのに十分で、それでもなんとか用件を言つてのけた。キヴィが目を細めて品定めするかのごとくサートを頭から足まで一瞥した。

「あんたが水の精霊のせいで死ぬってことをかい？」

「はい。」

キヴィが話しの流れから彼の言いたいことを読み取り、確認をとる。しかし、その中身にキヴィは眉を顰めた。そして、一言。

「ふーん、なんでまたそんなややこしい事。」

ぽつりと呟いた彼女の問いに、サートは苦笑つてこう言った。

「だって、ラジウ様へこむでしょう？せつかく倒したのに。それに、多分ラジウ様はまだ人の死を知らないと思うんです。だから、きつとそんなこと伝えたらショックを受けるだろうな。って。」

言ってから、笑っているような悲しいような曖昧な表情になり、少

し影が落ちているように周りから見えた。複雑な心境なのがよくわかる。

「そりゃあ、受けるだろうね。あんたのこと気に入ってるみたいだし。でも、それはあんたが死んだ後にわかってても同じことだと思うけどねえ。」

けれど、キヴィはサートの返答に眉を顰め、疑問を口にした。結局のところ、彼が死ねばラジウは知ってしまうであろう。彼がどうして死んだのかを。

「はは、そうかもしれませんね。でも、今は知られたくないんです。だって、ラジウ様の落ち込んだ顔なんてみたくありませんから。」

にこやかに笑うサートだが、でもと続けてから真剣な表情に戻り、シルキア、クレク、キヴィと順々に見ていく。まるで、同意してほしいもしくは強制的に納得させるような視線。

「そうかい。別にいいけどね。元から言うつもりはないし。」

「私も言うつもりはありません。それにしても、なぜサートさんはそこまでラジウ様を？」

シルキアはなんの反応も示さなかったが、それは既にサートと彼の間で話がついていたからである。他の二人は同時に頷いてみせた。キヴィは肩を竦めてからにっと笑って敵意がないことを現し、クレクも柔和な笑みでサートに答えた。それから首を傾げ、今まで聞いていた中で引くかかかすることを彼に問いかけたのである。

「弟……だからです。オレの父の息子ですから、やっぱり大切にし

たいんです。ノメルと同じように。」

どこか淡い印象を受ける笑みを浮かべたサートの顔は、どこか遠くを見ているようだった。昔のなつかしい思い出。父のことを思い出しているのであることは、少なからずその場にいた三人は感じ取っていた。

「よし、それじゃあこれは他言無用ってことでもう解散しようかね
！」

「はい、ありがとうございます！」

キヴィが手をパンパンと打ち鳴らして解散の合図をし、クレクとシルキアは頷いてそれに同意を示す。彼等の様子を見て、嬉しそうな表情を浮かべたサートだった。

解散ということでサートとシルキアが踵を返す。その反面、小さな人影がゆらりとドアの近くで揺れたことは誰一人として気付いていない。

「さて、それじゃあ、あたしはノメルを部屋に連れてくかね。」

また、キヴィがノメルを抱きかかえた時、彼女の目が薄っすらと開いていたことにもその場の全員が気付くことはできなかった。

それが、今後にどういう意味を持つのか……彼等はまだ知らない。

第三章　失うもの（6）

「はあはあ……。」

一人廊下を走る少年が居た。全速力で駆け抜け、もう疲れたはずなのにでも止まらないでいる。

彼の頭の中はいささか混乱していた。

それもそのはず。聞いてはいけないことを聞いてしまったのだから。

「なんだよっ、サート……僕だって……。」

小さく呟きながら頬から滴る涙を荒々しく右腕で拭い去った。

息を切らしてまでやってきたのは、城の入り口より奥に行った場所にひっそりと佇む一つの墓の前。そこまですると立ち止まり、ドカッという音を立てて座り込む。座り込むというよりはいささか倒れこむに近かったかもしれない。

「父……上……。」

四肢が動くのを止めたせいで、涙が先程よりも更に流れ出た。ラジウは墓の前でうな垂れた。

「なんでかな。なんで、僕は誰一人救えないんだろう？ 守れないんだろう？」

言葉が、涙と一緒に次から次へと溢れ出す。もう、ラジウ自身にもどうしようもなかった。誰かに聞こえてしまつとか、そんなこと考えていられるほどの余裕もなかったし、感情をこれ以上押さえ込んでいられるほど大人でもなかったから。

「なんで？なんでなの？倒したじゃん。僕、あいつ倒したじゃんか！なのに、なんで今更になって……サートの身体になんか……サートの馬鹿。馬鹿野郎っ！なんで僕に言ってくれないの！？なんで……弟なんて……友達だと思ってた。思ってたのに、結局僕は……守られてるのかよっ！」

一つのこと集中さえできない。精霊のこと、サートのこと、父ホーデユのこと、自分のこと。すべてが思い出されては消え、次から次へと感情の波が押し寄せて……今にも頭がパンクしそうだった。

「お悩みのようですね。」

悲鳴に近い声を掻き消すように、低い声が割って入ってきた。一瞬空耳かと疑うほど突然耳に入ってた声は、ラジウの身体を震わせた。

「だ……だれ？」

上擦った声からは緊張を感じ取れる。ラジウがゆっくりと振り返ると、黒装束に身を包み鋭く上がった一本の角を持つ者がすぐ近くに立っていた。ぎよっとして、ラジウは思わず身を引く。

「今朝お会いしたと思いますが？」

彼はそれだけ言っただけで名乗ろうとはしなかった。ラジウは未だに驚きで頭の中が真っ白のため動くことが出来ない。

「お教えいたしましょうか？精霊にとり憑かれたあの子供達を助ける方法を。」

「へっ？あ、あるの？」

口の端が上がりやりにやりとした笑みを浮かべる彼の言葉に、ラジウは思わず食いついた。キヴィでさえ無理だと言ったことだ、てっきり方法がないものだと思っていたのだ。

「ええ。知りたいですか？」

「も、もちろん！」

嫌な笑みに少し戸惑いを感じながらも、サートを助けられるのであればという気持ちのが先行し、大きく頷くラジウ。黒装束の彼は白い歯を見せて笑った。鋭い八重歯が不気味に光り、ラジウの背中に冷たいものを走らせる。

「貴方が死ねば良いですよ。」

彼の一言にラジウは耳を疑った。だから、驚きの声も上げられずに目を見開いて彼を見ることしかできない。

「当たり前でしょう？命を助けるには命の代償が必要なのですよ。あの精霊は貴方を恨んでいる。だからこそ、その恨みが原動力になって彼等を糧に貴方に復讐しようとしている。ならば、その原動力を取り除けばいい。貴方が死ねば、彼女は原動力を失い、彼等の中で静かに眠ることでしょう。彼等が寿命で死ぬまで。」

ラジウが口を挟まないのいいことに、男は淡々と説明していく。まるで、全てを知っているとでも言うかのように。

「……ほ、他の方法は？精霊を殺すとか、消すとかっ。」

気迫というか雰囲気というかなんと妖しい感じに蹴落とされながらも、ラジウはやっと言葉を口にした。

死んでまで助けたくないと思ったわけではない。けれど、やはり死にたくはないし、でも助けはしたかった。矛盾が駆け巡る中出てきた答えは別の方法を探すということだけ。

「ははは。」

ラジウの言葉に、男は声を上げて笑った。突然のことにラジウは彼を凝視する。何か自分がおかしなことでも言ったのか、不安が頭をもたげた。

「精霊を殺す？そんなことは無理ですよ。あれは自然界においてもつとも必要なモノ。あれらがいなくなれば自然が消滅してしまう。言うなれば、水の精霊を殺せば水自体がなくなってしまうのですよ。それを神が消すことを許すとても？決していなくならないのが彼等ですよ。不老不死の存在。太古から存在しているのです。」

一気に捲くし立て、狂気を含んだ黒色の瞳を垣間見せ、彼は言った。絶望をあたえるのがさも愉しそうに、歪んだ笑みがラジウに向けられている。

「じゃ、じゃあ。」

「方法の一つですよ。貴方が死ぬこと。それ以外に方法はありません。まあ、お考えになって行動してください。ラジウ様。」

ラジウの言いかけた言葉を遮り、最後に釘を刺す彼。そしてずっと足元から彼は消えていった。

ラジウは追いすがろうと手を伸ばすが、その手は宙を切るだけ。

「ああ、そうでした。明日、早朝。貴方の国はなくなりますのでご了承くださいラジウ様。賢ければ来ないでしょうが、お伝えしておきましょう。では。」

声だけが辺りに響く。忠告。それが頭に入ってくるほどラジウはまだ落ち着いていない。

しばらく誰もいなくなつた宙を眺めているしかなかった。

時間は進み、日が沈み辺りが暗くなつた頃。クレクは廊下を早足で歩いていた。それというのも、夕食にさえラジウの姿が見られなかつたからだ。

シルキアやサートが言うには、先に城に戻ってきているはずなのだが。

「ラジウ様、どこかで迷子になっているのでしょうか？」

一抹の不安を感じながらクレクは城中を歩き回る。

ふと、暗い中で何かが動いたように思えて足を止めた。うつすらと開く扉の向こうは闇、その場所は昔この城の主ホーデュが使っていた書室だった。ひとたび足を踏み入れると埃やカビの臭いがむわつと鼻につく。

何年も使われていないのだろう。もっていたランプで、クレクは中を照らした。

すぐさま床についた足跡と、何かの丸い跡を見つけた。それを追つて明かりを移動させると埃を被つた机が姿を現した。更に奥まで照らすと、椅子に座つて埃まみれになり机に突っ伏しているラジウの姿が見られた。

クレクはほつと胸を撫で下ろし彼に近づいて行く。

「こんなところで寝ていたのですか……。」

明かりを机に置いたクレクの目に、ラジウの下にある本が目に入った。一瞬途惑ったものの、好奇心にかられゆっくりとラジウの手をどかし本を引っ張り出す。

「これは……。」

それは、まだ何も書かれていない日記だった。いや、よくみると少し黒ずみ跡が残っている。何度も書いては消し書いては消した証拠だ。

そこから辛うじて読み取れるのは『死』という言葉。

クレクは尚も文章を解読しようと本を明かりに近づけたり、透かしてみたり、遠ざけてみたり。

「自分の死と……彼の死……どちらを……。」

目を細め、読める単語を読んだ。それだけでラジウが何か悩んでいることを察することができた。何か、大きな壁にぶつかっている。それが何なのかはわからないが、クレクは苦笑った。

そして、を閉じてラジウの隣に置き、明かりを手取る。明かりが部屋の中を照らしていく。

ぎっしり詰まった本の一つ一つのタイトルを目で追い、何かを捜すクレク。一番上端の本で彼の目は止まった。

真っ黒で、背びれには何も書いていない本。背伸びしてその本を手取る。

「懐かしいですねえ。まさかまだ有ったとは……これが力になってくれるといいんですが。」

一人呟いてラジウのところへ戻り、先程の何も書いてない本へその黒い表紙の本を乗せた。
それからラジウに自分の上着をかけると、クレクは静かにその場を跡にするのであった。

第三章　失うもの（7）

ドタドタと廊下を走る音で、ほぼ全員が目覚めます。それはまだ霧が濃い早朝の時間。

「誰だいつ！騒がしいのはっ！！」

無理矢理起こされ不機嫌になっているキヴィが、怒鳴りながら自分の部屋から出てきた。そこへ丁度ドタバタと足音が近づいてくる。

「こらっ、ラジウ！朝っぱらからなんだって言うだいつ！うるさいよっ！！」

「あ、キヴィ！大変なんだよ！！」

キヴィの声で彼女に気付くと、ラジウはキーッと急ブレーキをかけた。そして、怒気のはらんだ声色をまったく気にしない様子で、腕をぶんぶんと振り慌てる様子を見せる。

それには流石にキヴィも不思議に思ったのだろう首を少し傾けてラジウを凝視する。

「何がだい？」

「僕の国がなくなっちゃうって！！」

「はっ？」

落ち着けという意味を込めてゆっくりと話しかけた問いに、早口で返ってきた答え。それが一瞬何を言ってるのかキヴィにはわからず

に、素っ頓狂な声をあげさせる。

「だーかーらーっ！今日の朝、僕の国がなくなるって！！」

「ちょ、ちよっとお待ちよラジウ。いったい全体そんな話し、誰から聞いたんだい？」

興奮して顔を赤くしながら急かすように怒鳴るラジウに、キヴィは自分の手を彼との間に置き何度か揺らす。落ち着けという合図だ。

「……。」

キヴィの言葉にはっと目を見開くラジウ。どうやら自我を取り戻したようだ。けれど、なかなか質問に対する言葉が出てこず、口をパクパクと動かしたり、視線をあちらこちらにやったりしている。

「……あんた……不確かな情報なんじゃな……なっ！！」

呆れ口調だったキヴィだが、でかかった言葉を途中で飲み込み驚きの声を上げる。一心にラジウの後ろを凝視しているキヴィ。ラジウも彼女の視線につられて振り返った。

「……そ、そんな……。」

キヴィの視線の向こう側。木が生い茂り視界を塞ぐその向こう側。ようやっと覗く空に立ちのぼる黒い煙が二人の目に入ってきたのだ。その方向は、ラジウが逃げてきた方向。つまりはホーマイ国の方向だ。

「どういうことだい！？ラジウ！！あんた、なんでこんなことにな

るって……返答しだいじゃあたしも本気で怒るからね!!」

もう既に本気なのではないかというくらいにキヴィは眉を八の字にし、鋭い視線でラジウを射抜いている。しかし、ラジウが少々びびって足を後ろに下げたのと同時に、彼女は廊下を蹴っていた。慌ててラジウも彼女を追いかける。

「クレク！シルキア！いや、全員城の入り口に集合しな!!」

キヴィの大声が城中に木霊する。大して大きくない城にはそれで十分だった。部屋のドアが開き、人が出てくる。

数分も経たないうちに、入り口にはクレク、キヴィ、シルキア、ラジウ、サート、ノメル、子供達全員が集まっていた。

「どうしたんですか？キヴィさん。」

ことの事態を理解していないクレクだが、キヴィの緊迫した雰囲気にかが起こつたと感じながら慎重に言葉を発した。

「ホーマイ国が……多分魔物達に襲われている。」

「なっ!」

キヴィが自分のおおよその見当を述べると、クレクが驚きの声をあげ、子供がざわめき出した。キヴィは、顎の下を手で押さえながら何か思考をめぐらせている。

「ねっ！クレク！馬あつたよね！？僕、行くから連れてって!!」

そこへ、いてもたってもいられなくなったラジウが割って入ってく

る。クレクの服を掴み、引っ張りながら懸命に彼を見上げていた。

「え、ええ。わかりました。」

「お待ち!」

クレクも焦らされたせいか思考が回らなかったのだろう、ラジウの言葉に頷き踵を返そうとしていた。そこに、切り裂くようなキヴィの鋭い声が止めに入る。

「ラジウ。あんた、誰からこの話を聞いたんだい？」

答えなければ行かせない。睨まれたラジウはそう感じていた。威圧が物凄い勢いで押し掛かってくる。

「……魔物……。」

答えたくは無かった。けれど、答えなくてはならなかった。からからに乾いた舌で、やっと一単語だけ搾り出した。

キヴィは、ラジウが予想していたみたく目を見開いて驚くわけでも、顔を真っ赤にして怒鳴りちらすわけでもなかった。ただ、冷静にラジウを見つめている。

「……あんた、他に何か言われたら？それも言いな。」

そして、冷たくいつもよりもドスのきいた低い声で、静かに命令をしてきた。口調もさることながら、その雰囲気は命令以外の何モノでもなかった。しかも、決して逆らうことのできない……そんな命令。

ラジウは一瞬戸惑い、助けを求めてクレクを見るが、彼もまたキヴィ

イ同様にじつと自分を見つめていた。それで、ラジウは悟った。今の状況では決して誰も自分の味方になって助けてくれるものはいない。

「……………」

ラジウは顔を落とした。戸惑ったのには訳がある。もし、言われたことを言うならば、盗み聞きしていたことも言わなければならなかったからだ。

「……………」

キヴィは黙ったままラジウを見ている。彼が言わないならば、彼女はここを動きはなかった。いや、誰もここから動かそうとは思っていなかったのだ。

「…………ごめんつ。サート！」

意を決して言葉を発した後、ラジウは顔を上げた。その顔には不安も迷いも感じられない。真剣な瞳が彼が全てを言う覚悟をしたことを伝えていた。

「僕、魚釣りに言った後。ちょっと寄り道しててサート達より後にキヴィのところにいったんだ……………そしたら、サート達が話してて……………聞いてちゃったんだ。それから、父上の墓に言ったら魔物に会って…………サートを助ける方法を……………教えてもらったんだ。」

段々と重くなる口調で、魔物に教えてもらったことが全く良いものではないと、その場にいた誰もが感じていた。サートもなんと云ってよいのかわからずに口を挟めないでいた。

「その方法は？」

「……僕が死ぬこと。」

キヴィが促すと、ラジウは彼女とサートから顔をふいっと逸らして、苦しそうに呟く。

「わかった。それじゃあ、あんたは行っちゃ駄目だ。絶対あんただけはここにいな。」

そんなラジウから視線を外して、キヴィはずっとシルキアの方に足を向けた。けれど、ラジウが自分の言葉にばつと顔をむけてきたので、キヴィは思わず再びラジウを凝視してしまう。

「い、いやだっ！なんでそうなるのさ!？」

「当たり前だろ？魔物の狙いはあんたの命さ。だから、あんたはここに居なくちゃならない。」

今にも泣き出してしまいそうに握りこぶしを奮わせるラジウ。けれど、こういう場面には慣れているのか、まったく動じることもなくキヴィは説明を返した。

「僕の命？それなら会った時に殺してたはずじゃないかっ！」

「あわよくば死んで欲しい程度だろうけどね。あんたが死んでサートが助かるってーのは、自殺を。あんたの国が無くなるっていうのはあんたが戦場に駆け付けて死ぬことを……あわよくば狙っているのさ。しかも、そんなこと言われて、あんたまだ頭がおつついてな

いだろう！？迷いがある奴が戦場なんかに行って、帰って来れるなんて思っんじゃないよっ！」

尚も食い下がるラジウに、キヴィは眉を顰めた。そして、彼女もそろそろ限界だった。すぐさま本当は駆けつけたい気持ちを抑えていたのだから当たり前であろう。今まで我慢していた分をぶつけるほど勢いよく捲くし立てた。

「……キヴィ。僕、迷ってなんかないよ。」

ラジウはわかってしまった。キヴィがどうして自分を止めたのかを。彼女は今までの話を聞いて、推し量ったのだ。ラジウ自身が、死を選択してしまうのではないかと。

「確かにね、サートの話や魔物の話を聞いたときは本気で悩んだよ？どうしようって。でも、僕は自分から死のうなんて思わない。ううん。僕は死なない。」

ラジウはにつと口の両端を上げ笑ってみせた。キヴィは、目を白黒させてラジウを見た後、ちらりとサートを見た。ラジウとは裏腹に複雑な表情のサート。

「サート。ごめんね。僕は自分からは死なない。だって、サート、僕が死んだら嫌でしょ？」

「……ラジウ様。」

ラジウは笑顔をサートに向けた。サートは、未だに言葉が見つからず名を呼ぶだけ。それに応えるようにラジウの顔が真剣な顔つきに戻った。

「僕、サートに自分の死を背負わせるなんて絶対嫌だよ。でもね、きつと僕が死ななきゃ本当にサートは助けられないと思うんだ。だからさ、サート。僕らの命運は運任せにしようじゃないか。どっちが死んでも恨みつこなし！」

ビシッとサートに人差し指を突きつけてから、ラジウは再び笑む。指差されほんの少し啞然としたサートだが、ラジウの笑みに釣られるかのように彼も笑んだ。

「はい！ラジウ様！」

サートは助けたいけど、サートに自分の死を背負って欲しくはなかった。その矛盾を解決することなんてできない。だから、ラジウは成り行きに任せてみることにしたのだ。

「あ、でも。サートも死ぬなんて思うなよ！生きてたら他の方法探せるんだしさ！」

「もちろんですよ！」

意気巻いている二人に、キヴィはため息をついた。

「ちょっとお待ちよ、あんた達そろいも揃って行く気なのかい？」

『もちろん！！』

嫌そうに言ったにも関わらず、帰ってきたのは元気に揃った声。キヴィは頭を抱えた。

「キヴィ、お願いだよ！僕、父上の身体を取り返したいんだ！」

ラジウは未だに納得のいかない彼女に身を乗り出して自分の目的を話す。

「身体？」

「そうでしたか、それならわたくしがお供します。ホーデュ様の身体はホーマイ国に収められております。このままではきっと魔物の手にホーデュ様の身体も……取り返さなくては。」

キヴィの言葉よりも先に、クレクが身を乗り出して深々とラジウに向かつて礼をした。こうなっては仕方ない。現保護者のクレクがそこまで言うのなら、キヴィにはこれ以上口を挟むことができないのだ。

クレクの鋭い視線が一時キヴィに向けられたことから、キヴィはそれを理解していた。

「ガキ共は残して行くんだろう？」

今までのことを気にも留めないように、シルキアが平然とキヴィに聞く。

「ああ、もちろん。本当はクレクに留守番頼もつかと思ったんだけどね……あの調子じゃ無理そうだし……。」

既に馬の準備をしているクレクに目をやって、肩を竦めるキヴィ。長い付き合いの中で、シルキアは彼女が言いたいことがわかっていった。そのせいか無表情な顔の額に皺が寄っていく。

「シルキア、後よろしく！」

「ふん。」

予想通りの言葉に、シルキアは鼻を鳴らして答えただけだった。しかし、顔はいささか不満そうである。

「仕方ないだろう？あたしや医者として行かなきゃなんないんだから。」

「わかってる。とつと行け。馬は一頭しかないぞ。」

呆れ顔で言う自分をうつとうしそくに手を振り、追い払うシルキアの行動に、キヴィは少し膨れっ面をしてあっかんべーをした。シルキアは再びそれにふんつと鼻を鳴らすのだった。

「サート、行くよ！」

ラジウとクレクが馬に乗っているのを確認して、キヴィは走り出した。途中、ぼーっと突っ立っているサートに気付き、足は止めずに声だけかけるしまつ。

「あ、はいっ！」

慌ててサートはキヴィを追いかけた。ラジウとクレクもすぐに馬で彼女達を追う。

「ふん。城に入るぞ。広間で待つ。」

残った子供にそれだけ告げると、見送りもほどほどにシルキアは城

へと消えていった。子供達もそれに続く。ただ一人を除いては。

第三章　失うもの（8）

馬が森の中を駆けていく音が響く。

「ラジウ様、よくキヴィさんの問いに答えられましたね。」

背後に乗り、馬の手綱を握っているクレクが前方を注意しながら言った。ラジウは首だけ後ろに捻り、クレクの顔色を窺う。

「うん。本当はね、悩んでたんだ。」

そして、正直に言った。ここで彼に嘘をついたことで、それを彼が察しないわけがないからだ。それに、クレクには本当のことを言うてもいいと、ラジウは心のどこかで思っている。

「おや、じゃあ先程のは嘘だったのですか？」

「ううん。違うよ。僕ね、起きるまで悩んでたんだよ。でも、起きてなんでか知らないけど父上の日記が置いてあって……それ読んだらね。決心がついたんだ。」

「なんて……書いてあったのですか？」

クレクの声はいささか楽しそうで、少しおちよくっているのが嫌でもわかる。けれど、その裏には多少の本音が隠れていることをラジウは感じとっていた。だから、返答はごく真面目に返したのである。彼の返答に、これ以上ふざけてはいけないとクレクも考えたのだろう。今度は真剣にゆつくりと言葉を選んで問いをぶつけたのだった。

「父上のにつきには、父上の友達が命を犠牲にして助けてくれたことが書いてあったんだ……。父上は物凄く後悔したんだって。自分が死ねば良かったとか……。生きてく方が辛いときもあるんだな。って思ったよ。」

「そうですか。」

ラジウは顔を前に戻すと、真正面を見据えた。だんだんとホーマイ国の象徴である大きな城が形を成してきていた。それと同時に煙や赤い炎もちらりと姿を現す。

ラジウは一瞬口をぎゅっと硬く結んでから、ゆっくりと開いた。

「僕はさ、死ぬのも怖いから生きたいんだ。でもね、僕にはまだよくわかんないんだ……。生きたいけど、死んでも助けたい。どっちをとったらいいのかわからない……。ねえ、サートの命を助けられないかもしれないけど僕は生きたいって道を選んだ。間違ってると思う?。」

「……いえ。綺麗ごとだけを言う人間は嫌いですから。私はラジウ様のそういうわからないことをわからないと言えるところは好きですよ。」

自分に背中をむけているラジウの頭を、クレクは右手の手綱を離し優しく撫でる。ラジウの背中が小さく震えていたので、泣いたのではないかと少しクレクは思ったのだ。が、ラジウは泣いてはいなかった。なんとか自分の心を奮い立たせて真剣に正面を見据えていたのだ。

目の前にはもう、火の海が迫っている。

「クレク。もう、この話は後だ！今は父上の身体を取り戻す!!」

「はい!!」

ラジウが吼えると、それに応えるようにクレクは手綱をぎゅっと力強く握り、馬を走らせた。速く、はやく……。

そして、走っていくと緑を抜け、姿を現したのは炎の海だった。

クレクは一旦手綱を引き、馬を止める。馬が仰け反って前足を挙げ一鳴きした。

「な、なに……これ……。」

言葉がでない。目を見開きあたりを見回すラジウ。そこに転がっていたのは草やゴミなどではない。形を成さない肉片だった。黒いモノ、赤いモノ、赤黒いモノ。それらが人の肉片だといち早く気付いたのはクレク。慌ててラジウの目を両手で覆おうとしたが、ラジウにその手をはじかれてしまった。

「ラジウ様……。」

「これって……うつ……。」

ラジウは未だにそれが何かわからなかった。けれど、鼻には悪臭が訴えてきていた。それが、決して普段目にしないモノであると。

悪臭と視界に入る赤い血が訴えてきたものに、ラジウは思わず吐き気をもよおしてしまった。胃がひっくりかえるような気持ち悪さに、口を押さえて必死に耐える。

クレクは心配気にラジウを見やったが、ここまで来て退く性格ではないことを知っていたからだろう。無言で馬を再び走らせた。ラジウも何も言わずに馬にしがみついている。

ラジウたちが走り去って、しばらくするとその場に二つの影が現れ

た。

「はあはあ……うつ……こりゃあ、ひどいねっ。」

口元を押さえて悪態をつくのは、赤と黒の世界で城が際立って目立つ医者の子ヴィだった。しかし、彼女は慣れているのだろうか、一瞬足を止めただけでズカズカと肉片の中を歩き出す。

「き、キヴィさん……。」

その後ろを、なるべく他の場所を見ないようにキヴィの背中を凝視しながらついてくるのはサート。

「なんだい、サート。正直、こんなところで会話なんてしたくないんだけどねえ。」

不機嫌に言うキヴィ。それはもちろん、しゃべると悪臭と空気に混じった鉄の味がするからに他ならない。しかも、先へ進めば進むほど熱さに喉がやられてしまいそうだ。

「あの……足元に転がってるのはなんなんですか……？」

「ああ？そりゃあ、人の死体に決まってるんだろ。」

「えっ？？」

サートの質問にあっさりとは返答するキヴィ。さもそれが当たり前だとも言うつかのように、口調は冷たい。しかし、内容にサートは聞き返すしかなかった。

「さて、そんなことより。サート、あんたはあっちへ行つて街の人を城へ導きな。あたしゃ、こっちで怪我人の手当てすっかね。」

キヴィは、サートの呻きに誓い聞き返しをさらりとスルーするし、指示を与えた。あつちと言つて指差した方向は、まだ炎がなく建物がズラリと並んでいた。人がひしめき合つて押しつ押しされつの状態が遠くの通りに見える。瓦礫がところどころ転がっているあたり、だいぶ破壊されているようだ。

「え、でもっ。」

正直な話し、サートはここで一人になるのは嫌だった。普段目にするはずのない光景。異臭。悲鳴が自分の感覚を麻痺させて行くのがよくわかつていたから。

しかし、キヴィも自分のことで手一杯で人にかまっていられないのだろう。サートの言葉を無視してさっさと歩いていってしまう。彼女は死体の中を気にも留めない様子で進んでいく。けれど、サートはそこで踏みとどまつてしまったのだ。死体の上を歩くことが……彼にはできなかったのだ。

だから、サートはくりりとキヴィに背を向ける。仕方がない。進めないのだから。今は自分ができることをしよう。そう自分に言い聞かせ、サートは歩み出すのであった。

そこで二人は結局別れてしまう形になった。キヴィは死体の中に生きた人間を捜しに。サートは、街の方へ人に声をかけに。

そして、キヴィは、後ろが気になりながらも振り返ることなく先へと進んだ。振り返ってしまえば、更に後ろ髪を引かれてしまうことが目に見えていたからだ。

「おや、あんたは生きてるね。大丈夫かい？」

しばらく歩き、人の死体が形をとどめている一角へとキヴィは足を踏み入れた。その中で、腕が動いたのをみつけ駆け寄る。なんとか引きずり出したが、相手は返事もできないほど弱っていた。仕方無しにキヴィは手当てを施す。

ガッ

鋭く刺さった音と共に、キヴィの顔の横に棒が姿を現した。棒が槍であるということにすぐさまキヴィは気付き、ぱつと振り返る。そこで目を見開いてキヴィは固まってしまった。

馬に乗り逆光で影を落としている人物が、キヴィを見下ろして立っている。その影にキヴィは見覚えがあった。だんだんと目が慣れていくことで人の全容が明らかになっていく。

まずはつきりとしたのは金色の鎧だった。胸から腰にかけていささか尖ったデザインでへその部分と胸元は開いている鎧を身につけていた。豊満な胸と、短いスカートをたなびかせていることから、相手が女性だと言う事が窺える。また、首、腕、肩には胴と同じ素材の飾りをつけ、マントを肩の飾りで留めていた。

そして、顔もだんだんと形を成す。鋭い瞳に、キリっとした眉。銀色になびく髪は頭上で一つに縛られていた。

「ねえ……さん。」

キヴィが目を見開いたままそう呟いた。彼女の目は不安と戸惑いが色濃く現れ、自分を見下げている女性を凝視している。

よく見知った顔。しかし、傍から見れば彼女達は丁度同い年ぐらいにしか見えなかった。艶のある肌、さらさらの髪の毛はまだ若々しさを物語っている。

「……。」

女は黙ったまま武器を引き抜き、まるでキヴィが見えてないとも言つかのように無言で馬の手綱を引き、踵を返した。

キヴィの背後でうつという呻き声が聞こえたと同時に、彼女の白い白衣に赤い点々が彩られる。キヴィが姉さんと呼んだ女は、ただ生き残りを殺しに來ただけに過ぎないのだ。だから、敵かもわからないキヴィのことなど眼中になかったことが、今やつとキヴィは理解した。

苦虫を潰したような感覚にキヴィは強く噛み締めるしかなかった。そして、しばらく彼女の後ろ姿を見送り、頭の混乱を整えることに時間を費やす。

一方、別れたサートはまだ形のある街へと足を踏み入れていた。崩れた家の瓦礫や、燃えさかる炎が行くてを遮っている。しかも、人々は混乱しているためか道を同じ方向へと押しながら走行していた。

サートはできるだけ大きな声で「丘の上の城へ！」と声を掛けるが、叫び声などでかき消され、人に伝わっているのかも定かではない。

「皆っ！そんな押し合ったら怪我人……あっ！」

叫ぶ中で、目に入ってきたものに一瞬体内からガクンと揺さぶられ、サートは膝をついてしまう。けれど、目はそれを離せない。

初めはただの炎かと思った。だが、それは見えているうちに形を成していく。その形の形成をサートは見たことがあった。それは炎ではなかった。まして今形作っている形とはあまりにも違っているが……。しかし、頭では警告を放っていた。

炎は人型へと形を完成させた。すらりとした身体だが、どこが幼さが残る等身と大きな瞳。けれど、少し釣りあがった目は意思の強さ

が読み取れる。髪の毛は逆立ち、全身はどこどころ炎が浮いていたり身体と混じっていたりする。

「よう、水の。」

そして、にっと笑いサートに話しかけてきたのだ。サートは確信した。彼が炎の精霊なのだと。そして、水というのは自分の身体の中にいる水の精霊のことなのだと理解した。なにせ、さっきから心臓の鼓動が大きく早くなって彼に対し反応を示しているのだから気付かない方がどうかしているだろう。

「お前、いつまでそんな中で鳴りを潜めてやがる？」

「……っ！」

身体を体内から再び揺さぶられるような感覚に、気持ち悪さを覚えて、サートは懸命に足に力を入れて立ち上がると走り出した。一分一秒もこんなところに居たくない。これ以上いたら何かが終わってしまう。その恐怖に駆られていたからだ。

必死に走って、あたりがふと暗くなったことでサートは足を止めた。そこはどこか食料でも入れておくであろう倉庫の役割を成したテナだった。

それほど大きくない空間に、サートは一人佇み。ふと、自分の手を見た時。

サートはもう諦めてしまった。

第三章　失うもの（9）

「……そんなっ……。」

ぽつりと呟く台詞にも覇気がない。

サートの手からは、既に無数の透明な液体が触覚のように手の皮を破って顔を覗かせていた。それが何を意味するのか、言うまでもなく理解できるだろう。

サートは天井を見上げて、声を上げながら笑った。いや、笑うしかなかった。ただ空しくテントに笑い声が響きわたる。

憎むがいい

頭に直接高い声が話しかけてくる。サートが「誰を？」と頭の中で返すと、声は答えた。

あのラジウとかいう小僧を。憎めばいい。

「なぜ？」

あいつが死ねば、お前は生きられた。

「……。」

あいつのせいだ。あいつのせいでお前は死ぬのさ。

「違う。」

サートは目を瞑って頭の中の声を聞いていた。そして、今度は口に

出して否定の言葉を発する。

「違うよ。オレが弱かったんだ。不安で押しつぶされてっ……お前になんか負けたからっ。」

サートの目から涙が零れ落ちる。それは、決してラジウを恨む涙ではない。自分の不甲斐なさに出てきた涙だった。止める気も止めることもできずに涙は次から次へと溢れ出ていく。

な、何を言う？あの小僧を憎めっ！憎むのだっ！

「そんなことっ……しない。オレはここでお前を道連れに逝ってやる。知っているんだ。精霊は復活する際、食らった者の性格、感情を反映すると……だから、ラジウ様を恨むお前なんかっ！」

サートは目を見開いた。既に身体の半分は透明な物に支配されていた。しかし、不思議と痛みはなかった。

な、何を言うっ。我は復活するのだ。貴様が一人孤独に死ぬだけ……

「一人じゃないよ……。」

サートはそう言うてにつこりと笑ってみせた。笑みを浮かべたその先にいたのはサートと同じように半ば半透明になりかけている一人の少女。

「やっと、見つけた……お兄ちゃん。」

「ノメル……。」

ノメルをぎゅっと抱きしめて、サートは笑った。先ほどの一人でいる時よりも落ち着いて、そして暖かい何かを感じていた。ノメルが、自分と同じように精霊の水を飲んでしまったことは知っていた。だから、助けたいと思っていた。けれど、サートとノメルの心は精霊を通して否応無しに影響を受けていた。人一倍怖がりなノメルの感情が流れてくると、サートも不安が頭をもたげたりもした。けれど、今は逆にサートの気持ちにノメルに伝わっていた。彼女が優しく自分を抱きしめ返してくれる。

『二人一緒なら怖くない。』

や、やめろっ……。

「お兄ちゃん、最後は一緒にいこうって言った……よね？」

につこりと笑うノメル。それにサートは頷いて笑い返し、再び彼女を抱きしめた。暖かい雰囲気グテンツを支配したが、すぐさまその場には誰もいなくなった。

半透明の液体に飲まれ、サートもノメルも姿を消し、残ったのは彼等の服と半透明の液体。

「……。」

半透明の液体は形を成してから無言のままゆっくりとテントを出た。

「よう。戻ったのか、水の。」

「ええ、迷惑をかけました。」

外で待っていた炎の精霊に、水の精霊はこくと頷くだけで足の進みを止めはしない。声は前ほどの綺麗さはなく、少し低めの声をしていた。それを不思議に思っただけで炎の精霊は首を傾げながら宙をすつと移動し水の精霊について行く。

「どこ行くんだ？自分を倒した奴でも殺しに？」

「家に帰るだけです。私は平穩に生きて行きますので。」

水の精霊の返答に豆鉄砲でも食らったかのように驚きの表情を見せる炎。水はにつこりと優しい笑みを浮かべて、形を変形させるとその場から姿を消してしまった。

「をいをい。だいぶ純粹なのに取り付いちまったんだな。あいつ。今後は戦力になりやあしねえな……まあ、いいか。俺様が戦えばいいだけだしな。」

頭をボリボリと掻いて呆れた口調だったが、すぐに気を取り直してにつと笑い炎の精霊もさつと風に吹かれて姿を消すのだった。その場に残っているのは古びたテントと瓦礫の山だけだった。

第三章　失うもの（10）

「誰もいないねっ！」

城に到着して大声を上げるラジウの口を、クレクは慌てて塞いだ。そして、辺りをキョロキョロと見回して誰もいないのを確認している。

ラジウはバリッと無理矢理クレクの腕をはがしてさっさと城内へと足を進めた。仕方なくクレクは手を押さえながらそれを追う。

「……にしても、何で誰もいないんだ？」

やはり声を気にすることなく、自分の言いたいことを言うラジウ。とめても無駄だと判断したのだろう、クレクは苦笑うだけで今度は何もしなかった。そして、彼の返答に答えるべく口を開く。

「逃げたのでしょうか。魔物がまず攻め落とすならこの拠点となる城でしょうから。気をつけてくださいね？まだ魔物がそこら辺をうろついているかもしれませんか。」

「わ、わかった。」

神妙な顔で口元に指を押し当てながら話すクレクにラジウもようやと危機感を持った様子で、声を殺して頷くのであった。そして、あたりをキョロキョロと見回すが、やはり他に影は無い。

「さあ、まず目指すは王の間。そこにホーデユ様の亡骸が……置いてあるはずです。」

立ち止まっているラジウに対し、今度は逆にクレクがスタスタと先へ進んでしまう。それに慌てて追いかけるが、大人の足の幅で早足ともなればラジウは走る他無かった。

二つの足音が城内に響く。廊下を進み、突き当たるそこは目指す”王の間”。

二人は口を閉じ、沈黙を守ったまま間へと足を踏み入れた。広く開かれたその中央に、前には王の……ラジウの父の椅子があつた場所に、一つの棺桶が祭られていた。

「あつたー!!」

棺桶に目が行くと、すぐさま歓喜の声を上げるラジウ。声はかなり大きく、開かれたホールに響き渡ってしまう。木霊する声を気にすることもせず、ラジウは喜びのあまり駆け出した。棺桶に向かつて。

「ラジウ様！」

それと同時にクレクが叫ぶ。棺桶の後ろに黒い影が見えたのだ。案の定、黒い影はラジウが棺桶に近づくとすばやく動き、彼の体めがけて襲い掛かる。クレクは慌ててラジウの体に腕を伸ばし、自分の方へと引き寄せた。ラジウが小さな声をあげつつバランスを崩したため、クレクも後方に引つ張られて座り込むような形になってしまった。

「ちっ。」

影は舌打ちすると空ぶつた空間を通り過ぎ、ラジウの目の前に着地した。

「あつ。」

ラジウは小さな声を上げた。目の前に下りた影はマントがなびき、姿を表す。それは、まさしくラジウと見まごう金髪の少年だった。少し違うというならば、彼はどこか雰囲気サートと似ているくらいだろう。ラジウがおもむろに立ち上がると、背丈も一緒に服が同じならばだいたい的人物は見分けられないだろう。

「ラジウ様……？」

クレクが目の中の人物を見てポツリと呟く。ラジウは自分の腕の中にいるのだから違うとはわかっていても、その容姿があまりにも似ていたために頭が混乱し、口をついてしまったのだろう。

「ふざつけるなっ！」

しかし、その一言に目の前の人物は肩を怒らせて怒鳴り散らした。今にも血管がはち切れんばかりに青筋を立て、拳を震わせながらクレクを睨みつける様は、どこか怯えているように見える。

ラジウはぼかんと口を開いたまま目の前の人物を凝視していて、すぐに話したせる状態ではなかった。

「お前のせいで、私はっ！！」

先程は怒鳴っていたせいか声質がわからなかったが、裏返ったような甲高い声が耳をつく。それと同時に目の前の彼の目からぼろぼろと小さな雫が零れ落ち、ぎゅっと口を結ぶ音がした。子供特有の高い声……と言えなくもなかったが、それはラジウよりも少し高い声で、女性のものだとクレクも気が付く。

「……あ、あの。落ち着いてください。貴方はいったい……？」

相手が今にもまた掴みかかって来そうな勢いだったので、クレクは慌てて起き上がり静止するように掌を相手の前へと突き出した。そして、もう片方の手でラジウを助け起こしながら、視線で目の前の彼女をじつと凝視する。

やはり、見た目はどこをどうとつてもラジウに見える。けれど、それは怒っている顔が似ているだけということに他ならなかった。涙を流して少し弱気になった彼女はラジウよりも弱い。時折ひつくとしゃくりあげる声がクレク達の耳に届く。

「ふざけるなっ！ 私に影武者をやらせたんだろ！？ お前がラジウだってわかってるんだっ！！」

クレクの言葉に逆上を示す彼女。彼女の台詞にクレクは思わず額を掌で押さえた。彼はわかったのだ。噂で聞いた”ラジウが白に戻った”という話しの真相が彼女であることに。これだけそっくりならば誰も信じて疑わないだろう。ラジウが戻ってきたのだと。ましてラジウと付き合えない国民なら尚更疑うこともしないであろうことが用意に想像が付き、クレクは深いため息を吐いた。

「……はい、こちらはラジウ様ですが。私達が貴方に影武者をやらせたわけではございません。私達は本当にここから出て行っただけです。その後に関しては何も関与しておりません。今は丘の上の城へと拠点を置いておりますが……つかのことお伺いいたしますが、貴方は誰なのですか？ どうやってここに？」

聞きたいことはたくさんあった。しかし、相手の興奮状態を見ればすぐさま答えを聞けないことぐらいクレクにも予想ができる。けれど、聞くしかなかった。聞かなければ何も状況がわからないからだ。クレクの落ち着いた様に、彼女も少し落ち着いた様子で息を吐き、

涙を拭った。

「……私は、リュウキ。ホーデユ・マイナーの子供の一人さ。どうやってなんてわかってんだろ？あいつのバカな性癖しってて、子供全員知ってる奴なんかほとんどいないんだからさ！」

「ああ。」

彼女……リュウキの返答にクレクは小さな声を漏らして頷いた。所謂お偉いさんと呼ばれるホーデユに仕える人のことを指しているのだとわかったから。ラジウがいなくなれば国が混乱する。それをとめるための手立てとしてこの子を利用した。それだけに過ぎないのだろうと、クレクは思ってた頭を垂れる。申し訳ない。その気持ちでいっぱいだった。

「ちょ、ちょっと待って！？ってことは君サートやノメルと一緒にすること！？」

「な、なんであんたがサート兄やノメルのこと知ってるのさ！？」

はっと我に返ったラジウが慌てた口調で問いかける。リュウキもまた驚いたのだろう、目を見開いてラジウの顔を凝視している。

「知ってるも何もっ！」

ラジウが慌てて説明しようとする口を、クレクは塞いだ。そして、相手の目をじっと見つめると、何もしゃべってはいけない。自分がしゃべると、ラジウを目で制す。ラジウは彼の目を見ると開いたままの口をそっと閉じ、了承の意を示した。

「サートさんもノメルさんも、ラジウ様に付いてきてくださいました。ですから、お城の方でラジウ様と仲良くしていただいて今に至るわけです。彼らは元気しておりますよ。如何ですか？貴方も一緒に来ては……。」

緩やかな笑みを浮かべて、相手の安堵を誘うような優しい口調でクレクは問う。その口調に落ち着いたらしく、リュウキは黙ってクレクの話の聞いていている。一瞬頷こうとする仕草が見られたが、意識的にとめたのだろう一瞬からだが強張ってそのまま半分頷きかけた形で止まってから、すぐに顔を上げてしまった。戸惑っている……彼女の行動を見てクレクはそう思った。

「……来れない理由が……おありですか？」

静かに、相手を煽らないように言葉を慎重に選びながらクレクはリュウキをまっすぐに見つめた。ラジウと似た勝気な青い瞳が彼の視線とぶつかる。

「私はっ……サート兄やノメルに会いたい。いつまでも……こんなところで一人なんて嫌だ……でも、でもっ！父さんの……父さんの体がっ。」

掌をぎゅっと握り締め、力の入れすぎでプルプルと小さく震える小さな手。心なしか肩も小さく震えている。必死になりすぎてリュウキの目の前が霞んだ……それが涙だと気付くのはクレクだけで、彼女の言葉に頭に血が上ったラジウには到底気付ける変化ではなかった。

「父上のっ!？」

一声上げると、ラジウはクレクがとめる間もなく走り出していた。祭られた棺桶に向かって……。

「ばっ！待て、お前！！」

「ラジウ様っ！いけませんっ！」

リュウキが目を見開いてラジウの姿を追う、クレクも手を伸ばして彼を止めようとしたがそれは空しくも宙を切った。ラジウは早いスピードですぐ祭壇に駆け上る。そして、何の躊躇もなく祭られている飾りを外し、棺桶の蓋へと手を伸ばした。

「うっわ！？」

ズルっという音とともに棺桶の蓋が開き後ろへと滑り落ちた。同時にラジウが悲鳴に近い驚いた叫びを上げ、身を引く。棺桶から、黒い影がゆらりと立ち上ったからだ。

クレクは走るよりも先に自分の獲物へと手を伸ばす。走って彼を棺桶から引き剥がす時間よりも、獲物を使って相手を倒すほうが早いと判断したからだ。すぐさま弦を引き、矢をセットして目標へと向けた。

黒い影は大きく立ち上ったかと思うと急に留まり、ラジウへとゆっくり近づく。ラジウは固まったままそれを凝視した。そしてラジウは見た。自分と同じ二つの蒼眼を。暗い中に光を放って自分を凝視している眼……それが誰のものか、ラジウは直感的にわかっていった。ラジウが固まっている間に、クレクは狙いを定めて溜めもなく弓矢を放った。ラジウの頬の横をビュッと風が切って矢が黒い影を突き抜ける。黒い影が歪み、一瞬白い牙のようなものがラジウの目の前に現れて、ラジウは思わず一歩後ろに下がってしまったた。

「っ！？」

すぐ後ろの階段に足を取られて、ラジウは勢い良く2、3段階段を落ちてしまふ。痛さに身動きが取れないラジウにクレクが駆け寄った。

「いったあ……。」

頭を押さえて、痛みに耐えるもすぐさま先程の光景が脳裏に蘇ってラジウはバツと祭壇を見上げた。しかし、そこにあるのは蓋の開いた祭壇だけ。黒い影はどこにも見当たらない。辺りを見回してどこかにあれがないかとラジウは探す。けれど、やはり黒い影はどこにも見当たらなかった。

「……父上……。」

ラジウは寂しそうに瞳を揺らした。しかし、泣きはしなかった。クレクが声をかけようかどうしようか迷っている間にずっとラジウは立ち上がった。そして、ゆつくりと祭壇を登って棺桶を覗き込む。クレクもリュウキも今度はとめる声は出さずに固唾を呑んで彼を見守った。

ラジウはゆつくりと首を横に振った。彼の動作を見てリュウキは両手で口元を押さえ小さく呻いた。クレクもラジウから顔を逸らして視線を床に落とし、小さくため息を吐いた。

「……父上は。どこに行つたの？」

棺桶の中はもぬけの殻。何も入っていない空の箱の中身をじつと見つめ、ラジウはポツリと呟いた。頬を我慢しきれなくなった涙が流れる。

「そ、そんなつ……それじゃあ私は何のためにここです。」

小さな振るえる声をラジウの耳が捕らえた。暗い沈黙が辺りに走る。ラジウはぐつと片腕で自分の涙を拭いた。自分はここで泣いている場合じゃないと、自分を奮い立たせてラジウはきゅつと口を結んだ。

「帰ろう。クレク……それに……僕の兄弟。サートやノメルに会いに行こうよ。きっと二人とも喜ぶからさ。」

クルつと方向転換をして二人の方へ向き直ると、ラジウは笑顔を浮かべて言った。そして祭壇を降り、手を二人に向けて差し出す。クレクは頷いてすぐさま彼の手を取った。けれど、リュウキは戸惑って目を見開いたままラジウを凝視している。

「いこう、リュウキ。ここに父上はいない……いないんだからさ。」

ラジウは彼女の手をとってぎゅつと握る。笑ったつもりだったが、その表情はどこか寂しそうで苦笑してるみたいだった。リュウキは下唇をぎゅつと噛んで眼から雫をポロポロと零して……何も言わずにラジウの手をぎゅつと握り返した。また、頭を落としてひつくとすすり泣く声を出す。

クレクはラジウの手を引つ張った。彼がリュウキに何か言いかけてやめたのを見て、戸惑っていることを知ったから。今は何も言わずに全員で城に帰るのが一番だと考えての行動だ。

ラジウはクレクに促されるまま歩き出す。すると必然的にリュウキの手が引つ張られ、彼女も共に歩き出した。誰も何も言わずに彼ら三人は静かに城へと向かう。

仲間がいると信じているその場所へ、何も知らずに進んでいく。

第三章　失うもの（11）

城で待つシルキアは胸騒ぎを覚えていた。彼は、城の入り口から少しは慣れたところに積み上げられている木箱の一つに腰を下ろし、足を組んで手に持っている赤いリングを眺めていた。

ただ、ひたすら誰かが帰ってくるのを待つ。もしくは敵が攻めて来るのを神経を張り巡らせて警戒していなくてはならない。心底疲れる役割だと、シルキアはため息を吐いてぼやいた。

「……誰か、死んだな。」

なんとなくの感覚でシルキアは天井を仰いだ。胸元にズンと来る感覚。それが今までの経験から誰かの死を自分が感じ取っているのだと十分理解していた。きつと、今回も誰かが死んだ。そう思うとまた深いため息が出た。

ボタン！！

いきなりの扉の開閉音にシルキアはリングを地面に投げ捨て、腰に刺している短剣の手をかけすぐさま仕掛けられるよう扉方向に身体を向けた。相手を見るとシルキアは手に力を込めて相手の前に躍り出る。そして息の根を止めようと短剣を相手の首に滑らせる。

相手の首元がスパッという音と共に切れる。が、すぐに何事もなかったかのようにその喉は元に戻ってしまう。ちつと小さく舌打ちすると、シルキアは床を蹴って後ろに跳び、相手との距離を保った。

「シルキア……さん。」

それが自分の名前を呼ぶのでシルキアはぎょつとし、身体を強張らせた。まじまじと相手を見る。しかし、どう見てもそれは前に戦った水の精霊の姿で、シルキアは名前を呼ばれる謂れなど毛頭なかった。

「……貴様なぜ、俺の名前を知っている？」

小さく。しかし多少怒気の孕んだ低い声で唸るように相手に問う。水の精霊は表情を変えずに口を開く。

「私は……サートとノメルの意を継ぐモノ。それと同時に地を守る精霊です。私は自分の家へと戻ってきた……ただそれだけです。」

淡々とした口調で少し苦笑う相手に、シルキアは眼を瞬いてから短剣を降ろした。意を継ぐもの。もちろんシルキアは精霊が取り込んだ者の性格と感情を受け継ぐことを知っていた。そのことをサートに教えたのはシルキアだったのだから。

「そうか。あいつ等が……お前は、どうするんだ。」

苦笑する相手の表情を見ると彼を思い出してシルキアの中にやるせない気持ちが入み上げて、ギリッと奥歯を噛み締めてしまう。水の精霊から思わず視線を逸らし、シルキアは質問を投げかけた。

「静かに暮らします。私の湖があるこの地を守りながら。けれど、貴方達の戦いに巻き込まれるつもりはありませんので悪しからず……それがノメルが望んだこと。ノメルを思っサートが望んだこと。決して戦いはしません。」

水の精霊は優しく頬を緩めて笑いかけた。幸せそうに……シルキアの喉の奥がぐつと閉まってしょっぱさが広がる。苦しかった。何よりも戦いを望まない子供さえ巻き込んで、見殺しにして、結果助けられたのは自分達の方だった。水の精霊の恐怖から解き放ってくれたのは他でもない死んだ彼ら。悔しくて、シルキアは爪が食い込むほど自分の手をぎゅつと握り込んだ。

「悪かったな……。」

ただ、その一言だけが言えた。搾り出すような声だったが、水の精霊はゆつくりと頭を垂れてお辞儀をするとそのままずっと姿を消してしまった。湖へと帰ったのだろう。

シルキアは後味の悪さを噛み締めて、ただそこに立ち尽くすしかなかった。しばらくして全員が帰ってくるまで……。

初めに帰ってきたのは、ラジウとクレク。そして見知らぬ子供だった。クレクが馬を引き、子供二人が馬に乗って城へと帰ってきたのだ。

「……誰だ？」

場内へと足を踏み入れた三人に視線を送ると、シルキアは静かに声を出した。いつもと変わらぬ感情が読めない無機質な声色で。

「ただいま！シルキアー！へへ、俺の兄弟だよ！」

誰もいない場所をただひたすら馬に乗ってきたラジウは、今朝あった顔でもえらく久しぶりに感じてペアッと顔を輝くと嬉しそうに相手へ駆け寄った。そして、後ろにいる自分と似ている彼女を指差して相手へと紹介する。

しかし、彼女は不満そうにぶいっとそっぽを向くだけで、挨拶をし

ようとはしなかった。

「また……お前の兄弟か。」

複雑そうにシルキアは相手を見た。ラジウとそっくりの顔をしている子供に眉を顰めるも何も言わない。

「なあ、サート兄とノメルは？」

シルキアの視線にちらつと視線を返してから場内を見回してリュウキは気になることを単刀直入に言う。見当たらない探し人に不安を隠せないように、組んだ手の先でトントンと自分の腕を小刻みに叩いている。

「あれえ？まだ帰ってきてないのかな？ねー、シルキアー！サートはー？」

「……………」

ラジウも首を傾げて留守番をしていた相手に聞く。しかし、シルキアは言葉に詰まった。何を相手に言っているのか……それを迷って口を一回開けては閉じてしまう。

ガタっ！

クレクが不思議に思って問いただそうとした時、後ろで物音が聞こえた。びっくりして四人は一斉にそちらに向かって振り返る。見た場所に居たの顔を蒼白にした女性。青緑色した髪と瞳が印象的

で、それだけが存在を主張している。

「キヴィー!？」

ラジウが彼女の名前を呼んで駆け寄る。心配そうに相手の肩に手を添えて顔を覗き込む。焦点の定まらない眼に冷や汗を大量に掻いている彼女は、普通とは言えない。

「……どうした？」

異様に流石にシルキアも心配そうに眉を顰める。そして、ゆっくりと彼女に近づいた。すると、キヴィはシルキアの声に判のして顔を挙げ、彼を見上げた。揺らめく青緑色の瞳。何か恐怖を訴えかけている、が、今は聞かない方がいいと、シルキアは感じていた。決して話しはしないと彼女の口元が強く掬ばれていたから。

「ラジウ、そいつなら大丈夫だ。放っておけ。それより、サートとノメルのことについて話してやる。」

ふんつと小さく鼻を鳴らすとシルキアはラジウの腕を取って自分の方へ引き寄せ、そのまま引き鶴形でキヴィから彼を離れた。安堵のため息がシルキアの耳を霞め、何するんだよ!？と喚く声でそれが掻き消された。

「あ、あんた。サート兄とノメルのこと知ってるのか!？」

シルキアの言葉に食いついたのはリュウキだった。真剣な眼差しで彼を見、話しの続きを聞きたそうにしている。シルキアはラジウとリュウキ、クレクを順に見ると口を開いた。

「奴等は死んだ。」

ただその一言だけを明確に、はっきりとした口調でシルキアは伝えた。場内にシルキアの声が木霊する。ラジウもクレクもリュウキも……そして青い顔をしていたキヴィも黙ったまま口を開けて呆然しまう。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！サートは私とさっき別れて……それで人の誘導しに行ったんだ。だからまだ戻ってないだけでっ！」

口を開いたのはキヴィで、驚きのあまり早口で捲し立てる。信じたことはない。拳を握って必死にシルキアに嘘だといって欲しいと……真剣に視線をぶつける。しかし、シルキアは首を横に振った。

「……さっき、水の精霊がここに来た。要するに復活したということだ。この意味がわかる……はずだ。」

シルキアは静かに感情の籠っていない声で説明する。それがひどく冗談みたいで、ラジウは首を横に振って否定した。けれど、それが事実なのはシルキアの沈痛な面持ちを見れば明らかで……喉の奥がつかえて、叫びたいのにラジウは声を失ったように立ち尽くす。

「……とうとう。食われてしまったのですか。サートさん。」

「ちょっと、どういうことっ!？」

クレクだけは落ち着いて、シルキアの言葉を理解していた。しかし、その落ち着きにリュウキが突っかかる。相手の胸倉を掴んで、必死に見上げ訴えかけてきた。彼女の手をやりわりと自分の手で押さえ、

クレクは口を開く。

「残念ですがリュウキさん。サートさんは水の精霊にとり憑かれておりまして……もう助かる見込みがなかったのです。今回の戦場で気が高ぶったせいでしょう……水の精霊がサートさんを取り込んでしまったようです。サートさんはもうこの世には……。」

残念そうに言うが、やはり落ち着いた声色のクレクにリュウキは愕然とした。胸倉を掴んでた手が緩み、下へと落ちていく。けれど、胸の中の怒りはだんだんと燦り、拳を作った手はブルブルと震えを見せていた。

「サートが……じゃ、じゃあノメルは？」

ラジウは立ち眩みがしたものの、なんとかその場に踏みとどまってシルキアに視線をぶつけた。彼は奴等と言った。奴等と言うことはノメルも……？ だけどなんで？ そんな疑問がラジウの頭で幾度も回る。

「言っただけだ。奴等。と。ノメルも、水の精霊に侵されていたらしいな。二人とも食われて死んだ……そういうことだ。」

「そんなっ……。」

シルキアの返答に小さく悲鳴に近い声を上げたのはキヴィだった。小さく気が付かなかった……と悲愴に呟く声が静かなホールでは皆の耳に届いた。気が付かなかったことに關してはシルキアもクレクも、ラジウでさえ同じことだった。誰一人彼女が精霊に侵されていたことを知らなかったのだ。どれだけ彼女が苦しんだらうかと思うと、キヴィの胸はぎゅっと締め付けられる。せめて、気が付いて

あげれば良かったのにと、自分を責める。

「貴方のせいですよ、ラジウ様。」

沈黙した五人の間に、五人の誰のものでもない低い声が割って入る。割って入った声に聞き覚えがあるラジウは目を丸くして辺りを見回した。すぐに、自分の首筋に冷たいものが触れ、ビクッと身体を強張らせて固まる。クレクが名前を呼んだ気がするが、それよりもラジウは後ろの冷たい妖気に気が気ではなかった。

第三章　失うもの（12）

「貴方のせいですよ？ラジウ様。貴方があの子達を見殺しにした。貴方が死ねば助かったのに……あーあ……貴方は自分の命を優先したのですね。酷い人だ。」

冷たい手が首筋を撫で、顎を掴み振り返ることを許さない。背筋が凍ったように冷たい何かが走る。そして、静かな低い声と共に耳元に生暖かい風が触れ、左の方に揺らめく長い髪が視界に入った。責めるような口調に、ラジウの心臓は今にも飛び出しそうなくらい波打った。どうしよう、僕のせいだ、どうしよう。貴方の中でその二つの言葉が交互に出ては消え……混乱に未だに固まったまま動けないでいる。

「ラジウ様のせいではありません！今すぐラジウ様をお離しなさいっ……！」

先程まで落ち着いていたはずのクレクが声を荒げて相手を威嚇する。既に弓矢を構えてじりじりとラジウの方へ近づいてきている。いや、クレクだけじゃない。シルキアも自分の獲物を片手に持ち、いつでも攻撃できる態勢だ。キヴィでさえ立ち上がって眼をギラつかせて相手を睨みつけ警戒している。ただ一人リュウキだけはなんともいえない表情でその場に立ち尽くしている。

「ふふふ……離しては貴方方が攻撃するでしょう？人質……ですよ。武器を下ろしてくださいな。」

黒装束に身を包んだ男は見える部分の口だけを妖艶に歪ませて笑い、クレクとシルキアに要求した。ラジウの首筋には彼の鋭い爪が突き

つけられていて、脅しが嘘ではないことを示している。もし応じなければ簡単にラジウの喉元を掻っ切るだろう。クレクもシルキアも仕方なく武器を床へと捨てた。カランという音が場内に響く。

「よろしい……さあ、ラジウ様。お迎えにあがりましたよ？ 貴方の父の元へ……一緒に行かれませんか？これが最後の……本当に最後のお誘いになります。如何でしょうか？」

武器を捨てたのを見ると黒装束を纏った彼はラジウの頬に赤い舌を這わせて微笑を浮かべた。同時にラジウの背中にぞわつとした鳥肌が立って思わず相手を殴りそうになったが大人の力……いや、魔物の力には勝てずにそのまま腕を掴まれて動けなくされてしまう。魔物の顔がラジウを覗き込むが、やはり彼の顔はフードと髪に邪魔されてよくは見えない。代わりに相変わらずに鋭く尖った角が鮮やかに視界に入る。

「はっ……い、嫌だね。僕は絶対に行かない。行くもんかつ！」

相手の人間ではない風貌に、迷っていた心は吹き飛び寧ろ怒りを覚えたラジウはきっぱりと言い放った。そして相手をキッと睨みつける。返答を聞くと、彼はすぐにラジウを掴んでる手の力を抜いた。ラジウはすぐさま相手の懷から逃げるようにすり抜けて、自分の頬を手の甲で拭い魔物を睨みつけた。クレクとシルキアが彼を庇う様に魔物とラジウの間に割って入り拾った武器を構える。

「おやおや、怖いですね。大丈夫ですよ、私すぐ帰りますから。」

威嚇する二人のさつきを受け流しながら、両手を挙げて笑みを絶やさないう。すぐ帰ろうと足を一歩後ろに退いた。

「待つて！」

しかし、彼を止めた者がいた。彼を止めたのは彼女。今まで黙って事の成り行きを見守っていたリュウキだった。真剣な表情で彼女は彼を見る。彼も彼女の方へ身体を向けた。

「今の……今の話し本当なのか！？ラジウが、ラジウが死んでればサート兄やノメルが生きてられたってっ。見殺しにしたって本当なのか！？」

必死の問いかけに、魔物の口元が歪むのをラジウは見た。ひどく嫌な悪寒が背中を走る。否定するわけがない。彼が彼女の質問に否定するわけがない。そうするとどうなるか……ラジウは考えなくなかった。考えたくない最悪な結末が待っている。

「ええ……そうですよ。彼はその答えを知っていてなお、自分の命を優先させた。これがどういう意味かわかりますね？彼のせいで他二人が死んだのですよ。関係のないことに巻き込まれ、救いもされないお二方……可哀想でなりません。」

「……………っ。ラジウ……お前のせいでっ、お前のせいでサート兄とノメルはっ！」

誰もが予想したとおりのやり取りが眼下で行われた。みるみる顔を真っ赤にして怒りを露にするリュウキは矛先をラジウに向けた。殺意が伝わるほどの視線にラジウの胃の中にズンと何かが沈んだ。キモチワルイ。表現するならそれでしかない感情がぐるぐると胃の中で回る。

「俺はラジウ、お前を許さないっ！絶対に許さないっ！！」

彼女の強い意思に、希薄に、その場に居た魔物以外は蹴落とされてしまった。眼をギラギラと光らせ今にも食って掛かりそうな勢い、そして何よりも怒りと憎しみを孕んだ叫びに。反論しようにも何と反論していいのか……誰も言葉には出来なかった。

「ふふ、では貴方、私と行きますか？ 私達はこれから私達の味方以外を全て抹消します。ラジウ様ともそのうち相見えるかもしれないですね。」

顔を少し上にあげてラジウを見る魔物の目が始めてちらりと見えた。黒くて深いけれど細くて冷たい瞳に、ラジウは背中に冷たいものを投げ込まれた気分になり、胸元に手を当てぎゅっと服を握り締めた。

「行く！ 行かせて！」

リュウキは頷くと魔物に近づいた。魔物はそつと彼女に手を差し伸べる。彼女が彼の手を取るのを誰も止めはしなかった。いや、正しくは止められなかった。今の彼女に何を言ってもラジウへの怒りは収まらないだろう。本当にラジウは自分の命の方を選んだのだから……。

「ラジウ、お前を許さないっ！ いつか殺してやる……覚悟しとけ！」

リュウキはラジウを見据えたまま吐き捨てるように言い放った。ラジウの胸にその言葉のヤリが突き刺さる。更に強くラジウは自分の胸元の服を握り締めた。涙が今にもあふれ出そうだった。胃がひっくり返ったような、頭の後ろを鈍器で殴られたようなキモチ悪さと衝撃に立ち眩みがしそうだった。

「では、また会いましょうね。ラジウ様。それと他の皆さん。」

リュウキが手を取るのを確認すると、魔物はラジウ達に向き直り口元を歪ませて笑った。すると、リュウキと魔物の体がだんだんと足から消えていく。リュウキが完全に消えて背の高い魔物の顔だけが残るとき、再び魔物が口を開いた。

「ああ、そうでした。キヴィさん……あの方もこちらサイドです。会う日が楽しみですね？」

今まで固まっていたキヴィへ身体を向けると一言言つて魔物は姿を消した。キヴィは言葉にごくつと喉を鳴らし眼を見開いて消えた場所を見つめていた。

沈黙がやけに長く感じた。誰もがどう話を切り出しているのかわからないでいたせいかもしれない。

「……魔物との戦争か。」

口を開いたのは意外にもシルキアだった。武器をしまつと小さくポツリと呟き、最初に座っていた箱に近寄る。そして座ると足を組んで息を吐いた。疲れた……と言っているようだった。

「それは他の国に任せられないのですか……？ 私達は密かにここで暮らせば。」

「無理だよ、ホーデユ・マイナーが死んだんだ。太刀打ちできる輩がない。いつかはここもあいつ等と相見える日が来ちゃうよ。」

クレクの儚い希望を打ち砕いたのはキヴィで、更に空気が重くなる。大人三人は重い雰囲気の中で決さなければいけないことがあるのを

わかっていた。しかし、本当は三人とも認めたくはない。できれば平和に過ごしたいのだ。

「ねえ……僕。やっぱり死んだ方が良かった……のかな？」

未だに頭の中にぐるぐると色々なモノが回っているラジウは唐突に三人に聞いた。三人は目を丸くしてラジウを凝視する。

「そんなことあるわけじゃないですかっ！」

「ばっかだねえ、あんた。自分が決めたこと今更後悔するんじゃないよ。それに、今回は仕方ないだろ。お前が死んだらサートやノメルがその悲しみ背負うんだからね。そんなことさせる方が酷さ。」

クレクとキヴィはすぐさまラジウに励ましの言葉をかけた。しかし、シルキアはじっとラジウを見ている。ラジウも何も言わないシルキアを見つめた。

「……死にたいなら殺してやる。」

無表情な顔でシルキアは言い放った。真っ直ぐに見てくる漆黒の瞳、真剣そのものが伝わってくる。ラジウは躊躇った。こんなにも辛くて悲しくて、気持ち悪くて……いろんな感情に押しつぶされそうになって苦しい今を生きているよりは死んだ方がマシなんじゃないか？そういう気持ちが悪すぎる。

何かを言おうとラジウは口を開く。

「おーい、ラジウ様〜！ここに荷物運んでいいかい？」

しかし、すぐさま違う声に邪魔された。今日はよく話しの途中で人

が来る日だとラジウは一瞬思ったが口には出さず声の方へと振り返る。振り返った場所に居たのは知らない大柄の男。いや、他にもなんだかたくさん人がいる。男の人、女の人、子供、大人、老人、若者、いろんな人がいろんな物を持って場内へと足を踏み入れている最中だった。

それにラジウ、他三人も眼をパチクリさせて様子を伺っている。

「え？えつと……。」

「ねー、これはどこに置けばいいのー？昔みたいに一階は店でいいのかしら？」

反応にコマッてどもっていると、今度は別の女性から声をかけられる。多分それはラジウではなくキヴィに向けられたものだろう、彼女がキヴィに視線を送っている。そこでキヴィはあつと小さく声を出した。

「ああ、うん。好きにしとくれよ、特に何か決めてるわけじゃないんだからさ。」

そして女性に答えると軽く手を振って好きにしてくれと意思表示をした。三人の視線がキヴィに向けられる。

「忘れてたよ。あの子はね、怪我してた子で応急処置してから城に向かうよう伝えた子だよ。きっと他の人たちもサートの呼びかけや他の伝手でここを知ってやってきたんだろうね。ラジウ、あんたの城にさ。」

最後の言葉にラジウの無縁がドキンと高鳴った。ラジウは着々と作業が進められていく玄関を見やった。昔見た風景がだんだんと作ら

れていくのを見ると、心臓の音はどんどん大きくなっていく。

「ラジウ様！ここに呼んでくださってありがとうございます。もう街には魔物がたくさん居て帰れないので。」

目の前に青年が来てにつこり笑って礼を述べる。彼はどこかしら雰囲気サートに似ててラジウは更にドキっとした。今、ここに来ている人たちは家などもうない。ここが全てになるのだ。ラジウはようやくと理解した。

今此処で自分がいなくなつてはいけないと、ラジウは思った。頼りにされているからじゃない、昔と同じ風景がここにあるからじゃない、いや少しはそれもあるのだけれど……そうではなくて、生きてすることがラジウにはまだある。今ここに居る皆と同じで、生きてまだ何かができる。そしてしなくてはいけなことがある。

ラジウは青年に笑って見せてからシルキアに向き直った。

「シルキア！僕、まだ死なない。死にたくなんかないよっ！絶対父さんの遺体を取り戻すんだっ。そんでもって、できるなら皆を助きたい！」

それが、せめてものサートやノメルへの労い。自分がすべきことを、ホーデユ・マイナーに蒸すかである自分がすべきことをするのが彼らへの捧げ物。

「ふん……好きにしろ。」

シルキアは返答を聞くと立ち上がって階段へと歩く。疲れたから寝るみたいだね、とキヴィが呟いたのがラジウの耳に聞こえた。ラジウも欠伸をすると、同じように階段へと歩いた。

キヴィもクレクも同じように歩き出す。とりあえず今は休戦と行こ

うか。だって、魔物は言った。「いつか相見える」と。それが今でないことは、全員が分かっていた。だから、しばしの休戦……休んでたときに備えよう。

人が賑わうようになった城は、ようやくとラジウの城となったようだ。もちろん二人の大事な友達を失うという代償があつてのことだが……だが、失うものもあれば得るものがある。

今は何も考えずに……ラジウはただ眠る。これからの、まだまだ大きな試練に向けて。

第三章 失うもの 完

第四章　新たな仲間（１）

ゆったりとした時が流れた。ホーマイ国が崩れ去り、消え……魔物達の土地となったあの日から、もう一ヶ月という月日が流れていた。何事もなく過ごす日々……けれど、ホーマイ国は魔物が支配して今はもう近寄れる場所ではない。その代わりと言うかのようにラジウの城には人が増え、賑やかになっていった。城の一階は店が立ち並び、他の階は人が住む場所となっていた。決して国の中に居た全員がそこに住んでいるわけではない。本当にごく一部だ。しかし、それでも規模はだんだんと大きくなっていった。

人口が増えるにつれて、問題点も浮かび上がってきた。増える人口は一方的に一般市民が多く、戦ったことも戦う気もない人が全体の９割近くをしめていた。

そんな中、ラジウは廊下をバタバタと音を立てて駆けていた。目的の場所へと息を弾ませ到着すると目の前に呼び込んできた人物へと声をかける。

「シルキア！」

くり抜かれたような窓の縁に腰掛けて、外を眺めている彼がラジウの言葉によって振り向いた。が無造作に縛られている少し汚れた金髪が見えなくなり、代わりに鋭く細められた黒目が姿を現す。

言葉はなく、黙れという視線が返ってくるのはいつものことで、ラジウは臆することなくへらりと頬を緩ませて笑って見せた。それにシルキアは軽く息を吐き首を傾け彼を見つめ返す。

「ねえねえ、シルキアあ。今度さあ。君のとなのお隣の山賊連れてきてよー。」

ラジウは茶化すように、わざと間延びした子供っぽい口調で意地悪く言葉を放る。ここ最近毎日同じようなことを言われているシルキアにとって眉を顰める出来事に他ならない。

改めて自分が元山賊だったことを思い出すシルキアだが、この無口で人と関わらないような性格ではお隣さんと親しかつたはずがないのを、この子供はわからないのだろうかと苛立ちに駆られる。

「……………無理だ。」

一言。たったそれだけ静かに、声を押し殺すような低い声でシルキアは言い切った。もちろん、それだけで本当に無理なのだとラジウには伝るはずだとシルキアは確信している。長い付き合いではないが、もうシルキアが嘘をつかないことくらい十分わかっているはずだ。嘘を言うくらいなら一切何も言わずに黙り込む。そういうタイプなのだ。

「えー？」

だが、それでも納得して引き下がることがラジウにとって今はできなかった。城の当主として、少しでも戦える配下や部下が欲しいのが現実だ。戦えずしてはここを守ることはできないのだから。ここは、ラジウの城であり、すでに町と言っても過言ではない場所。彼の守るべき場所なのだ。

そのため、シルキアが無理だと何度言ったところで山賊や海賊、少しでも戦いを経験したことのある者を仲間に取り入れなくては仕方ないラジウは、やはり食い下がるしかない。

だから、無理を可能にして欲しいと唇を尖らせ不満そうな顔をすることでもう一度伝えてみた。

「……………無理だ。」

しかし、またもやきつぱりと言いつつシルキアに、ラジウは衝撃を受けて上がった肩をがっくんと落とした。そんなにはつきり言わなくてもいいじゃないか。と内心むかむかとした気持ちが入み上げてくる。

「なん、だよつ！同じ山賊なんだから話くらいしてきてくれたっていいじゃないかつ！！」

「……其処の奴らとの関係は一切無い。無理だ。」

怒り任せに怒鳴ってみても、シルキアは平然としたいつもの無表情で顔色一つ変えない。そして、現実を踏まえてやはりNOと言いつつてしまう。毎度毎度繰り返される否定の言葉に、自分の気持ちを汲んでもらえない切なさで怒りが込み上げてきて、ラジウは肩を怒らせた。

「んだよつ！もう、いいよ！僕一人で行って来るから！！」

怒りに任せてくると方向転換すると、ラジウは元来た道を駆け出し、シルキアの部屋から出て行ってしまった。その様子を目で追って見送り、身動き一つすらせずに止めないのは、驚きのせいだろうか。しばらく目を瞬いてそのままの体勢で彼が去って行ったドアをシルキアは見ていた。

「……俺の隣の山賊は……魔物だぞ……。」

時間が経ち、風が自分の頬を撫ぜた時、やっと我に戻ったシルキアはぼつりと呟いた。もっと早く言えばいいものを、いつも彼はこうなのだ。一人でポツリと言うことが、何度重要だったことか……。

今回も例には漏れず、ラジウが決して知らない重要なことを言つてのけた。けれど、めんどくさがつてかそのまま手を組むと頭の後ろに持つて行き、壁へと背を預けた。そして再び彼は窓の外へと目をやり緩やかな時間を過ごすのであった。

さて、出てしまったラジウはというと、未だにしかめっ面にぼこぼこ煙を出しながら床を踏み鳴らして廊下を歩いていた。

「まーったく。嫌になっちゃうよなあ、シルキアは。腰抜けなんだよ。」

頬を膨らませてぶちぶち文句を言い、早歩きで廊下を通り過ぎ彼は中庭に続く道へと足を踏み入れる。中庭の横を通る廊下でガッスガッスという足音が通り過ぎるのを聞いた者がいた。それは中庭で洗濯物をしていたクレクである。

彼はここに来てから掃除洗濯炊事と家事全般をなんなくこなしていた。それというのも、ラジウの側近で家事ができる人がいないからだ。いくら城に人が大勢いると言っても、皆自分が生きるだけで手一杯というところ。ラジウは所望されようが誰になんと言われようが、自分の身の回りのことを後から城に來た人間にやらせることを拒んだ。理由は”自分がまだ王ではないから”だった。

他人の上に立つ上で自分のことを認めてくれているとラジウが思ったのは最初に居た人物。クレク、シルキア、キヴィの三人だけだと伝えた。また、今はそんなことをすることより街の復旧に全力を尽くして欲しいとも伝えたことから、自分のことをあまり気にして欲しくはない。と言ったところが本音だろう。

ちなみに、街の復旧と言つてもラジウの父が作り上げた街の場所では、魔物が占拠してしまっているので、この城の内部という形になっている。

「あつ、ラジウ様。何処かお出かけですか？」

そんな家事全般をこなし今の静寂を楽しんでいたクレクは、真っ赤な顔で肩を怒らせながら廊下をずつかずつかと歩くラジウに首を傾げ、声をかけた。

「うん。ちよつと山賊のところまで。」

「へえ、そうなんですか、気をつけてくださいね。」

ラジウはクレクを見ようとせず、きつぱりと返答を告げてたつたかと歩いていく。返答が返ってきたことでいつも通りにクレクは言葉をついでしまった。しかし、しばらく経った後、慌てたような中庭へと木霊したのである。クレクが事の重大さにやつと気が付いたのだろ。しかし、時既に遅し。

ラジウは城の出口までやって来ていた。石造りの螺旋の階段を降り、賑やかな広間より外れた壁がくり貫かれて作られた出口。所謂裏門で彼は足を止めたのだ。

「あれ？」

何かある。そう思って足を止めた。視線の先にあるのは建物の影に覆われて暗く、黒い影としか表現できない。見ただけでは、それがなんなのかよくわからなかった。大きさはそこまで大きい物ではない、けれど小動物みたく小さくはなかった。中型の動物くらいの大さき。

ラジウはごくりと喉を鳴らし、決心を固めると慎重にその影へと足を進めて行った。だんだんと形がはつきりしていく影。手があり足があるのがわかった瞬間、ラジウは声を張り上げた。

「っ！？おい！クレク！！」

慌ててラジウは自分の一番信頼する相手の名前を呼んでいた。目の前に倒れているのは鮮やかな緑色を持つ少女だった。キヴィも緑色の髪を持っていたが、彼女は青緑といった青が混じったような色合いだったが、少女の髪は黄緑の方に近い色合いをしていた。森の色と一緒にラジウは思ったが口には出さない。それよりも早く、誰かを呼んで彼女を助けることが先決だった。

「どうしました!？」

ドタドタと足音がして、ラジウの声を聞きつけたクレクが駆けつけてきた。手には洗濯物を大量に持っていることから、あの後洗濯物をしっかりやっていたのだろう。

けれど、ラジウはそんなことお構い無しに彼の名をまた数度呼び、目の前で倒れている人物を指差した。

「クレク、これ!」

「っ!?!……これは……人……ですね。」

「なに、真剣に言っただよ!そんなの見ればわかるって!!」

駆け寄ったクレクは倒れている人影の傍に肩膝を立てて覗き込む。様子を見るように顔を見た感想が出たのだが、ラジウもそのくらいのことはわかるわけで思わず突っ込んでしまった。そして、彼の隣に走りより同じように少女の顔を覗きこんだ。顔色は青白く生気がないように感じられる。

クレクは確認するように彼女の手を取り脈動へと指を当てた。するとドクドクという強い鼓動が伝わってきて、ほっと肩を下へとおろす。

「ラジウ様。安心してください。この方。まだ生きてます。」

クレクの言葉に顔を彼に向け、ぱあっと目を輝かすラジウ。心底安心したのか大きく息を吐いてから頷き、立ち上がると拳をぐっと握り締めた。

「良かったあ！じゃ、医務室に運ぼう！」

「ええ、そうしましょうか。」

ラジウが少女に手をかけて起き上がらせようとするのを見て、クレクは微笑ましそうに頬を綻ばせた。しかし、ラジウも子供、いくら相手が少女だからと言って運ぶには重い。なかなか持ち上がらないのを見かねると、クレクは彼女を軽く抱き上げた。そして、あっと大口を開けて自分を見上げているラジウへと、目線で城の中へ行くことを合図する。

ラジウはちえっと小さく口を尖らせて踵を返した。医療室に向けて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2051f/>

ウィズアウト

2011年10月14日21時10分発行